
ラブドワン

山田@

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブドワン

【Nコード】

N6056H

【作者名】

山田@

【あらすじ】

「人の話をよく聞くこと」をモットーとする普通の高校生・春風は、ひょんなことから学園の王子様と接触を持つ（※トイレで）。王子様とツツメンと愉快な仲間たちによる、笑いあり涙ありの青春譚。BL作品です。

ボーイズラブ

0. プロローグ（前書き）

※ B L（♂×♂）小説ですが、ストーリーの都合上、男女の恋愛も含まれます。

0. プロローグ

side…?

人の話をよく聞くこと。

これは究極にぐうたらで面倒くさがりの母親が、息子の俺に唯一残した大変役に立つ教訓だった。

「聞くだけでいいの？ カンタンすぎない？」

当時の俺は尋ねた。小学校に上がって間もない頃だから、十年近く前のことだ。

母はすいと横目で俺を見て、ことさらゆっくりと緑茶を啜った。

「まだまだ子供ね。聞くだけってのが難しいんじゃない」

そして彼女はおもむろにリビングを指した。促されるまま目を向けると、テレビの前で転がってへらへら笑っている父親の寝姿がある。

「父さんの仕事の話を聞くの、簡単だと思う？」

俺は首を横に振った。化学系の研究職を務める彼の仕事話は、長い上に非常に難解だ。そもそも聞き手が単語の意味すら知らないことを分かっていないらしい。聞いている方としては苦痛としか言いようがない。

母はほんの少しだけ目元を和ませ、俺に尋ねた。

「人はなぜ話すと思う？」

「……自分のことを知ってほしいから？」

「まあ、それもあるかもね」

「ちがうの？」

「違かないけど。要は喋りたいから話すのよ」

それじゃまるで揚げ足取りだ。不満たっぷりに見上げたら、彼女はひょいと片眉を上げてみせた。

「知ってほしい、喋りたい、だから話す。理由なんて探せばいくらでもあるけど、帰結する場所はどれも同じ。」

結局、聞いてほしいから人は話すの」

当然のことにように思う。未整理の心中のまま頷けば、母は珍しくその唇に明確な笑みを浮かべた。

「聞いてほしいからとりあえず喋るけど、それを上手に聞き遂げる人は案外少ない。特にこのご時世はね」

自分で精いっぱいだから。ぼそりと空に放られたその言葉は、俺の耳にもかろうじて届いた。

母は椅子の背もたれに腕を寄せ、横向きに座り直した。そうして身体ごと俺に向ける。

「人間って案外現金にできているの。話を聞いてもらうだけで救われることだって、ごまんとある」

母は白い手を俺の頭にぽんと乗せた。俺とはちつとも似ていない、切れ長の目が俺を見据える。

「スーパーマンになれとは言わない。だけど、人を救える人間になって欲しいの。」

あんたならきつとできるから。ねえ、春風」

両親が飛行機事故で帰らぬ人となったのは、この日から一週間ほど後のことだった。

この「人の話を聞く」というスキルは俺の性格にも合っていたし、この能力を必要とする人間はそこから中にゴロゴロといた。亡き母の唯一の教えは、俺の人生をそれなりに助けてくれた。

未だにこの教訓は、俺の座右の銘として心の中でしっかりと根を下ろしている。

1. 王子様と春一番

side…春風

音もなく桜の花弁が舞っている。無数の白い軌跡の忙しなさから、きつとこれが春一番とかいうものなんだろう。しかしそれは窓一枚隔てた向こうの世界のことであって、花弁も風も吹き込むこともなく、いたって平和な昼休みの我が教室、二年三組。

休み時間特有の喧騒の中、一際騒がしい足音を伴に、ひとりの男子生徒が駆け込んできた。

黄色いパーカーに後ろでくくった黒い髪、がに股気味の見慣れた姿勢。昼食を買いに出ていた俺の友人、松田は、凄まじい勢いで窓際の俺の席まで走り寄り、拳を力いっぱい机に叩きつけた。

「カホちゃんと伊吹が付き合ってるってホント!？」

頭突きでもかましてきそうな剣幕に若干引きつつ卵焼きを呑みこんで、松田の質問を反芻する。カホちゃん……ああ、花歩か。柔らかくウェーブを描く栗色の髪、黒目がちの丸く大きな瞳。小動物じみた愛嬌をもつ可憐な俺の幼馴染は、温厚で人当たりのよい性格も手伝って、学園内でも男女別なく人気が高い。

その花歩が”伊吹”と付き合っている、と。

「……知らねーよ。あいつそういうこと滅多に口にしねーし。

そもそも、なんで俺に聞くかな」

「えー、だってお前カホちゃんと仲いいじゃん」

「えっ岡崎さんと仲いいの田中」

近くにいたクラスメイトに小突かれる。幼馴染なんだよ、と簡潔に説明してやれば、なんとも微妙な顔をされた。気持ちは分かる。いまいちぱっとしないフツメンの俺と、学園のアイドル的美少女では、どう考えたって不釣り合い極まりない。

「いいんだよハルのことは。どうせ付き合うとかねーだろーし」

松田はクラスメイトを退けつつ自分の席、つまり俺の一つ前の席で、椅子の背を抱える形でどっかりと座りこんだ。いそいそとビニール袋から焼きそばパンを取り出す。先程の様子を見るに、袋の中身も気にせず振り回しながら走ったのだろう、パンは無残にもひしやげている。

「そんなことより伊吹だよ伊吹！ 俺たち皆のアイドルを一人占めしやがって……！！」

「別にいいだろ、美男美女で」

「よくない！ 悔しい！！」

「まあでも、万が一にも勝ち目ねーよお前」

「そういう哀しいこと言わないでくれるハルちゃん」

伊吹といえば、才色兼備を絵に描いたようなイケメン君だ。学年首席でバスケット部のエース、それらを鼻にかけない気さくで親しみやすい人柄で、学内にファンクラブまであるとかないとか。運動神経だけが取り柄の残念系男子の松田が相手取るにはさすがに荷が重いだろう、どうでもいいけど。唐揚げを口に放る。

「あーあ、世の中って不公平だよなあ。顔も頭も性格も良くて金持ちで運動もできてモテてモテてモテて！！」

ああいう完璧超人には、俺みたいな悩める男子高校生の気持ちなんて分かんねーだろうよ」

「お前でも悩みとかあるんだ」

「ハルちゃんひどい」

松田はしなしなと机に突っ伏したと思ったら、椅子を蹴飛ばし力強く立ち上がった。

「くっそう、あの王子様め、俺らのアイドル花歩ちゃんを誑かしやがって！ あんだけモテるくせにまだ美女をはべらすというのか！そしてそれがほんとに出来ちゃうヤツが憎い！ イケメンが憎いよお母さあああん！！」

松田の演技めいた悲壮な叫びに、ノリのいい男子たちが便乗して喚き出す。

学年が上がり新しいクラスになって一週間。徐々に慣れてきて分かったのは、いい意味でも悪い意味でも、このクラスは騒がしいということだ。どうもノリきれない俺がここにいるが、あまり気にされてはいないらしい。地味って性質もこういう場ではありがたい具合に役立つものだ。

そして嵐の中心、俺の目の前では、ハイテンション極まりない松田がはしゃぎすぎて咽ていた。慌ててビニール袋からコーラを取り出す友人を呆れ半分に眺めつつ、ふと、ひしゃげた焼きそばパンが頭をよぎる。

「おい松田！」

声をかけるも一足遅く、舞い上がる黒褐色の砂糖水。教室は悲鳴と爆笑で満たされる。

向かいに座る俺は、勢いよく噴き出すコーラを見事に浴びたのだった。

＊ ＊ ＊

寒い。剥き出しの腕を擦る。この季節、半袖Tシャツ一枚では若干寒い。

俺は諸悪の根源である目の前の丸い背中を睨みつけた。松田は何やら熱心に机に向かっており、頭を動かす度に、一つにまとめた黒い髪がゆらゆらと揺れている。

松田にしては珍しい、いつもは寝てるか漫画読んでるかってところなのに。こんなつまらない授業に、よくもそこまで夢中になれるものだ。

毎回思うが、英語ってのは何かしら催眠効果があるんじゃないかな

うか。なぜにこんなにもつまらないのか。ちょっと目を離すと、何をやっているのかすらさっぱり分からなくなる。教科書のどこだこれ……こっそり隣を窺う。少々ワルそうな、いわゆる不良な雰囲気醸すその男子生徒は、授業など見向きもせず、膝の上の週刊少年ジャンプを熱心に読みふけていた。

なんだか急にやる気が失せた。俺は鞆から携帯を取り出し、机の下で操作する。ネットゲームでもやる気でいたが、ふと思いついて、幼馴染にメールを送ってみることにした。

『伊吹と付き合ってるってほんと？』

授業中なので返事は期待できないが、口で直接聞くよりはいいだろう。壁に耳あり障子に目あり、松田のようなヤツに聞かれると厄介だし。

花歩は大事な幼馴染だ。多分向こうもそう思ってくれている。しかし思い返してみれば、俺たちは恋愛事に関して、互いに干渉することはほとんどなかった。

俺も花歩も、過去に恋人がいなかったわけじゃない。恐らく聞けば答えてくれるが、聞かねばずっと教えてくれない。逆に特に問われたこともない。別にそのことに不満はないが、今回は野次馬根性というか、ちょっと気になってしまう。

なんてったって、相手はあの伊吹だ。

眉目秀麗、頭脳明晰、スポーツ万能（バスケの腕は全国区とか）。さらにすごいのが、これだけ出来るってのにまったく驕ることなく、誰にも愛され慕われる人格者であること。ついたあだ名が「王子様」。

最初にこの話を聞いた時、そんな漫画みたいな出来すぎ人間いるもんかと俺は鼻で笑ったものだ。けれど一年前のある日、廊下ですれ違う際に姿を一目見ただけで、俺はその考えをすっかり改めた。

目を引く美貌、人を気遣う優しい声、ずっと自然に伸びた姿勢。そこにいるだけでがらりと空気が変わるような、煌びやかで圧倒的な存在感。ああいうのをカリスマとでもいうのだろう。

コツンと、身近で聞こえた微かな音で、俺は現実世界に引き戻された。

顔を上げれば、松田が傍らの窓を指している。

開け放たれた窓の外では、数クラス合同の体育が行われていた。赤いジャージ、俺たちと同じ二年生だ。今日の授業はサッカーらしい。

それがどうしたと松田に問おうとして、ふと見覚えのある姿を見つけた。一際小さな体躯に、ふわふわの長い髪。

花歩だ。見慣れているとはいえ、相変わらず癒される美少女ぶり。彼女の表情は俺の脳裏にすぐに浮かぶ。はにかんだ笑顔は天使のよう愛らしいのだ。

そんな笑顔を向けられているのは、花歩と並んでもまったく見劣りしない、凄まじいほどの美男子で。

「やっぱ怪しいよな、あの二人」

松田が椅子を傾け上半身をこちらに寄せ、小声で話しかけてきた。正直、ちょっと驚いた。女子のうっとりした視線を一身に集め、花歩と楽しげに談笑している男子生徒。

眩いほどに上品で優しげな笑みを浮かべた、学園の「王子様」、伊吹聡介その人だった。

「へえ、やっぱ絵になるな」

思わずそう溢すと、松田は嫌そうな顔をする。

「お前、悔しくないわけ？ 二組のサキちゃんも、九組の愛沢さんも、四組のみっちゃんも、みーんな伊吹の虜になっちゃったんだぜ？」

「誰だよそれ」

「その上俺らのアイドル、花歩ちゃんまで！ ううう悔しい！ 悔しいぞおおお！」

ってなんないのかね春風クンは」

「なんねーよ」

むしろ伊吹に張り合おうとする松田の神経が分からん、惨めにな

るだけじゃねーか。しかし松田は「男としての矜持」がどーだのこーだの語り出す。ああ先生の視線が痛い。手を返して前を向くよう促すが、松田はちっとも察してくれない。

「そこで、そんな伊吹にちょっとした嫌がらせを講じてみた」

そう言って俺にルーズリーフを一枚手渡したところで、松田は教師に名指しで注意された。俺にそれを読むよう目で念を押し、ようやく正しい姿勢に戻る。

俺は渡されたルーズリーフに目を移した。松田特有の、男にしては丸っこい字が並んでいる。気だるさに逆らう気もなく片肘をついて、とりあえず読んでみた。

『伊吹君へ』

突然のお手紙、失礼します。でも、どうしても伝えたかった。今も君を思うと、胸が苦しくて仕方がない。

きっと迷惑でしかないのだろうけれど、どうか僕のために、迷惑を承知で言わせてください。

君が好きです。

一目見た時から、僕の心は君にとらわれてしまった。瞼を閉じると遠目で見た君の笑顔が鮮明に浮かび上がってくる。君が欲しくてたまらないんだ。ほんとうに好きで、大好きで、どうすればいいかわからなくなる。

応えてくれとは言わない。けど、君も僕と同じように愛してくれたら、どれだけ幸せなことだろう。あり得ない空想を浮かべ、僕は今日も涙を流す。

ごめんなさい。男からの告白なんて、きっと気味悪く思うだろう。でも、この熱情の一欠けらでも、君に伝わることを、そして君の胸に少しでも響いてくれることを願っています。

二年三組 WC』

「アホじゃねーの」

うわ声に出しちゃった。気色悪いラブレターをしたためた本人である松田は俯いて肩を震わせている。何やら熱心にやってんなと思っただら、こんなもん書いてたのか。くっただらねえ。そもそもWCって誰だよ。トイレじゃねーか。

「読み終わった？ どうだい俺の力作は」

松田が懲りずに振り返り、声をかけてくる。

「くだらないとしか言いようがないな」

「ンだよつれねーなあ。何かないのかよ、胸がじーんとしたとかさあ」

「胸やけがしました」

「ひっでえ！」

淡々と流れていた英語が止まった。先生が青筋を浮かばせてこちらを睨んでいる。松田は肩をすくめて前に向き直った。俺の手からルーズリーフをかつさらって。

松田は再び机にへばりつく。何してんだろうと眺めていたら、すぐに身を起こした。

窓に向いてニヤリと笑う。

右手には、うっすらと罫線が浮かんだ、ルーズリーフ製の紙飛行機。

「……おい、松田」

まさか、まさかとは思うけど……やりやがった。

ルーズリーフで折られた紙飛行機は、木の枝から飛び立つ鳥のようになり、すい、とごく自然に青空へ飛び出して行った。

あーあ。俺は窓の外に目を向ける。紙飛行機はいい風に乗れたのか、飛距離を伸ばしながら危なげなく空を進んでいく。

とはいえ、ターゲットはグラウンドの中央にいる。さすがに校舎から届くわけがない。呆れつつもなんとなく視界を移すと、空を見上げている男子生徒がひとり目に入った。長身に柔らかな茶髪、遠目でも分かる端正な顔立ち。

伊吹だ。

ぎくりと身体が硬直する。なぜだろう、彼はただ、空を仰いでいるだけなのに。

傍らの花歩はサッカーコートに向いたまま、級友を応援していて気づかない。伊吹の首の角度が段々と小さくなっていく。視線を辿ると、やはり落下を始める飛行機があった。

……すげえ。気づいてやがる。

松田に伝えようと視線を戻せば、ヤツは今まさに第二弾を大空に放とうと構えている所だった。……まだあったのかよ。

二つ目の飛行機が松田の手を離れ、空を走る。発射を認め、俺は再び王子様に目を移した。

「うわ」

ばっちり目が合った。

遠目からでも分かる、肌が粟立つほどに秀麗な見目形。

吸い込まれる。

質量のある風がつま先から天辺まで走り抜け、ビビった俺は思わず机に突っ伏していた。

心臓が乱暴に脈打っている。びっくりした。これはあれだ、未知の感覚に出会ったときの恐怖に近い、と思う。

隣から「何してんのお前」、なんて声が聞こえる。俺に言ってるのか松田に言ってるのかは分からないが、俺は顔を上げる元気が出ない。

なんだあれ、心臓に悪い。何つー目力。美しさは罪ってやつ？なるほど、俺は今初めてこの身で過ぎたる美貌の恐ろしさを実感した。

机に頭を預けたまま、俺はもう一度窓の外を見やる。

花色の空を背景に、新たな紙飛行機が悠々と飛び立っていった。

……一体いくつ作ってんだあいつ。

なんだか疲れた。俺はそのまま目を閉じる。しばらくすると睡魔が優しく押し掛かってきた。もう寝てしまおう。身体のをそっと緩める。

ようやく松田の行動に気付いた英語教師の雷を遠くで聞きながら、俺は意識を手放した。

＊ ＊ ＊

放課後になって、花歩からメールが返ってきた。

『伊吹くんとわたしが？』

違うよ、あの人彼女いるし。

てゆーか、今日部活ないから一緒に変えろ^^

久しぶりにハルちゃんのご飯食べたいなv』

意外にもあっさりと否定された。松田にその旨を伝えたら、「一緒に下校とは何事だ」と妙なところで絡んできた。鬱陶しい。

とりあえず一緒に帰ろうとのお誘いがあったので、教室にいる、と返信しておいた。

ほんと俺が花歩の教室に迎えにでも行ければよかったんだろうけど（松田も撒けるし）、残念ながら俺は、手元にあるこの学友のノートを書し終えねば帰れない。

というのも、先程の英語の時間、松田と俺はさっぱり授業を聞いていなかったわけだが、驚いたことに次の時間にはおさらいの小テストがあるらしい。下手な点を取れば面倒な宿題を課されるこの小テスト、落とすわけにはいかない。しかし、勉強しようにもノートは真っ白なわけで。

そこで俺たちは、教室に居残っていた数少ないクラスメイト、隣の席の不良クンに泣き付いた。名前を山本というらしい。隣の席だというのに、俺はあまり話したこともなかったが、松田が去年同じクラスだったらしく、松田のしつっこい懇願に、最初は心底めんどく

さそうな顔をしていたが、最後には根負けして貸してくれた。ノートを残し、本人はそのまま帰ってしまったけれど。

几帳面な字で書かれたノートは読みやすく、大変分かりやすかった。ジャンプなんか読んでたくせに、一体いつ書き込んでいたんだろうか。

松田から山本とやらの人となりを聞きながらノートを写していたら、しばらくして、教室のドアが控えめに開いた。

「ハルちゃん、終わった？」

ドアの影からひょっこり現れたのは、自然に曲線を描く長い栗色の髪と、大きい造りの茶色い目、全体的にふわふわとした輪郭で、まるで絵本に登場する天使のように愛くるしく可憐な美少女。

「花歩」

「かゝほちゃああゝん！！」

外見だけでなく気も優しい俺の幼馴染は、クラスの女子ならまず顔をしかめるような鬱陶しいテンションの松田にも嫌な顔一つせず明るい笑顔を向け、俺の隣、つまり山本の席に腰かけた。膝に乗せた鞆を抱き込んで、机上のノートを覗きこんでくる。

「がんばってるね、英語？ あ、三組ここやってるんだ」

「もう少し待ってくれ。写しちまうから」

「いいよゆっくりで」

ふわりと笑う。我が幼馴染ながら、やはり可愛い。花開くような、とはまさしくこのような笑顔だろう。松田なんかはデレデレとみっともなく鼻の下を伸ばしている。

早速脱線しそうな松田の頭をノートで叩いて机に向かわせる。どうにも集中できていない様子だったので、一緒に帰りたいならさっさと終わらせろ、と耳打ちしたら俄然やる気を出しやがった。……扱いやすいヤツではあるが、こいつの将来に不安を覚えないでもない。

かくして俺たちは真面目に机に向かう。花歩は隣で大人しく待ちの体勢に入っていたが、しばらくして、ふいにぼつりと声を上げた。

「ねえ、四時間目、ここから紙飛行機飛ばしてなかった？」

顔を上げた松田と目を交わす。紙飛行機といえば、松田が喜々として飛ばしていた、嫌がらせ以外の何物でもないラブレター。なんだ、気付かれてたのか。

「俺はやってない。全部こいつ」

「いやー、青空に夢を託してみたくなくてね」

あの気色悪いラブレターを一方的に託されるなんて青空もいい迷惑だ。胡散臭い松田の笑顔に呆れ果てる俺の隣で、花歩は純粋に疑問を湛えた表情で首を傾げた。

「夢を託すのに、なんで呪いの手紙？」

「呪いの手紙？」

松田を窺えば、あちゃー、と言わんばかりに顔を歪めている。

花歩は苦笑いを浮かべつつ、おもむろに鞆から白い紙を取り出した。三角形に折られたそれは、開くと紙飛行機に、更に開くと陳腐な呪いの手紙へと変貌した。定番のあれだ、三日以内に同じ内容の手紙を十人に渡さないと云々。

「お前、こんなものまで作ってたのか」

「え、他にもあったの？」

そーいや結構な量を作ってたっけ。花歩の問いに、開き直ったのか松田は得意げに鼻を鳴らした。

「ふっふっふ、俺ってば多才だからね。徳川埋蔵金の地図とか、校長先生の似顔絵とか、科学のウツチーと社会のトミ子ばあちゃんがデキてるっつースキャンダルとか」

「アホじゃねーの」

こいつほんと、労力の使い道を間違っている。

くだらない悪事が露見しても大して堪えていないらしい松田は、ペンを回しながら花歩に尋ねた。

「つーか、よく俺たちが犯人って分かったね」

「おい”たち”ってなんだ”たち”って」

花歩はにっこり笑って、小さな指で教室前方の窓を差した。

「外から見て、窓が開いてた教室って一つだけだったから。さつきワイシャツ見てここだって気付いたんだ」

一番端の窓の棧で風に煽られ揺れているのは、昼休みにコーラをひつかぶった俺のワイシャツ。ちなみに松田のTシャツはほぼ無傷だった。ちくしょう。

「でも、なんであんなところにシャツが？」

「それもこいつが悪い」

「面目ねえ」

「え、あれってハルちゃんの？」

隣でしれっとしていた友人に当てつけるように、とげとげしい口調を意識して俺が事情を説明してやると、花歩はころころと笑った。

「相変わらず楽しそうだよねえ、二人とも」

花歩の明るい笑顔に、松田はデレデレと相槌を打つ。いい気なものだ、被害は大抵俺の方へやってくるというのに。

窓から吹き込む柔らかな風と、視界にちらつく己のワイシャツ。

俺は深く深く溜息をついた。

ノートを写す作業も大方片付いた頃（ついでなので今日だけでなく以前の分も写している）、花歩がちよっとお手洗いへと席を立った。松田の「行っトイレ」なんて掛け声に「待っトイレ」と律儀に答えて出て行った花歩だったが、数分もしないうちに戻ってきた。

いわく、

「トイレットペーパーがない」

だそうで。

そうして俺は今、花歩に頼まれ男子トイレで紙を探している。

正直、男子は紙を使う機会もそうないし、棚を探しても見つからない。仕方ないので個室を物色していると、一番奥の個室に一つだけ、わりと余裕を残したロールが残っていた。

これ幸いとそいつを取り外し、一旦男子トイレを出る。視線を軽

く巡らせ廊下で待っていた花歩を捉え、走り寄ってくる彼女に戦利品を手渡した。

「ありがとー」

「あんまり他の男には頼むなよ、こんなこと」

「ハルちゃんだけだって」

ほんのり恥ずかしそうに笑って、花歩はまた小走りに女子トイレへと姿を消した。

……正直、今の笑顔はなかなかくる。世の男はこうやってあいつに落ちるんだろうなあ。

折角なので俺も用を足していこうとぎこちなく踵を返すと、ちょうど誰かが男子トイレに入って行くのが見えた。

俺は固まる。その人物は少し慌てた様子ではあったが、音もなく静かに、いつそ上品ともいえるくらい気配もなく颯爽と入って行った。別にそれはいい。誰だって一日数回は便所に行くものだ、そこには何の問題もない。

でも、俺の見間違いじゃなければあれは、

……伊吹、だよなあ。

なんだか凄まじい違和感を腹に感じる。あれだ、アイドルが用を足す姿を想像できない（したくない）のと同じ。そりゃいくら完璧とあったって伊吹も人間だし、トイレくらい行くだろうけど……なんだかなあ。

ぼーっと佇んでいても仕方ないので、俺もトイレに足を踏み入れる。そして今度こそ完全に固まった。

……やべ、個室入ってるよあいつ……。

別に王子様が学校でう○こするのに引いたとかじゃなくてだな、……紙、ないはずだよな。

俺はとりあえず用を足して、手を洗いながらしばらく様子を窺う。も、物音がしない。これはもしかしくなくても、途方に暮れているのだろうか。

……さすがに気の毒になってきた。

俺は早々にトイレを出て、廊下の鏡で髪型を直している花歩を捕まえた。

「花歩。トイレットペーパー、男子トイレに戻せるか？」

「別にいいけど。何で？」

「誰か個室に入ったみたいでさ。あれ最後の一個だったんだ」

「それは困っちゃうね」

花歩はすぐに女子トイレからロールを持ってきてくれた。受け取って札を言う。ついでに先に教室に行く言い置いて、俺は再び男子トイレに向かった。

個室の扉はまだ閉じたまま。まずは耳を澄ませて様子を窺ってみる。が、すぐに俺は思考をフリーズさせることになる。

密やかに聞こえる衣擦れの音と、重い溜息。微かに鼻を吸る湿った音。

なななな、泣いてる！？

てい、ティッシュがないくらいで泣くか普通！？

大いに焦りながらも、俺はとりあえず個室の前までおそるおそる足を運ぶ。しばらく逡巡するが、なるようになれと腹を決めて声をかけた。

「あの、ティッシュ持って来たけど、よかったら……」

いやになるくらい俺の声はよく響いた。冷汗が米神を伝う不快な感覚に耐えながら、意味もなく高鳴る心音を抑え返事を待つ。

そしてたっぷりの沈黙の後。

「……えーと、え？」

困惑した声が返ってきた。思ったよりも声音はしっかりしている。「だから、そこ、ティッシュないだろ？」

再び沈黙。カコン、と軽い金属音がしたので、確かめたのかもしれない。

……なんだ、紙が無くて参ってたんじゃないのか？

「困ると思って持って来たんだけど。必要ないか？」

そう問えば、曖昧な声が返ってきた。

「あー、うん、どうだろう。大丈夫だけど、でも要るかもしれない」
「どっちだよ」

「えーと、とりあえず投げてほしいな」

柔らかい口調で言われ、俺は天井とドアの隙間からトイレットペーパーを捻じ込んだ。

「ありがとう」

聞き惚れてしまうほど柔らかいお礼の声。けれど気のせいだろうか、どこか声が暗い。

いや、扉越しだったけど、さっきの物音だってまるで泣いているような様子だった。

「何かあったのか？」

気付けば声をかけていた。

相手があの学園のアイドル、伊吹だということを考えると、面倒なことをしたかなとも思うけれど。

「うん、彼女に振られちゃってね」

びっくりした。

いや内容にも驚いたが、まさかこんなにあっさり口を割るとは。絶対言い渋ると思っていたのに。やっぱり器が違うというか、大物というか。

そっと深呼吸して、平静を取り戻す。

「……そいつは災難だったな。理由を聞いてもいいか？」

「聞いてくれるの？」

「お前から言いだしたんだろ。気になるじゃねーか」

なんてったって、皆の憧れ、完璧超人と褒め称えられる学園の王子様が、まさか女子に振られるとは。何をやらかしたのか、気になるっちゃ気になる。

ふっと空気が揺れる。明るくはない笑う気配。

「彼女に言われたんだ。あんたは私のこと、本気で好きじゃないんだ、って」

……ああ、漫画とかでありがちな。

「なんでまたそんなことに」

「他の女の子に笑わないで、とか、もっと我儘も言っただけいいとか、前に怒ってたことがあるから、多分そのことだと思う」

「そんな彼女を想っての行動だろ？ 他の女子の嫉妬心を煽らないように」

「そう、そうなんだけど……」

一瞬、声に陰りが差した。

俺は無言で続きを促す。

「本気で恋なんてしたことないでしょ、って言われて、俺さ、『ああそうかも』って思っちゃったんだ。

……自己嫌悪というかなんというか、ヘコンじゃって」

最後の方は乾いた笑いを含んでいた。強がりとかそういうのじゃなくて、多分、俺に氣を使っているのだろう。別に顔も見えない相手なんだから、ぶちまけたっていいのに。

「……優しすぎるんだよ、あんたは」

こっちが辛くなるじゃないか。

微かな衣擦れの後、躊躇いがちにこもった声が向こうから発せられる。

「偽善的とは言われたことがあるけど」

「いんや。稀に見るいいヤツだよ。」

俺が思うに、彼女にそんなこと言われるくらいだから、あんた、予防線でも張ってたんだろ。全力でぶつかるのは怖いから」

「だから、」

「それは彼女が好きじゃなかったから、じゃあない。証拠に、お前今めっちゃくちやヘコンでるだろ。思わずトイレに引き籠るくらい。」

要は、お前は彼女が大事なんだよ、徹底的に。恋って多分、楽しいのかもしれないけど、怖いものでもあるんだろ。嫉妬とか束縛とか依存とか。そういうもので彼女が傷つかないように、お前は無意識に距離を取っていた」

いつでもどこでも、それこそ別れた後も、彼女が幸せでいられるように。慎重に、彼女のことを気にしながら、自分の気持ちに折り合いをつけながら、こいつは彼女に自由を残した。

それが正しいことかどうかは分からないけど、彼女を想っての行動だということは俺にも分かる。

並大抵では形が捉えきれないくらい、大きくて優しい思いやり。

「これを愛と取れなかった彼女も悪いし、それを見抜けず伝えられなかったお前も悪い」

思いのほか荒い声は大きく響いた。タイル壁に弾かれた残響が空気に溶けるにつれ、静寂がじわりと侵略してくる。

……しまった。ここまで言うつもりはなかったのに。

伊吹から反応はない。やはり怒らせただろうか。結構きついこと言ったもんな、俺。

落ち着いて考えてみると、急に恥ずかしくなってきた。泣く子も惚れるイケメンに恋愛談議ってお前。俺は金八先生か。

居たたまれなくて、誰が見ているわけでもないのに眼前の戸から顔を逸らす。視線を移した先に、鏡に映った自分が見えて、ここはトイレだったと思い出した。

……トイレでなに熱弁してんだ俺。

「まあ、あれだ。いつかそこんこも理解してくれる可愛い女の子が現れるさ！」

そう言い置いて、俺はダッシュでトイレを出た。悪いとは思ったが、やっぱものすごく恥ずかしい。花歩たちも教室で待ってるし！背後から「待って」とかいう声が聞こえたような気がしたが、空耳だと己に言い聞かせて走り続けた。

「ずいぶん長いトイレだったねえ、ハルちゃん」

「便秘かあ？ 水分摂れ水分」

教室に戻ると、帰り支度を済ませた二人が何とも不名誉な勘違いをしていた。

しかし違うと否定したところで、じゃあ何をしていたと突っ込まれるのも面倒なので、しかたなくその解釈で甘んじる。

「待たせて悪かったな」

「ほんとだよ。あんまり暇だったから思わずハルのノートに落書きしちまった」

松田のニヤけ面に殴りかかりたい衝動を抑えつつ、慌ててノートを確認すれば、ドラえもん達のサイヤ人だの、見開きいっぱい小学生レベルの落書きワールドが。

「何してくれんだお前！ しかもこれ全部ペンじゃねーか！」

「俺らの友情は消しゴムなんかじゃ消えないんだぜっ」

「そんなんで消える友情の方を見てみたいわ」

「ねえねえ、このピッコロさんなんて上手に描けたと思わない？」

「花歩まで……」

なんだかすごく疲れた。身支度を済ませ、テンションの高い二人に挟まれ校舎を出る。

空はもうすっかり紅い。母体から千切れた小さな雲が、昼の紙飛行機を彷彿とさせ、ふと思ひ浮かんだ疑問を花歩に聞いてみた。

「伊吹に彼女がいるって言ってたよな。どんな子知ってるか？」

花歩はきょとんと俺を見る。

「どんな人って……話聞いているとキツめの子っぽいなあ。同じ学年って言ってた気がするけど。なんで急に？」

「いや、なんとなく気になって」

「気になるといえば、ハルちゃん、シャツ持ってきてないよね」

「あ」

普通に忘れてた。

「もっと早く教えてくれよ……」

「だってわたしも今気付いたんだもん」

今から取りに戻るのもさすがに億劫だが、諦めきれずに校舎を見上げる。ここから干したシャツが見えるはずはないが（昇降口側から教室の窓は見えない）、ふと、窓辺にいた一人の男子生徒と思いつき目が合った。

柔らかい色合いの茶髪に、上品で優しげな、まるで絵本の王子様のように整った顔立ち。

……伊吹だ。何これ、すっげーデジャヴ。

あっちはあっちで呆気に取りられている。なんだろうとしばし考え、「行かないの」と花歩に腕を引かれて考えを放棄した。

大きく息を吐く。もう疲れた。考えたってしょうがない。どうせそう会うこともない人物だ、接触を避けるだけで十分だろう。

気落ちした俺に目ざとく気付いた二人が、心配そうに顔を覗き込んでくる。

「ねえ、やっぱりお腹痛い？ トイレ行く？」

「その公園に公衆便所あるぜ」

……根はイイ奴らなんだけどな。

2. Mr. トイレット

side…伊吹

清々しい朝がきた。

登校中の限られた時間内でも数え切れぬほど投げ掛けられる挨拶に障りのないよう笑顔で答え、教室に身を滑らせる。

早速ドア付近で屯していた女の子のグループに声をかけられ足止めされて、俺はふと昨日から気になっている悩みの種について聞いてみた。

「WCという人に心当たりはある？」

ぱっちり見開いた瞳がいくつも俺に向けられる。

「……トイレ？」

ですよねー。

あきらめ半分に一人で頷いていると、なににどういうこと、と堰を切ったように女の子たちに詰められる。いつものアプローチとは違った勢いに少しだけたじろぎ、考えを改める。うん、俺が彼女たちの立場でもこれは素で気になるだろうな。

かといって、彼女たちには悪いけど素直に答える気にもなれず。安易に口にするんじゃないかな、どうやって誤魔化そう、などと頭を廻らせていたら。

「おっはよー聡介！」

挨拶とともに肩に軽い衝撃。オレンジがかった明るい茶髪頭が目に入って、俺は密かに安堵の息を吐いた。

「タカ」

適度に遊ばせた明るい茶髪にぱっちりとしたアーモンド形の目、テレビの中のアイドルのような垢抜けた雰囲気、俺の友人、タカは、咄嗟にこの場の異様な空気を察してくれたらしい。

「聡介聡介、俺今日数学当たるんだけどさー、確認したいからちょ

つとノート見せてよ」

タカは女の子たちに「こいつ借りるね」と詫びをかけ、俺の腕を取る。引っ張られるまま俺は女子の包囲網を脱することに成功し、無事に自分の席に着くことができた。

「……助かったよタカ」

「数学のノートな」

「はいはい」

偉そうにふんぞり返っているタカにノートを手渡して、横目でちらりと教室の前ドア付近を盗み見る。先ほどの女の子たちは顔を寄せ興奮気味に囁き合っており、かといっていつもの浮足立った雰囲気ではなくて、どうにも”奇異”の空気が漂うものだ。

「なに、お前なんかしたの？」

タカも女の子たちの異変に気付いたらしく、不思議そうな表情を向けてくる。基本的に俺は人と接するときには細心の注意を払っているし、彼女たちのそれを珍しい反応だとも感じているのだろう。まあ、タカは別に気を使うような仲間でもないし。

「WCというイニシャルについてどう思う？」

昨日から俺の頭を占めるこの二文字。

ぽかん、と呆けていたタカはおもむろに眉をしかめつつ、低い声を絞り出した。

「……トイレ？」

「だよなあ」

予想通りの回答とはいえ、少しばかり気が落ちる。椅子の背もたれに身体を預けてこれ見よがしに溜息を吐けば、タカに落ち着きなく机を揺すられた。

「えっ何それ、何それ!？」

「ちよつと運命感じちゃってさ」

「トイレにいい？」

タカはいよいよ不審を露わに身を乗り出す。俺はブレザーのポケットから折り畳んだルーズリーフを取り出して、タカに手渡した。

恐る恐る受け取ったタカは、小さく畳まれたそれを丁寧に開き、無言で文面に目を走らせる。段々強張っていくアイドル顔を面白いなど見守っていたら、ついに彼は米神に冷や汗を浮かべつつ、真っ青な顔で俺にルーズリーフを突き返した。

「お、おま、これに運命感じちゃうってちょっと」

「ああ、内容はあんまり関係ないよ。イタズラだろうし」

「だよな！　だよなあ！！」

乾いた笑いを浮かべる友人を余所に、俺はもう一度紙面を読み返す。

昨日の四限、体育の授業中、ルーズリーフ製のその手紙は、紙飛行機として風に乗ってやってきた。

内容はいわゆる恋文で、しかも文面から察するに、差出人は男らしい。丸みを帯びた字体、所々震えているのは笑いでも堪えていたのか。そして文末に添えられていたイニシャルが”WC”だったわけだけだ。

「俺、この人を探しててさ」

「返事でもすんの？」

「いや、お礼を言いたいんだ」

「はあ！？」

一から説明するのは難儀なので、俺はとりあえず笑って誤魔化した。タカは嫌っそうに顔をしかめるが、周囲からは小さな悲鳴が。頬に首に、熱っぽい視線を感じる。

どう考えても気付かない距離ではないし、無視するのも感じが悪い気がして、さりげなく笑みを向けると、こちらを窺っていた女の子たちは頬を紅潮させ更に歓声を上げた。我ながら八方美人といふかなんというか、少しばかり情けなく思う。

いつもならばここで美咲の綺麗な顔を思い浮かべて、罪悪感を覚えたり自己満足したりするのだけれど、その彼女には昨日別れを告げられた。

それはもちろんひどく悲しいことだけれど、意外にも、俺はどこ

か清々しい気持ちでいた。

昨日の放課後、別れるには説得力に欠け、けれど否定することもできない、もやもやした理由で彼女に振られて落ち込んでいた俺は、見知らぬ男子の素直な言葉に目を覚まされた。俺を慰めるわけでもなく、彼女の悪口を言うでもなく、俺自身でさえ気付かなかった真実をそっと照らし出してくれた。

まあその現場がトイレだったわけだけど。

そのときの俺は茫然としてしまって、さらについ癖でズボンを下ろして便器に座っていたため、出て行った彼をすぐに追うことができなかった。慌ててズボンを履いて廊下に飛び出すも、人影はすでに見当たらなくて。

しばらく廊下で呆けていたら、開け放しの窓から覚えのある声が聞こえてきた。

俺は慌てて窓に駆け寄った。男女三人組が賑やかに昇降口から出てきたところで、そのうちの一人がふと顔を上げた。ばちりと音がしたかと錯覚するほど、しっかり目が合う。

凄まじい既視感。すぐに理由は思い至った。

四限の体育の授業中、教室から紙飛行機を投げていた、そして俺と目が合った男子だ。

なんという偶然。なんというトイレとの縁の深さ。

かくして、俺は胸中ひそかにその男子を「Mr. トイレット」と名付けたのだった。

＊ ＊ ＊

二時限目の後の、ほんの少しだけ長くとられた十五分休み。

いつにも増して教室が騒がしいと思ったら、岡崎さんが一組にやってきました。俺を探しているようだったので教室前方のドアまで足を運ぶと、にっこり笑って迎えられる。

緩やかなウェーブを描く栗色の髪に、光を湛える飴色の大きな瞳、これほど騒がれるだけあって、本当にかわいらしい女の子。岡崎さんは簡単な挨拶のあと、抱えていた資料の束を俺に差し出した。

「あのね、明日の離任式のことなんだけど」

……トイレ君騒動ですっかり忘れてたけど、俺は平然と資料を受け取った。

俺は中央委員の委員長、岡崎さんは副委員長だ。中央委員長はそのまま生徒会の議長に任命されるため、中央委員は上からの命令が伝わりやすく動かしやすい委員会として、何かと学校行事に駆り出されることが多い。明日の離任式も進行を任されていた。

「各教科の先生方からメッセージが届いたから、一応渡しとくね」

「うん、ありがとう」

俺の礼に、岡崎さんはにこりと笑顔で返した。俺の彼女もかなり美人だったけれど、岡崎さんは美人というよりはとにかく“可愛い”。その愛嬌は男心も女心もくすぐるらしく、俺と親しく喋っていても他の女子から敵意の視線が飛んでこない、珍しい相手だった。かといってこれ以上の話題もないし気遣いが必要な相手でもないし、俺は資料を受け取りじゃあこれで、と足を踏み出しかけて、ふと思いついた。

一年以上一緒に仕事をしているんだから、彼女の人は把握しているつもりだ。真剣に考えてくれるはず。

「WCってイニシャルの人、知ってる？」

藪から棒な俺の質問に岡崎さんはきょとんと目を丸くし、ちょっと考え、躊躇いがちに声を発した。

「……ウォータークロゼット？」

「だよね……」

WC＝トイレ説、今のところ打率は十割。俺も真っ先に思い浮か

べたもんなあ。

不思議そうに見上げてくる岡崎さんにどう説明すべきか頭を巡らせていたら、小柄な彼女の背後から、見慣れた明るい茶髪頭がひよっこり現れた。

「あ、やっぱり花歩ちゃんだ。こんちは！」

「こんにちは高階くん」

「タカでいいってばもー、俺たちの仲でしょっ」

タカはちょうど胸の位置にある岡崎さんの頭をぐしゃぐしゃと撫で回す。やめてと言いつつも笑顔でされるがままやらせている岡崎さんは、大層心が広い人だ。

「で、伊吹くん、WCって誰なの？」

岡崎さんはタカの手を受け止め、俺を見上げて尋ねてきた。

タカは呆れ顔を俺に向ける。

「まだ言ってたの、それ」

「ああ、どうしても捕まえたくて。このWCって人に、会ってお礼を言いたいんだ」

後半は岡崎さんに向けて。そうなんだ、と真摯に受け止めてくれた岡崎さんは、しばし考え込んで、そしてぽんと手を打った。

「WCっていうと、チエ子おばあちゃんがそうじゃない？ 渡辺チエ子、でしょ？」

タカが盛大に噴き出した。

「……それじゃCWじゃないかな？」

「でも最近じゃ、英語でも姓名の順で名乗って通じるって聞くよ」
そうかもしれないけど。しかしそうになると、チエ子ばあちゃんが俺にラブレター……想像して気持ちのよいものではないな。そもそも俺の探し人は、男だ。

一人腹を抱えて笑っていたタカはなんとか態勢を立て直し、何やらもの言いたげに、そして心底楽しそうに俺の肩をばしばし叩く。
鬱陶しいから笑顔でぞんざいに払ってやるも、タカは気にした様子もなくまた口を開いた。

「そういえばさ。チエ子ばあちゃんといえば、ウッチーと出来てるって噂、やっぱデマだったぜ」

「当たり前だろ」

「ちょ、気付いてたなら教えてくれてもよくない！？俺本人に確認までしたってのに」

気付くも何も、今年六十を迎えるベテラン教師チエ子ばあちゃんと、白衣の似合う三十歳イケメン化学教師ウッチーが恋仲だなんて、はっきり言って狂気の沙汰だ。

「チエ子おばあちゃんとウッチーが？ずいぶん年の差カップルだね」

「うん、俺大恋愛だー、ってぞくぞくしちゃったもんよ」

それは寒気というものでは。

「なんでまたその二人？」

「ああ、紙飛行機に書いてあったんだよ。ほら、花歩ちゃんも一緒だったろ？昨日の体育」

「ああ、あれ。そういえば、松田くんもそんなこと言ってたかも」

……松田くん？

「松田って三組の？俺サッカー部で一緒だぜー」

「そうなの？面白いでしょあの人」

「バカなだけだって」

「岡崎さん！」

飛び出した声は思いの外大きく響いた。目の前の二人はびくりと肩を揺らして俺を見る。

「その松田って人、紙飛行機と……」

どんな関係があるのか。目で問えば、岡崎さんは怪訝そうに首を傾げて、けれどあっさりと答えてくれた。

「昨日紙飛行機を飛ばしてたのが、その松田くんなんだよ」

＊ ＊ ＊

岡崎さんのおかげで“Mr. トイレット”探索の道は大きく前進した。昨日紙飛行機を飛ばしていた男子生徒は、松田君というらしい。

俺は昼休み、タカを引き連れ三組に向かっていった。

「なんで俺まで一緒なの」

「同じサッカー部なんだろう？ 紹介してよ」

「つつても、あいつ半幽霊部員だしなー」

目的地は階段を挟んで二つ隣の教室。実にあっという間に辿り着いた。

俺たちはまず手始めにとこっそり教室を覗き込むと、早くも入口付近で談笑していた女の子たちと目が合った。

直後、凄まじい絶叫。室内はあっという間に悲鳴やら歓声やらで沸き上がる。

女子からは熱い視線が、男子からは不快の視線が。いつもより多い気がするのは、見目の良いタカが一緒だからだろう。他クラスに行くとも毎度のことなので気にしないことにする。

同じく人目は慣れっこなタカはマイペースにも目的の人物を見つけたらしく、隣で声を張り上げた。

「まーっただあー！」

窓際の真ん中辺り、黒い髪をちょんまげのように纏めた男子生徒が、机を漁る動きを止めてこちらを見た。俺たちを認めて目を丸くする。

「松田！ ちょっとこっち来い」

「はあ？」

松田君とやらは不審を露わに、机から取り出したファイルを小脇に抱え、嫌そうな顔を隠そうともせず俺たちの元にやってきた。パ

カーのポケットに手を突っ込んで、ふてぶてしくふんぞり返る。

「かーっ、イケメンが二人揃うとまた圧巻だね。ケツ！」

ずいぶんと不機嫌な松田君は、「で、なんの用」と低く問う。

タカがこちらを窺うのに、俺は首を横に振って答えた。

「違う。トイレ君じゃない……」

「はああ？ トイレ？」

俺が探しているトイレ君は、こんな一度見たら忘れられそうになり濃い顔じゃなくて、印象に残りにくい地味な……ええと、もう少し理知的な顔立ちだった。そもそも、髪形からしてかなり違う。さすがにもっと短かったはず。

結論、別人だ。

「なあタカ、この人頭大丈夫？」

「俺も心配になってきてさあ……」

サッカー部二名は憐みの視線をこちらに寄こす。俺が大丈夫の意を含め笑ってみせると、タカは苦笑いを、松田君は心底嫌そうな顔をした。

「つか何、そのトイレ君て」

そうだ。このままじゃ俺はただの変人の汚名を着せられてしまう。

「キミ、昨日の四時間目、紙飛行機投げただろ？」

俺はポケットから件のルーズリーフを取り出し、松田君に手渡した。

松田君はつまらなそうに受け取って紙を開き、ギャグ漫画のごとく盛大に嘖き出した。

「本人受け取っちゃったのこれ！ マジ受ける……」

……よく分からないけれど、こういう場合、普通はイタズラがバレたと青くなるものじゃないだろうか。

松田君は呼吸困難に陥るほどに爆笑しながら、ちょっと引き気味に立ち尽くす俺の肩を遠慮なしに叩いてくる。

「ああ、WCでトイレね。確かにこれ書いたのは俺だけど？」

嫌そうな顔で服にかかった飛沫を払っていたタカが、それを聞い

て眈を釣り上げた。

「やっぱりてめーか！ ウッチーとチエ子ばあちゃんかデキてるのか、デタラメ書いてんじゃねーよ！」

「なんだタカも読んだのかよ。デタラメも何も、んなあつかからさまな嘘に騙されるヤツもいねーだろ」

「ここにいるよ！ 本人に確認までしちゃったじゃねーか！」

「うっわマジで！？ バカじゃねー？」

「あームカつく！！」

地団駄を踏むタカをせせら笑っていた松田君は、電池の切れた玩具のように唐突に笑いを収めた。くるりとちょんまげを揺らして、傍観していた俺を振り返る。

「で、その紙飛行機が何？」

切り替えの早い人だ。きつと飽き性なんだろうなあと失礼な推測をしながら、俺は努めて笑顔で答えた。

「俺が探している人が、その紙飛行機の差出人だと思ったんだけど、違ったみたい」

「へえ、ラブレター自体は関係ねーのか。なんの目的で人探し？」

「お礼を言いたいんだ。トイレで出会った人なんだけど」

「トイレえ！？ トイレで感謝するようなことってなんだよ！」

そしてまた爆笑し出した。初対面だというのになかなか豪胆というか、遠慮のない人だ。

笑いすぎて床を転げ回る松田君を軽く無視して、タカが俺を振り返る。

「つーかあっさり自白したけど、ほんとにこいつじゃねーの？」

「違う。もうちょっと落ち着いた感じの人だったと思う」

「こいつより落ち着いてないヤツなんているかあ？」

その松田君がやけに静かになったと思ったら、地べたに座り込んだまま何やら携帯をいじっている。着信でもあったのだろうか。

タカは腕を組んでふうん、と鼻を鳴らす。

「じゃあ、一体どんなヤツなのさ」

「髪が短くて、暗い色だったけど多分染めてる。顔は……フツ？」
不細工ではないけど」

「なんか無個性なヤツだなー」

「あと声が良かった」

「はぁ……」

呆れた風なジト目に笑顔で返す。

軽い沈黙の中、唐突に松田君の大きな声が割って入った。

「あーもう分かったって、そう怒んなよハル！ 今行くから！」

松田君はそう携帯を切って、慌てて手元のファイルを確認し、勢いをつけて立ち上がる。

「んじゃ俺委員会あっから！」

松田君は戸に寄り掛かっていたタカを押しわけ、教室を出ようとして、ふとこちらを振り返った。

「そーいや王子って議長だっけ？ 俺、放送副委員長だから、多分これから世話になるな」

すれ違いざまに肩を叩かれる。

「イケメンは絶滅すればいいと思ってるけど、バカなヤツは結構好きだぜ！ よろしくな！」

そう言い置いて、松田君はどたばたと慌ただしく廊下を走り去って行った。

＊ ＊ ＊

結局その後もトイレ君に関する有力な情報は得られず、今日の授業もいつの間にかすべて終えてしまった。一日中多数の人に“WC”について尋ねてみたが、笑われるか訝しげな目線に晒されるかの

どちらかで、さすがの俺でもちよつと気分が沈んでくる。

放課後、明日の離任式に備えての委員会も終え、この後に生徒会の会議を控えている俺は、岡崎さんと資料をまとめながら居残っていた。

「バカと言われた。どうも気に入られたみたい」

昼休みのことを岡崎さんに報告すると、彼女は目を丸くして、そしてどこか嬉しそうに笑った。

「学年主席に向かってバカ、ねえ。さすが松田くん」

「彼は将来大物になりそうだ」

クセのある笑顔を思い出し、俺は苦笑いで手元のプリントをホチキスで留める。

「でも、目的のWCさんは見つかなかったんだね」

岡崎さんはプリントを片手に、自分のことのようにしょ気てしまう。ふわふわの小さい頭を失礼でない程度にそつと撫でて、元気づけるように笑ってみせた。

たった一日で何度も心に描いた彼のシルエット、そつと静かに想いを馳せる。

「きつと見つけてみせる」

瞼の降りた眠そうな目が大きく見開いた瞬間だとか。滾々と語りかける、心地よい低い声だとか。つい先程のことのように鮮明に思い浮かぶ。

もう一度会いたい。強く思う。

「……ずいぶんご執心なんだね」

いくぶん驚きを含んだ小さな声で、岡崎さんが呟いた。

執心、執着心。……そうかもしれない。

俺はプリントを一枚一枚、並んだ順に丁寧に取り上げていく。

「俺の話をね、聞いてくれたんだ」

心地よい低音が鼓膜の奥で蘇る。意志の強い、けれど優しい声だった。

「俺は当たり障りのないことを都合のいいように吐き出すだけだっ

たのに、彼はその話を聞いただけで、俺でも気付けなかったことをあっさりと導き出してくれたんだ」

交わしたのはたった数言なのに。その言葉はざわついた俺の心を、風のように快く駆け抜けていった。

ホチキスがカチリと音を上げる。

「あの時、どうしようもなく嬉しかったんだ。『俺を分かってくれる人がいる』って」

神とか救いとか、そんな大仰なものじゃない。ただ、しゃがみ込みそうな俺を、そっと支えて立ちあげてくれる腕のような、優しい安心感がそこにはあった。

薄暗いトイレの個室の中で、俺は確かに光を見たんだ。

「人の話をよく聞くこと」

ふいに上がった小さな声。

俺は傍らに目を向ける。

「人を幸せにするためには、相手のことをよく知る必要がある。そのために、その人の話を聞くことはとても大事」

岡崎さんはどこか遠くに向けた暖かい眼差しで、ひどく優しく言葉を紡ぐ。

「わたしの友達の言葉なんだけど。ああいう、人を思いやる生き方、たまにすごく憧れる」

花顔を綻ばせ、彼女は笑った。

「きつとその人も、伊吹くんのこと、本気で助けたいって思ったんだね」

心臓が痛いほどに脈を打つ。

……あの彼が、俺のことを救ってくれる。

なぜだか泣きたくなるほど直観的に、そう思えた。

じわりじわりと胸に歓喜が溢れ出す。それらはじつくりと胸を満たし、ぽかぽかと心を温める。

「そっか。そうだいいな」

「きっとそうだよ」

知らず口元に笑みが浮かぶ。岡崎さんはさらに嬉しそうに頬を緩め、しばらく二人で声もなく笑い合った。

「……話してたらなんだか会いたくなっちゃった。

これ放送委員会に渡すやつだよ、ちよつと行ってくるよ」

岡崎さんは卓上の資料を一部取って立ち上がる。

俺は時計に目を向けた。生徒会の会議まであと十分ほど。俺もそろそろ行かねばならない。

プリントをまとめて抱え席を立ち、ふと、思い浮かんだことを聞いてみた。

「その友達、放送委員なんだね。

……まさかとは思うけど、松田君？」

岡崎さんは思いつきり噴き出した。ツボにでも入ったらしく、口元を押さえ涙を浮かべながら肩を震わせている。

まあ確かに、あれはどう見ても他人の話なんてこれっぽっちも気にしないタイプだ。

どこか清々しい気持ちで、俺たちは笑いながら会議室を後にした。

＊ ＊ ＊

一晩経って、俺は重要なことに気付いてしまった。

「松田君じゃなくても、あの時目が合ったんなら、三組の窓際の席の人だよ、絶対！」

登校してすぐ、廊下側最前列という話しかけやすい席にいるタカに確信的な事実を報告する。

彼は朝食であろう食べかけのカレーパンをそっと机に置き、呆れ

顔で俺を見上げた。

「まだやってたの、それ」

「タカ、俺は今日こそ見つけてみせるよ」

「……なんでそんなに気にするわけ？　可愛い女の子ーってわけでもないっしょ？」

タカは棘を含んだ口調でぼやく。存外に不機嫌な様子に、俺は少し驚いた。

「なに、男を気にしちゃいけないの？」

「や、別にー」

ふいと顔を逸らされる。タカらしくない行動に首を傾げるも、俺は彼のジャージ姿で実に嫌なことを思い出した。

「今日の時間割最悪だ……」

一限体育、二限生物（実験）、三限美術。

すべて移動教室で、かつ事前の休み時間に準備が必要となる授業。ついでに今日の午後には離任式が入っており、俺は昼休みから委員会の仕事で拘束される。

「三組覗きに行く暇もないな……」

「へん、ざまーみろ」

そっぽを向いて、タカがそんな可愛くないことを言う。

俺はにこやかな笑顔で、机の上に置かれた牛乳を鷲掴み、一気に飲み干してやった。軽くなったパックを優雅な動作で机に戻す。

タカは茫然と空の牛乳パックを見つめ、我に返って慌てて吠えた。「おまつ、百円返せよ！」

ふん、飲み物なしでカレーパンを食べきる心許なさを味わうがいい。

昼休みも終わり間近の体育館にて。

離任式を控えた俺は、司会を務めるにあたって資料に目を通してはいるものの、いまいち身が入らない。思わず大きく息を吐く。

「……ずいぶん落ちてるね、伊吹くん」

お茶を乗せたトレーを片手に、岡崎さんがやってきた。

俺は温かい湯呑を受け取り、我ながら暗い声で礼を言う。岡崎さんは苦笑いを浮かべ、長机の俺の隣席に腰かけた。

「もしかしくなくても、件のトイレさんのことかな？」

「そうなんだよ……まだ見つからなくて……」

今日は結局、休み時間は全部つぶれた。

時間割が悪かったというのもある。もう一つは、今日の離任式で俺が司会をすると聞き付けた女の子たちが、励ましやら何やらでいつもに増して声をかけてきて、なかなか身動きが取れなかったことがある。応援してくれるのは嬉しいけれど、それらを一々気分を損ねないよう捌くのは正直かなりの徒労だ。

結局なんの情報も得られぬまま、昼休みもこうして過ぎてしまった。俺は現在、離任式の準備のため、生徒会のメンバーと共にステージ前の特設テーブルに身を置いている。

「うーん、早く見つかるといいね」

岡崎さんは控えめな笑顔で、しかしちゃっかり数枚のプリントを差し出してくる。

増えゆく仕事に肩を落とし、渋々受け取ろうと手を伸ばしたところで、体育館の明かりが落ちた。

視線を上げると、二階の暗幕が次々と窓を覆い、日差しを順に遮ってゆく。長らく待つこともなく、館内には完全な闇が訪れた。

もうじき開式の時間なのだろう。状況を察した生徒たちは声のボリュームを絞り始めた。館内がさざ波のような、不明瞭なざわめきで満たされる。

壇上から生徒会長が小声で役員を呼びつける。それぞれが開式に臨み簡単な指示を受け、議長として司会を務める俺は一本のマイクを受け取った。

なんととはなしにスイッチを入れて、頭の部分を軽く叩いてみる。籠った打撃音が辺りに響いた。

よし、大丈夫そうだ。

俺はマイクをいじりつつ岡崎さんの隣に戻った。いつの間やら人数報告をまとめてくれていたらしい。資料一式を受け取って、ざっと目を通す。

「あれ、演劇部もパフォーマンスやるんだ」

「転任した三澤先生が、演劇の顧問だったらしいよ」

演劇部には照明を依頼している。体育館二階の応援席からライトを操作してもらう手筈なのだが、今回、演劇部は一時披露する側にも回るらしい。

「照明どうするんだろう。演劇部って人数少なかったような……」

「その時だけ放送委員にお願いするみたいだよ。ほら、照明の設置って放送も手伝ってるみたいだし」

「ああ、あそこって代々機械に強いんだっけ」

学園祭や球技大会等の行事では、機具をごちゃごちゃいじっている放送委員の姿をよく目にする。生徒会が使うトランシーバーや俺が今日使うこのマイクも、放送委員会が調整してくれているらしい。そういえば、昨日会った松田君も放送委員の幹部なんだっけ。

放送委員といえば、全委員会中ダントツの忙しさだと聞いている。特に一度でも幹部クラスになると、その仕事内容を習得することの難しさゆえに、卒業するまでずっと放送委員会に在籍しなければならぬとか。

何気にすごい人なんだなあ。あの印象的な顔を思い起こしていたら、隣から発せられた小声で思考を中断された。

「ハルちゃんだ」

傍らを見やれば、岡崎さんが遠く上方を見上げ、手を振っている。

俺は何気なく視線を追って、一瞬にして身を凍らせた。

体育館二階の応援席、ステージに近い位置に構えられた照明器具。一つだけライトが灯っているため、傍で佇むその人物の様子はよく分かる。

細身で少し高めの身長、短い髪、年に似合わず、落ち着いた雰囲気。気の佇まい。

——やっと思つけた！

あちらも相当驚いているらしい。目を丸くして俺を見ている。椅子を蹴って立ち上がれば、ふいと顔を逸らされた。

まずい、ここで逃げられては。

大いに焦った俺は、その場から立ち去ろうとする彼に大音声で呼びかけていた。

『待って、トイレ君!!』

思いつきマイクを通して、体育館中に響かせながら。

3. 不束者ですが

side…春風

びっくりした。というか、現在進行形でびっくりしている。

薄暗い体育館内に響き渡った大音声。それを発した本人もさすがに焦っているのか、端正な顔を歪めて手中のマイクを見つめている。しばしの沈黙の後、館内はドッと沸いた。

なんてったって、学園中の注目を集める人気者のあの王子様が、急にトイレやら何やら意味不明なことを、しかもマイクを通して口走ったのだ。本来なら俺もクラスメイトと「あいつ電波系なのかな」などと呑気に検討していたことだろう。

しかし、彼はその言葉を発する直前、確かに俺と目が合った。なんとなく嫌な予感を覚え、その場を去ろうと踵を返したところに例の発言、「待って、トイレ君」。

……やっぱり、俺のことだよなあ……。

傍らで、照明係に任じられた演劇部の一年生が縋るような視線を向けてくる。うん、ばっちりこっち見たもんな、あの王子様。肩を叩いて励ましてやる。大丈夫、この暗がりならこちらはそう見えっこない。特に椅子に座って完全に機材の影に隠れていた君ならな。

俺は一年生へのフォローもそこそこに、慌てて元の持ち場、体育館放送室に避難した。

放送室とはいっても、今日の放送の仕事は先輩たちに任せているので、俺達はステージに向かって左上の、予備の部屋で待機という手筈になっている（稼働している本来の放送室はステージ右上）。

ドアを開けると、椅子から落っこちたと思われる松田が床で一人笑い転げていた。

「……何してんのお前」

「は、腹いてー……！！ トイレ君で、トイレ君でハルのことかよ！

！」

「なななんでお前が知ってんだ!!」

松田のフードを掴んで身を起こさせる。

たとえば常に人目を引く王子様の言動だろうと、あの暗がりの中、彼の目線の先にいたのが俺だと特定するのは難しいだろう。自慢にもならないが、はっきり言って己の地味さには自信がある。

バレたら面倒だとは思っていたが、よりにもよって一番手が松田かよ。

ヤツはげらげら笑いながら涙目で答えた。

「昨日言わなかったっけ？ 昼休みに王子が三組に来てさー、トイレ君とやらを探してる、つつーんだわ。」

そんな時話してたトイレ君の特徴がたしか、髪が短くて、顔は普通で印象に残りにくいけど、声がいい。ぴったりお前じゃん！」

そしてまた笑い出す。……なんだかものすごく疲れてきた。言い訳する気も起きずただ肩を落とす。

しかし王子様のヤツ、三組まで探しに来たのか。思った以上に興味を持たれてしまったらしい。

やはりあの「トイレで愛を語る事件」のことだろうか。だろうなあ。先程の様子だと、怒っているわけではなさそうだけど。

それにしてもよく”俺”だと気付いたものだ。トイレでもドア越しだったし、顔は見られていないはず、だよな？

『……大変失礼しました』

マイクで拡大された音声がどよめく体育館に鳴り渡る。

『開式の時間が迫っています。これから諸注意を説明するので、生徒の皆さんは所定の位置に着席してください』

伊吹の声だ。あんなことやらかした割には落ち着いている。

多少のざわめきを残すものの、生徒たちもそれに従い、館内は静かになった。

伊吹は宣言通り注意事項を淡々と並べていく。携帯は電源オフ、カメラはフラッシュを焚かない、パフォーマンズの移動は速やかに。

先程の失態などまるでなかったかのように、堂々と冷静に説明している。はあ、立派なもんだ。

こちらもようやく落ち着き始めた松田が、持ちこんだお菓子を机に広げながら俺に尋ねた。

「つーかさ、お前王子に何したん？」

「何って？」

「トイレで出会った人を探してるって言ってたから。トイレで何やらかしたんだよお前」

そこまで教えちゃったのかよ王子様は！

俺は冷や汗をかきつつ、目を泳がせながら答えた。

「……個室に入った伊吹に、トイレトペーパーを持ってきてやったんだよ」

嘘じゃあないけど……すまん、伊吹。

最初こそ思わぬハプニングがあったものの、離任式は我が校お決まりのハイテンションで進行し、無事に終えることができた。

生徒達がガヤガヤと体育館を退場する中、俺たち放送委員はいつものように機材の撤収作業に取り掛かる。照明ライトの移動、手持ち・装着マイクそれぞれの調整、生徒会役員が用いるトランシーバーの保管。学年が上がり委員長座に就任して以来、大抵は他の委員への指示にかかりきりになるので、力仕事が減ったのは楽だなとは思う。

俺は二階の放送席から、机に行儀悪く腰かけながら、先輩にまとめてもらったリストを眺めていたら、ふいに制服の裾を引かれた。

「……花歩」

「お疲れ、ハルちゃん」

見慣れた旋毛、小柄で可愛い俺の幼馴染、花歩は、労わりの言葉と共にこちらを見上げて花のように笑った。

彼女は「どうして」「どうやって」「ここへ来たのか、咄嗟に二つの疑問が頭を過ぎるが、彼女の背後から肩を鳴らしながらやってく

る松田の姿で片方は解決した。

「ほーらよ、鍵！」

「さんきゅ」

松田は花歩に当たらぬよう、高らかに鍵の束を投げて寄こした。彼に機材の収納を頼んだ倉庫の他に、ここへ通じるドアの鍵も含まれている。

「で、花歩はなんでここに？」

向き直って問えば、花歩はしげしげと俺を見つめ、感心した様子で声を溢した。

「トイレ君って、ハルちゃんだったんだねえ」

……あの時近くにいたし、感づいてはいるだろうと思っていたが。『委員会の仕事はいいのか？』

「うん、落ち着いたから。元々あんまりやること無いし」

話題を変えてみようと試みたが、いまいち効果はなかったらしい。花歩はにっこり笑って俺のセーターの袖を引く。

「伊吹くんが気にしてたよ。今は身動き取れないみたいだから、代わりにわたしが来たんだけど。会ってお礼を言いたいんだって」

「お礼？」

……感謝されるようなことしたっけ俺。

「律儀だね王子様は。たかが紙くらいで！」

松田が大笑いしている。さすがにその線はないと信じたい。

花歩は松田の反応にきょとんと首を傾げていたが、すぐに切り替え俺への説得にかかる。

「すぐく探してたんだよ。会ってあげたら？」

「会うつったって……」

「わたしが伝えてあげるし。放課後はどう？」

花歩は何が嬉しいのか笑顔で見上げてくるが、正直俺は気が乗らない。

なんてったって、相手は一挙一動を注目されている学園中の人気者だ。下手なこととして俺の名が不本意に広まるのは、事勿れ主義の

俺としては非常に困る。

そもそも目的がいまいちよく掴めないし、あの騒動の後だと、さすがにちよつと怖い。

男らしくないことこの上ないが、うだうだ考えつつ拒否の姿勢で沈黙を貫いていたら、心底楽しくて仕方ありませんといった表情の松田に肩を叩かれた。

「会ってやったら？ すっげー会いたがってたもん、あいつ」

……こいつ完全に他人事だな。

静かな苛立ちに強張る俺を余所に、思わぬ味方を見つけた花歩は、表情を明らめ手を打った。

「だよねえ。ほら、ちよつとくらいイイでしょ？」

「礼を言いたってんなら、悪いようにはなんねーだろ」

「さっきので可哀相なくらいしよげてたし」

「ありや哀れだよなあ」

二人して大げさに顔を歪めて頷き合い、非難の視線を俺に向ける。松田、お前めっちゃ笑ってただろさっき。

ああもう王子はこいつらに何吹き込んだんだ。松田はともかく、花歩はああ見えて頑固だからな……にこにこと笑顔のgori押し、あれを撒くのは骨が折れる。

俺も男だ、こうなったら腹を括ってやろうじゃないか。別段何かが減るわけでもなし。なるようになりやがれ。

「花歩、伊吹に伝えてくれ。」

この後、片づけが落ち着いたら——……」

窓から差す日は大分傾き、外は空が赤くなり始めている。グラウンドは部活に取り組む生徒たちの熱気に溢れ、切り取られたような校内の静けさが余計身にしみる。俺は小さく息を吐いた。

離任式を終え機材の片付けも無事終わり、俺は報告書を松田に押し付け、一号館の放送室に向かっていた。

角を曲って三つ目の部屋が、校内放送を掌る放送室だ。ドアの上に取り付けられたプレートに文字が読み取れる位置まで近づいて、俺は足を止めた。

放送室の前で、男女数人の生徒が話し込んでいる。珍しいことではあるが、それは別にいい。

問題はその人物というかなんというか……。

一步が踏み出せず気まぐれのまま立ち竦んでいたら、輪の中心にいた背の高い男子生徒が、ふとこちらに気が付いた。

ばかりと目が合う。

近くで見るとよく分かる。不思議な色彩の散った、吸い込まれそうな深いヘーゼルの瞳。

そいつは優雅に、でも待ちきれないとばかりに振り返った。柔らかそうな茶髪を揺らして、絵画のように美しい顔一杯に喜びを滲ませて。

「やっと会えた……！」

絞り出したような声音に、ギュツと心臓が収縮する。

……これはひどい。めっちゃくちゃカッコいいなこいつ。直視してられなくて、俺は目を逸らし挙手で答える。

対面してみても第一印象は、”世界が違う”って感覚が近い気がする。テレビの向こうの芸能人、みたいな。しかもその煌びやかな笑顔が、俺みたいなのパツとしない男に向けられているというのがまた居た堪れない。

一緒にいた女子たちは顔を真っ赤にして固まっている。ああ何か言っとかないとマズイだろうなとは思うけど、思考がうまく働いてくれない。

とりあえず俺は、当初待ち合わせをしていた相手、「学園の王子様」こと伊吹聡介に声をかけた。

「待たせて悪いな」

「ううん。俺こそ、急にごめん。」

……というわけだから」

最後は取り巻きの女子に向けて。ようやく覚醒した彼女たちに、伊吹は持っていたファイルを掲げてみせた。

「俺、これから球技大会について放送委員と話があるから」

ね、と同意を求められる。確かに春のスポ大は生徒会との調整も始まっているので、不自然ではない。俺は無言で首肯する。

彼女たちは顔を見合わせ、「じゃあ仕方ない」と不承不承頷いた。「それじゃ伊吹君、トイレ君とやらについて、今度絶対教えてよね！」

「あはは、考えとく」

女子たちは伊吹の笑顔に華やかな歓声を上げ、スカートを翻し恥じらいながらぱたと走り去る。角を曲がって姿が見えなくなるまで見送って、俺はようやく肩を落とした。

……先が思いやられる。

思わず恨みがましく伊吹を見上げれば、まこと美しい王子様は俺にふわりと笑いかけた。

「安心して。言うつもりはないから」

「……当たり前だろ。俺もお前も恥かくじゃねーか」

「たしかに」

そういつて大層嬉しそうに笑うので、なんだかこっちまで気分が浮かれてくる。微かに笑えば、眩いばかりの笑顔が倍になって返ってきた。

……こうまではしゃがれるとは。まあ、怒られることはなさそうだ。

俺は鍵を差し込み、放送室のドアを開けた。

「俺、放送室って初めて入った」

「けっこう狭いだろ、その辺座っていーよ」

促せば、伊吹は手近にあったパイプ椅子に腰掛けた。きよろきよ
ろと物珍しそうに視線を走らせている。

雲の上の存在とばかり思っていたけど、そうしていると普通の男
子高校生みたいだ。……否、やたら顔のいい男子高校生、としてお
こう。

俺は部屋の隅に置かれたプラスチックの箱から、放送委員で補充
しているお菓子を物色する。とりあえず、松田が持ってきた饅頭で
も出しとくか。

「コーヒー飲める？」

「飲めるけど、淹れてくれるの？」

「淹れる気なきや聞かないだろそんなこと」

なんとなく、伊吹には一番高級そうに見えるカップを使ってみた。
札を言って受け取った伊吹は、無駄のない上品な動作でカップに口
をつける。

……うーむ、やっぱり様になるな。俺は安物カップで豪快にグイ
と煽った。

「そんで、俺になんの用？」

なるべくキツくならないように、柔らかい声を意識して聞いてみ
る。

伊吹は少しばかり顔を緊張させて（これがまた男前で嫌だ）、噛
んで含めるように、一字一句を丁寧に口にした。

「君にお礼を言いたくて」

「……お礼？」

「でもその前に、今日のこと、ごめんなさい」

そして深々と頭を下げた。温かい色合いの茶髪がさらりと滑る。
誠実そうな男にそんなに申し訳なさそうにされると、なんだかこ
っちが居たたまれない。俺は慌てて手を振った。

「さっきの体育館のことだよな？ いいよ、気にしないから。」

……それより、なんでまたトイレ君？」

呼ぶのも呼ばれるのも恥ずかしい気がするんだが。

伊吹は眩しいものを見るように目を細め、柔らかな音程で穏やかに語る。

「トイレで会ったんだよ、俺たち。」

覚えてる？ 一昨日、トイレに籠ってた俺に、慰めの言葉を」

「待った待ったこれ以上言うな！ 恥ずかしいから！」

至って普通の地味な男子が、トイレでイケメンに恋愛指南だぞ。

ただでさえ恥ずかしいのに、改めて言われるとかなりイタイ。

伊吹はきょとんと目を瞬かせる。邪気のない反応に俺は大きく息を吐いた。

「……よく俺だって分かったな」

「あんまり驚いてないところを見るに、君も中にいたのが俺だって知ってたんだね」

ああそうか、あっちからすればそうなるんだ。

「氣い悪くしたなら、ごめん」

「全然構わないよ。俺は君とこうして話してみかったんだし」

伊吹はにこりと笑って、カップをソーサーにゆっくり下ろした。指を組んで肘を机に置き、心持ち身を屈めて組んだ指に口元を寄せ

る。彼は少しだけ視線を泳がせ、やがて俺に視点を定めて、ゆっくりと口を開いた。

「キミも知ってると思うけど、俺って周囲にちやほやされがちというか、どうも見せ物じみたところがあるんだよね。

まったくの初対面の人でも、あっちは俺のことを知っているってことも多々あって」

彼のいう状態はよく分かる。俺だって以前までは伊吹との接点などまったく無かったけれど、彼の人物像は人づてになんとなく知っていた。

黙って頷けば、伊吹は困ったように微かに笑う。

「これがね、俺が聞いても引くようなことが信じ込まれていたりするんだ。俺は聖人君子か超人か、って。噂が独り歩きしちゃってる感じ。

皆が俺に興味を持ってくれるのは嬉しいけれど、そういうのってちょっと寂しい。

なんて言うか、彼らが追い求めているのは、俺であって俺でないんだ」

俺はなるだけ無表情に努め、静かにカップを傾けた。

伊吹はゆつくりと、胸の内を探りながら、大切に言葉を選んでいるのがよく分かる。

「……だからあの時、俺はすごく安心したんだ。君に言われたことの内容ももちろんなんだけど、それよりも、

俺を理解してくれる人がいるんだ、って」

なぜだろう、真っ直ぐに見詰めてくる視線から逃げ出したくて堪らない。けれど、きっとこれは、俺が聞き遂げねばならないことなんだ。

覚悟を決めなくては。不思議とそんなことを真剣に思った。

ざわつく胸中を抑え込み、頭を空っぽにして、俺は無言で続きを促す。

窓から差し込む黄金色の日差しの中、伊吹は外見に似合った優しい声で、しかし力強く言葉を紡いだ。

「俺のことを真剣に考えてくれて、ありがとう。

すごく嬉しかったんだ。……どうしてもそれを伝えたくて」

陽光を纏ってきらきらと、あんまり幸せそうに笑うから。

……返答に困るじゃないか。

俺は耐えきれず机に突っ伏した。

もう無理、顔から火い吹きそう。どうしてこう恥ずかしいことをペラペラと。

ずるいくらいに眩しいヤツだ。まるで漫画やドラマのような、こんな鳥肌物の熱いセリフも、まったく嫌味に聞こえない。

それでも俺は、いたって普通の男子高校生だ。こんな純粹で燦爛とした感謝の言葉に、答える術を俺は知らない。

「ほんと、恥ずかしいよお前……」

くすくすと笑い声が降ってくる。穏やかな日差しのように心地よいなど、頭の片隅でぼんやり思った。

つむじをトンとつつかれる。

「それでも、俺は心から嬉しかったんだ。

ねえ、こっち見てよ。それでさ、友達になろう?」

柔らかい声が鼓膜をくすぐる。

この状態で顔を上げろと。鬼か。

俺は目を固く閉じた。恥ずかしいほどキラキラしたあの王子様を正視するのは、今の俺にはきつい、けれど。

「田中春風」

机に伏せたままポケットから携帯を取り出して、赤外線ポートを向かいに向ける。

「……不束者ですが」

これが今の俺の精一杯。

パカッと、向こうから携帯を開く音がした。空気が揺れる。きつと笑っているのだろう。

「伊吹聡介です。どうぞよろしく」

4. エスプレッソ

side…春風

「ねえねえ聞いて！ 今週の土曜日、男バスの練習試合があるんだって！ 誰か一緒に応援行かない？」

クラスメイトの女子が、教室に駆けこんですぐにこんなことを大声でまくし立てる。

室内は甲高い声で瞬時に沸き上がった。

「もちろん、行く行く！ 伊吹君の勇姿を目にやきつけなきゃ！」

「土曜ならサッカー部も試合あったよね」

「高階君の応援にも行けるじゃん！ やば、予備校さぼろっかなー」

「タオルとか受け取ってもらえるかなー」

「うちらより先輩達がハバを利かせるっしょ」

ぴーちくぱーちく、まさに小鳥のようだ。彼女らをチラリと横目で見やって、五角形の駒を盤上に打つ。向かいの松田が嫌そうに顔を歪めた。

「伊吹君と言えばさ、トイレ君って誰だったんだろうね」

「大分探してたらしいよ。一組の子が言ってた」

「えー、私も伊吹君に必死に求められてみたーい！」

「トイレ”君”っつーことは、男でしょ？」

「マジで何者なんだろう」

「田中君、知ってる？」

俺たちの背後で盛り上がっていた女子が、振り返って尋ねてきた。

「……なぜ俺に聞く？」

「だって、最近伊吹君と仲いいじゃん。うらやましい」

噴き出す気配に目を向ければ、将棋盤を挟んだ向こうにいる松田が肩を震わせながら俯いている。他人事だと思いやがってこのやろう。

「仲良いつつたって、委員会の仕事でだよ」

そう答えると、「私も委員長やっつけばよかった」などと後悔の嘆きがあちこちで上がる。相変わらず王子様効果はすさまじいこと。俺はこっそり溜息をついた。

最近、とある出来事から、俺は「学園の王子様」こと伊吹聡介と親しくなった。親しいと言っても、廊下でばったり会えば足を止めて軽く会話を交わし、あるいはぼつぼつメールする程度だが。

一組の”伊吹”といえはその凄まじい知名度からなんとなく敬遠していたのだが、これがなかなか気さくで付き合いやすいヤツで、女子だけでなく男子の友人も多いことも納得できる。とにかく親切で頼りになる男なのだ。

しかしそんな人気者の伊吹と、いまいち冴えない地味男子の俺が親しくするのは、なかなか違和感があるらしい。必然的に「大好きな伊吹君のことは何でも知っておきたい!」といった類の女子に絡まれることが多くなった。

そうだった時は、委員会の関係だと答えればいい。そう提案したのは伊吹だった。

伊吹は現在、生徒会の議長を務めている。対して俺は放送委員長。特別委員会の中でも放送委員は少し特殊で、生徒会から直接仕事の依頼をされることが多く、繋がりも強い。たしかにそう答えれば誰もが納得するだろう。まあそれはいい。

もう一つめんどくさいのが、今話題となっている「トイレ君」についてだ。

学園中の注目を集める人気者が、全校生徒の前で失態を晒してまで探していたということで、かなりの注目を浴びている謎の人物。ぶっちゃけ、俺なんだけど。

親しくなった時期がかぶるせいかな（当たり前だが）、これについてやたら聞かれる。俺も根っからの悪党ではないので、嘘についてまで誤魔化し続けるのは少々心苦しい。

……しかしバレるのだけは絶対に御免だ。俺だって平穏な日常を過ごしたい。

結局はほとぼりが冷めるまで、適当にあしらいつつ待つしかないのだ。

「ほれ、次ハルだぜ」

松田の声で現実に戻る。生返事で答え、俺は将棋盤に集中を戻した。先程考えた通りに進めようとして、手が止まる。

……俺が置こうとしていたマスに駒があるんですけど。

「お前、動かしただろ」

「……なんのことかな？」

「とぼけんな！　ったく、小賢しいマネしやがって」

せっかく俺の方が優勢だったのに。盤面から駒をさらって一から仕切り直す。

当の松田は俺の小言からの逃げ道を探してか、キョロキョロと忙しなく回りを窺っていたが、教室前方の入口付近で視線を留め、慌てて声を張り上げた。

「たーかぁー！　何してんのお前！」

松田の声に、訪問者に気付いた女子達が浮ついた歓声を上げる。俺も倣って視線を移すと、ジャージ姿のイケメンがしかめっ面でこちらに向かってくるところだった。

愛嬌のあるアイドル顔に、明るい茶髪を程よくセットし遊ばせている、伊吹とはまた違ったタイプの垢抜けたイケメン。”高階”という名は最近本人に名乗られ知った。

「お前が何してんだ松田！　試合前なんだから昼練くらい出ろ！」
サッカー部のエース殿はおかんむりらしい。普段撒き散らしている愛想からは程遠い、凄みのある迫力にビビっている俺の傍ら、松田は大して堪えた様子もなく唇を尖らせる。

「えー、どうせ俺補欠だろー？」

「ベンチ入りが何言ってんだよ。ったく、なんでこんなヤツが……」

高階はぶちぶち悪態をつきながら松田の首根っこを捕える。暴れ出す松田に「観念しろ」と一喝吠え、くるとこちらを振り返った。ニカッと、人好きのする明るい笑みを浮かべて。

「田中、こいつ借りてくから」

「……おう」

松田と同じサッカー部のエースで、最近親しくなった伊吹の友人、高階慎吾。

伊吹と交友が始まったことで、彼の一番の友人である高階とも話す機会が増えた。高階もまた己の美点をひけらかすことなくずいぶんと親しみやすいヤツで、イケメンは心も優れているんだなと感心したり。

しかし明るく人当たりの良い高階も、サッカーに関してだけは鬼だった。

特に、大して練習に出ない幽霊部員のくせに実力だけはある松田の才能が惜しくて仕方ないらしく、ヤツへの扱いに関しては容赦がない。そういうえばさっきクラスの女子がサッカー部の試合が近い、みたいなことも言っていたから、それに備えて練習しておきたいのだろう。

つまり、それだけサッカーに一生懸命ということだ。

「がんばれよ」

思わず声をかければ、高階はやはり人好きのする眩しい笑顔で返してくれた。

「ありがとな！」

そして必死に抵抗する松田の攻撃を避けつつ、隙を見てはカウンターを見舞いながら、サッカー部二人は騒がしく教室を出て行き、俺は将棋盤と共に残された。

ふと視線を感じて、さりげなく周囲を見渡すと、クラス中の女子が目も爛々とさせて俺を見ている。

さしずめ、高階の情報でも聞き出そうという魂胆なのだろう。

俺は腹の底から重たい息を吐いた。誰に非があるというわけでは

ないが、ただただめんどくさい。

質問攻めに遭う前にと、俺は速やかに教室を出た。

＊ ＊ ＊

我が香南学園は前身の学校の歴史を踏まえると、創立百十周年を迎える由緒ある伝統校だ。

校舎はもちろん古いし汚い。陽辺りが良いためか古い校舎などはやたら熱が籠りやすく、逆に冬は風通しが良すぎる。学校中のあちこちで某害虫Gを見かけるし（文化祭シーズンなどは水道に五、六匹の死体は転がっている）、廊下のひび割れに足を取られてずっけたこともある。

そんな古臭いカビ臭い学校だが、その古い歴史ならではの遺産も人知れず転がっていたりする。

その内の一つで、俺のお気に入りだが、この車寄せだ。

体育館横の駐車場を抜けると、閉園した付属幼稚園へと繋がる道がある。その途中で右折し雑草の茂る狭い地面を校舎沿いに歩いていくと、少し開けた場所に出る。

迎えるのは小さな花壇と、天然記念物とかいうよく分からん種類の木々。そしてその奥に古びた、しかし優美な意匠が施された屋根と柱が見える。明治時代の洋風建築だろうか、和と洋がいい具合に調和した建造物だ。もともとは白い塗装だったんだろうけど、今では煤けて灰に近い浅葱のような色になっている。

屋根の下には洒落た公園にでも置いてありそうなベンチが二つ。旧校舎の車寄せ部分だったというそれは、今は校舎とは独立して、ひっそりと品の良い歴史の重厚さを漂わせながら、憩いの場として

ぽつんと佇んでいる。

俺はこのベンチに横たわって、昼寝をするのが好きだった。人など滅多に來ないし、風通しもよく、日差しは屋根が遮ってくれる。何より、比較的近くに校舎があるため、平穩でなおかつ人の氣配を感じられるところが良い。騒がしいのは好きではないが、独りになるのはもっと苦手な俺にとっては居心地の良い場所だった。

昼休みだからだろうか、生徒の笑い声が多く聞こえる。

春の陽気はぽかぽかと心地よい。陽光は布団よりも軽やかに身を包み温める。春眠曉を覚えずとはよく言ったものだ。

眠氣に降伏し閉じようとする瞼と格闘しつつ、ああこんな穏やかな時間もいいもんだと船を漕いでいる最中に。

ピチャン、と。

何やら水滴が額に落ちた。……雨漏り？　んなわけはない。

俺は氣だるく瞼を上げ、そして悲鳴を飲み込んだ。

「あ、やっぱり田中君だ」

神様に愛されたとは思えない完璧な美貌がそこにはあった。

眠氣も一氣に吹っ飛んだ。俺はバネのように飛び起きる。そして彼の背格好を確認して、更なる衝撃に堪え切れず噴き出した。

「何やってんだ伊吹」

赤いジャージに身を包み、その右手にはなぜか象さんジョウロ。

しかしイケメンてのは何をしても様になるな。薄汚れた象さんジョウロの表情が輝いて見えるのは氣のせいではあるまい。

「なんでジョウロ？」

「ああ、その花に水でもやろうと思って」

そう言って隅の花壇を指す。規模も小さく地味で目立たない花壇ではあるが、そういうえば常に枯れていることはなかった。

「いつもお前が水やってるのか？」

「いや、俺は思い出した時だけ。今日は日差しがきついから。たまに他の誰かもあげてるみたいだよ」

彼は二週間ぶりに來た、と笑う。たしかに頻繁なことではないら

しい。

しかし他にも人が来てたのか。俺もよくここでもぼんやりしているが、一度も遭遇しないのは不思議な気がする。

「田中君はどうしてここに？」

「んー、ちょっとゆっくりしたくて」

伊吹が少し申し訳なさそうな色を浮かべたので、俺は少しベンチの端に寄って座り直した。目で促せば、伊吹は綺麗に笑って隣に座った。

「そういえばお前、バスケ部だよな。土曜日試合なんだって？」

「うん。今年初めての試合だから、皆気合い入ってる」

「大事な試合なわけだ。こんなところでぼーっとしてていいわけ？」

「それがさあ」

伊吹は手振り身振りをつけて説明を始めた。

試合までの数日間、放課後にバスケ部が体育館を使わせてもらうかわりに、昼は他の部が体育館を使っていること。

それでも伊吹はボールに触っておきたくて、バスケットゴールがあるすぐその公園に行ってみたが、爺さん達がゲートボールに興じていて使えなかったこと。

その公園で打ち捨てられていた象さんジョウロを目にして、ここの花壇のことを思い出したこと。

「せっかく着替えて出てきたのに、何もしないで帰るのも勿体ないし。水でもやっていこうかと思って」

そう言って、ジョウロを掲げてにっこり笑う。象さんもどことなく嬉しそうだ。

「で、水、やんないのか？」

「もうちよつと。田中君とおしゃべりしたいもん」

「……もんとか言うな」

覗き込んでくる整った顔を手で払う。俺の無礼な態度にも、伊吹は楽しそうにニコニコと笑っている。

あの一連の事件以来、俺はこの王子様に、どうやら本格的に懐かれてしまったらしい。

正直面倒なことは避けたいというのが本音だが、それでもさほど嫌な気がしないのは、こいつの人徳の成せるわざだろう。俺なんかのどこがいいのかさっぱりだけど。

今だって、伊吹はひどく楽しげだ。あんまり嬉しそうなんで、こちらまで思わず笑ってしまう。そんな俺を見て、伊吹はさらに笑みを深める。

冷静に考えると男子高校生二人で何やってんだって感じなんだけど、こいつの幸せそうな笑顔を見てると、まあいいかと納得してしまう。

それくらい、伊吹の隣は不思議と心地よい、と思えた。

「田中君は部活とか入ってないの？」

「俺は委員会とバイトで忙しいしなあ」

「バイト？ 何やってるの？」

「知り合いのカフェで色々。俺コーヒー好きだから」

これがなかなか楽しい。バイトだというのにレジやフロアからキツチン・バリスタまで、何から何までやらされているが、時給もそこそこだし、気心の知れた人の店なので、気を張らずに済むのもありがたい。

「いいなあ、バイト。楽しそうだね」

「やってみりゃいいじゃねーか」

聞いている様子が大分羨ましそうだったのでそう声をかけてみれば、苦笑いが返ってきた。

「うち、そういうの厳しいから」

一瞬。ほんの一瞬だけ、端正な顔が暗く歪んだ、気がした。単に俺の気のせいかもしれないけれど、しかしいつも笑顔を絶やさない伊吹のことだけに、その表情はやけに網膜に貼りついた。

「家が厳しいの、嫌か？」

自分でも何言ってるんだろうと思う。けれど、ぜひとも聞いてみた

いと妙な焦りが声を押し出して。

「嫌ではないけど……」

伊吹は少し考え込み、いつもの笑顔を潜めた真剣な表情で、強い眼光で遠くを見据え、小さく溢した。

「悔しい、かな」

意外な言葉に目を見張る。

伊吹の表情からは怒りも悲しみも読みとれない。しかしただ、強烈な感情がそのヘーゼルの瞳の奥で揺らめいている。

かける言葉に逡巡している内に、昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴った。

いっとなく張り詰めていた空気がふっと和らぐ。

四限開始まであと五分。

「昼休み終わっちゃうね」

伊吹はジョウロを片手に立ち上がった。

「……俺はサボる」

次の時間はH R。どうせ文化祭の役員決めだ。放送委員長でどの役にも就けない俺は、話し合いに参加してもあまり意味がない。

「俺もご一緒したいところだけど」

「ちゃんと出とけよ、議長だろ」

「やっぱり？」

花壇に向かい、伊吹は肩を揺らして笑った。先程のような陰は見られない。俺は密かに息を吐いた。

伊吹がジョウロを傾けると、光を弾きながら、宝石のような水がキラキラと花壇に降り注ぐ。

光を撒きながらこちらを見ずに、伊吹は少し大きめの声を上げた。
「カフェか、うん。いいよね。」

俺、ドリップコーヒーも好きだけど、エスプレッソが一等好きなんだ。今度ぜひ作ってよ」

「……渋いの選ぶな」

エスプレッソで。相当苦いぞ。

伊吹は振り返る。彼にしては珍しい表情で、片頬を上げニヤリと笑った。

「大人だろ？」

うん、象さんジョウロを片手に言うセリフではないな。

俺はバレない程度に小さく笑った。

『春風！ エスプレッソマシンが来たぞ！！』

小学校から帰ってくると、ハイテンションな父親に出迎えられた。聞き慣れぬ単語に首を傾げていると、頬を両手で挟まれ、「いつでもコーヒーを作れるぞ！」と説明を受けた。どうやらコーヒーを作る機械のことらしい。

上機嫌な父の後について台所へ行くと（この人は大抵いつも楽しそうだったけれど）、母が難しい顔で薄い冊子と睨めっこしていた。『ちよっと道風さん、これどうやって使うのよ』

『えー、説明書見ても分かんない？ 読みながら作ってみようぜ。豆はあるんだし』

『なんだってマニュアルマシンなんか買うのよ。ボタン一つでおいしく作れる機械だってあるでしょうに』

『だってだって、一から手造りの方がおいしそうじゃん！』
ねえ春風、と話を振られる。やはりよく分からないので黙秘権を行使していたら、再び父に両手で頬を揉まれた。

『春風だって、機械が作ったコーヒーより、父さんが作ったコーヒーのが飲みたいよなー？』

それなら答えはイエスだ。俺は勢いよく首を縦に振る。父は大層

感激して飛びついて来た。頬ずりまでされる。不精ひげがちくちくと痛い。

『ほーら、春風だって飲んでみたいって！ 可愛いわが子のためにもがんばろうじゃないか！』

母はちらりとこちらを見て、大きくため息を吐いた。

『しょうがないわね。もう買っちゃったんだし』

『そうそう。さっそく淹れてみよう！』

二人は台所のカウンターに向かった。そこで俺はようやく初めて目にする機械に気付いた。

銀と深緑の落ち着いた色合い。上の方にはちよこんとカップが置かれ、抽出口には掌サイズのごついフライパンのようなものが設置されていた。

両親はああでもないこうでもないと言い合いながら作業を進めていく。いつもと全く違った手順が面白くて、見ている俺も夢中になって二人の手元を眺めていた。

なんとか一通りの作業を終えて、父が抽出ボタンを押す。空気が抜ける音の後、濃厚なコーヒーの香りと共に、褐色の液体がとめどなく流れ落ちてきた。

『おお！』

俺と父は歓声を上げる。母がカップを傾けて、流れる液体を受け止めた。ある程度溜めて、そのまま出来たてのコーヒーを口元に持つていく。

『あら、結構いけるわね』

母の言葉に、父は目を輝かせてカップを受け取った。一口飲んで、うんうんと満足そうに頷いている。

『おいしいぞお。飲んでみろ！』

父からカップを手渡された。コーヒーの芳ばしい香りを強く感じる。

俺は期待に胸を膨らませ、白い陶器のカップに口をつけた。

『……にっが！』

ブラックコーヒーなんか比じゃないほど苦かった。とろみのある液体は喉に舌にこびりつき、粉薬を呑んだ後のように苦みがイガイガと刺激する。幼い俺には衝撃的すぎる苦味だった。

俺はよほど変な顔をしていたのか、両親は大笑いして（珍しいことに、感情の起伏に乏しい母までもが）俺の頭やら頬やらを撫でくりまわした。

『春風にはまだ早かったか』

『牛乳入れてラテにしましょうね』

二人は俺に背を向け、台所に向かう。

俺も続こうとして、ふと、足が動かないことに気が付いた。無理に立ち上がろうとすると、電流のような痺れが両足を襲う。

目を下ろすと、俺の脚はいつの間にか畳の上で正座を組んでいた。要は寸分の動きさえも封じるほど、足が痺れているのだ。

ああ、またか。嫌な予感が胸をよぎる。

両親に助けを求めようと顔を上げると、いつ用意されたのか、そこには大きな箱が二つ横たわっていた。

俺はそいつの正体を嫌になるほど瞬時に明確に理解した。

棺桶だ。

あの中にあの二人が肉塊になって収まっているのを、俺はよく知っている。

音もなく障子が開いた。黒い服を着た大人たちが静々と部屋にやってきて、慎重に棺桶を持ち上げる。俺は動くこともなく、ただ座ったまま彼らを見送った。

両親を持っていかれ、大人たちも出て行き、障子が静かに閉められる。

再び静寂が訪れた。和で統一された簡素な室内には自分以外、何もない。

そして幼い俺はようやく気付くのだ。

父さんと母さんはもういない。

これで俺は、

世界でたった一人きり。

「ハルちゃん？」

瞼をこじ開けると同時に、暗がりの視界に光が差し込む。

ふわりと香る愛らしい笑顔に、俺は心底安堵した。

「……花歩」

「もう放課後だよ。起きられる？」

頭を振りながら重たい身体で起き上がる。手が不自由だなと腕先を辿れば、花歩の右手をしっかりと握っていた。恥ずかしいと咄嗟に動揺が走るが、ほのかな温もりを手放すには惜しくて、その手をほどく踏ん切りがつかない。じっと繋がれた手を見つめていたら、花歩は微かに笑ってその手を強く握り直した。

花歩は俺が寝そべっているベンチの端に腰かけていた。降り注ぐ明るい陽光を一身に受け、ふわふわの髪がよりいっそう輪郭をぼやかしている。対して、俺を日差しから遮る影はほんのり水色がかっており、ここが車寄せの中だと考えが至った。

「あー、放課後だったっけ。そんなに寝てたのか」

「松田君に聞いたよ、四限サボったんだって？」

花歩はカーテンのような春光を背に、悪戯を共有する子供のようにはしげに笑う。その温かな光景がひどく恋しくて、柔らかな髪に手を伸ばし、先の方だけそっと摘まんだ。

「懐かしい夢を見たんだ」

数多の思い出があるからこそ、あの喪失感は絶対に忘れられない。きっと一生見続ける夢なのだろう。

指を離して栗色の髪を解放すれば、それは空気を含んでふわりと揺れ、持ち主の元へと収まった。

「でも今はちゃんと起きてるでしょ？ わたしもハルちゃんも、ここにいるから」

花歩は笑って、繋がれた手を強く握りしめた。確かな感触がそこ

にある。

勇気づけてくれるそのぬくもりに心の中で礼を言い、俺はゆつくりと手を解いた。

「……帰るか」

立ち上がって、ふと小さな花壇が目についた。傍らには見覚えのある象さんジョウロが目を輝かせて待機している。

ああ、伊吹がエスプレッソを飲みたいなんて言うから、あんな夢を見たのか。

ふと、先程の悲しげな表情が頭に浮かぶ。

伊吹の心にも、触れたくない闇があるのだろうか。もしそうならば、彼にとっての救いの光は、きちんと手の届く場所にあるのだろうか。

俺は傍らの幼馴染に目を向ける。花歩は首を逸らしてこちらを見上げ、眩しそうに目を細めた。記憶の中で笑っていた、両親の優しい表情がふとだぶる。

とても良い夢とは言えないが、懐かしい二人に会えただけでも良しとしよう。

ビターチョコレートのような深い苦味が舌の上で蘇る。

「……久しぶりにエスプレッソでも淹れるかな」

「えー、苦いじゃない。ラテにしようよ」

俺はまだまだお子様な彼女の頭を、父の大きな手を想いながら、親愛を込めてくしゃくしゃと撫でた。

5. 焼肉フランス

side…松田

三限目の日本史の授業、現在十二時三十分、つまり授業終了五分前。俺たちは固唾を吞んで最後の一答を待っていた。

当てられたのは七三分けに銀縁眼鏡といういかにも、な優等生ルックスの平クン。立ち上がって教科書を睨み続け、かれこれ数分経っている。

これが終われば昼休みだ。さっさと答えてほしいところだが、平クンは律儀にもクソ真面目に考え込んでやがる。周りからは早くしろと怒りを帯びた野次が飛ぶ。マジで早くしろよこの眼鏡、俺は足踏みしてスタンバっているというのに！

「丸かバツなんだから適当にどっちか答えりゃいいだろ！」

いい加減焦れてきたらしい担任教師の叱責が飛ぶ。いつも思うけどこの人はなんで教師なんてやってんだろ。見かけだけは、駅前で客引きでもしてそんな頭の悪いホストだ。

しかしそんなエセホストの脅しにもめげず、平クンは「じゃあ丸……いや、バツかもしれないし……」と頑なに答えない。

なに？ 喧嘩売ってんのこの人？ ガチで一発ぶんぐってやろうと立ち上がりかけて、後ろからフードを引っ張られまた椅子に戻る。振り返れば呆れ顔のハルが。お前さんはお昼争奪戦の恐ろしさが分かっていないのだよ……。

周囲からは助けの声が上がるが、それすら丸だったりバツだったりするので、三角！とか言いだすヤツが出る始末。ふざけてる場合じゃねーんだよチクショウが！

隣のクラスから歓声が沸いた。ガラリ、と戸が開く音がしたと思えば、地響きを上げて大団体が廊下を一直線に駆けて行く。

「うわああ地鳴りだあああ！」

「早く！ 早くしろ平！！」

「丸！ もう丸でいいでしょ平君！！」

殺気のこもった怒号が飛び交う。この状況で粘る平クンはもしかや苦痛を快樂に変換できちゃうドMなのでは、と背筋の凍る憶測が頭をよぎった。

「あーこりゃ駄目かもな」

「買えなかったら金返せよ松田」

後ろからハルと山本の冷たい声。くっそおめーら、食べたいと思わねーのか、かの伝説の”ごまあんぱん”を！

そう、今日は月に一度、近所のパン屋さんが出張でオリジナルパンを売り出しに来る貴重な日だ。そして皆の狙いは一つといっても過言ではない。

超人気メニユー、ごまあんぱん！

丸いセサミパンに程よい上品な甘さの粒餡と、豪勢なことに白い餅が入っている。この餅の甘味と食感、そしてゴマの香ばしさと歯ごたえが堪らない！

冗談のように人気がある商品だから、販売開始からあっという間に売り切れちまう。俺を含め足に自信のあるヤツは、代わりに買ってくれと頼まれることも多い。ちなみに俺は百円でハルと山本の分をそれぞれ引き受けた。

そんなわけで、俺たち昼飯戦士はごまあんぱんを手に入れるべく、目を血走らせて授業終了と同時のスタートダッシュに備えているのだ。

チャイムが鳴るまであと三十秒ほど。平クンはちらりと時計を目にした後、大きく深呼吸し、ようやく高らかに答えた。

「丸！」

「よし正解はバツだ！ 解散！！」

ホスト教師が真っ先に教室を出た。あの人も狙ってやがるのか。それを火切りに、クラスメイト達は咆哮を上げ一斉にドアに向かう。ふふ、愚民どもめ。今日の俺様は一味違うぜ！

手を伸ばせば届く距離の、傍らの窓を勢いよく開ける。

「おい松田っ」

ハルの制止と女子の悲鳴を背に、俺は二階の窓から勢いをつけて飛び降りた。

＊ ＊ ＊

ちよつと足が痺れるけど、こんくらいなら全然大丈夫。香南のジヤッキー・チェンとは俺様のことよ。力いっぱい地を蹴り、俺はパン販売所である渡り廊下へ向かった。傍らの校舎は無数の足音で轟いている。ふふふ、一步リードしているようだな。

そのまま足場の悪い通りを抜け、あっという間に屋根のない剥き出しの渡り廊下、つまり人もまばらな販売所についた。

よっしゃ、これなら楽勝だ！ 一人ガッツポーズをかましていたら、販売のおばちゃんたちにクスクスと笑われた。俺は頭をかきながら笑って誤魔化しつつ、ごまあんぱんを三つ購入する。やった、やったぞ俺は！ 勇者松田はごまあんぱんを手に入れた！

ついでにと飲み物も物色していたら、背後から優しい声が掛かった。

「あれ、松田君？」

振り返ると、同じ人間と思いたくなくらい完璧な出来の美貌を持つ、学園の有名人、伊吹聡介が歩いてくるところだった。

「王子じゃん。お前もやっぱあんぱん買いに？」

「いや、俺は他にお気に入りがあるんだ」

そう言っ、王子はやたら堅そうな生地の丸っこいパンを一つ頼んだ。おばちゃんはいそいそと余所行きの声で、大事そうにパンの

入った袋を手渡す。俺のときと随分対応が違うんじゃないかねーのおぼちやん。

「つーかお前早いね。俺これでも全力疾走してきたんだけど」

「ああ、うちのクラス、三限は先生がいなくて休講だったから」

「え、じゃあ一組のヤツら余裕であんぱんゲットできたんじゃない？
ずりーなあ」

「皆はクラス費で好み焼き食べに行っただよ、三限から。」

俺は昼休みに生徒会で会議があるから、最初だけ顔出して学校に戻ってきたんだけど」

話によると、タカも食堂の方の購買でいつものカレーパンを買いに行っているため、王子は今からそちらに合流するとのこと。

俺もハルと山本とは食堂で待ち合わせをしているので、途中まで一緒にすることにした。

「そーいやお前、ハルと仲いいんだって？」

最近では廊下ですれ違ったときなど、軽く言葉を交わしているのを見かける。あの警戒心の強いハルとの距離を詰めるなんて、あのトイレ君事件からどうなったのか、経過がちょっと気になるわけで。王子は軽く首を傾げた。

「ハル？」

「トイレ君」

「！ 田中君のことか」

王子は軽く目を見張った後、それはそれは甘ったるく笑った。：
：こういう笑みに女の子はコロッといくんだろうなあ。まったく忌々しい。

「うん、仲良くさせてもらってるよ。そっか、松田君は彼とクラス一緒だったよね」

「俺たち付き合いは長えんだ。お前と比べりゃ地味だろうけど、イイ奴だろ？」

王子は喜色満面に、力いっぱい同意した。

あれま、大分懷かれてんなこりゃ。

ハルの話題をダシにちんたら歩いていたら、後方からあんぱん争奪戦を切り抜けてきた第一陣が、勝利に酔いしれながら俺たちを追い越して行く。

すれ違いざま、王子が紙袋を手に行っているのに気付いたのか、多くの生徒が俺たちに声をかけてきた。

「おいしいよね、ごまあんぱん！ 私このお餅が好きで」

「伊吹も買えたのか！ 俺たちもギリギリ滑り込みでさあ」

「私たち体育だったから、そのままこっち来て買えたの！」

「俺これ好きだから、つい二個も買っちゃって」

女子ばかりに人気があるヤツだと思っていたが、案外男友達も多いらしい。確かに見かけの割に喋ってみると気さくで親しみやすいし、有名でデキる友人を持つってだけでも、人間どこか得した気分になる。

しかし一言も「ごまあんぱんを買った」とは言っていないのに、あんぱんを手に入れたことを前提に話はどんどん進んでゆく。王子も特に否定はせずにこのこと相槌を打つだけ。そりゃ声掛けてくるヤツら一人一人に訂正したら骨が折れるもんなあ。

俺はたまに口を出しつつ横で聞いていて、ほんの少しだけ不憫に思った。人気者ってのもめんどくさいもんだ。

ようやく食堂が見えてきたところで、また伊吹が捕まった。知らない女子だし、あまり好みのタイプでもないのに、俺は会話には参加せずしばらく待ってみることにする。

壁に寄り掛かって廊下を歩く人々をぼんやり眺めていたら、見慣れた姿が目についた。

「おい、ハルー！」

茶色いセーター姿のハルがきょとんと振り返る。大きく手を振れば、彼は呆れ顔でこちらにやってきた。

「お前なあ、まったく無茶しやがって。結局あんぱんは買えたのか？」

「ばっちりよ！ そっちは？」

「ん、ちゃんと提出してきた」

ハルは提出期限が昼休みまでと言われていた委員会の資料を先輩に届けに行っていた。そのため、今日はなんとあの一匹狼の山本が食堂の席取りをしている。俺の斜め後ろ、つまりハルの隣席で、たとえ授業中だろうと「ダルイ」とかなんとか言っただけでふらりとどこかに出かけてしまうような、協調性の欠片もない山本にしては珍しいことだが、どうやら俺たちと一緒に昼食をとるつもりらしい。大方ごまあんぽんに釣られたんだろうけど。

「そうそう、ここまで王子と一緒にだったんだぜ」

「王子って、伊吹と？」

女子と話し込んでいる王子を指で示すと、なんの偶然か王子がちょうどこちらを振り向いた。軽く目を見張って、そして誰もが見惚れるだろうキレイな笑顔を浮かべる。どこぞの漫画の一シーンのように周囲の女子からは黄色い声が出た。

王子は女の子に丁寧な断りを入れて、軽やかにこちらに駆けてきた。

「ごめん松田君。田中君も一緒だったんだね」

「今会ったばかりだけどなー。そっちはもういいん？」

王子はこくりと頷いた。ハルが不思議そうにこちらを見るので、先ほどパンの販売スペースで鉢合わせたことを説明する。

「へー。何買ったんだ？ やっぱりあんぽん？」

ハルは王子の紙袋に目を留めたらしく、さらりと尋ねた。

「いや、焼肉フランスっていうパンなんだ」

王子は中の焼肉がしょっぱくて美味いだの、生地は固めだが食べ応えがあるだのと、焼肉フランスとやらについて楽しそうに語りだした。ハルは顔にこそ出さないが、相槌を打ったり感想を尋ねてみたり、それなりに面白そうに聞いている。

俺は面食らってしまった。今までと逆だ。王子が喋って、ハルが聞く。

基本的に受け身のハルには珍しいことでもないが、王子がガンガン喋っているのは、一緒に歩いたほんの数分のうちでも、かなり新鮮に感じられた。

「ふーん。今度買ってみようかな。なあ松田、お前食ったことある？」

ハルがくると俺を振り返る。おお、急に振んなよ！

「え、えー？俺そんなパンあるの今日初めて知ったし」

「じゃあ二人とも、今度ぜひ食べてみてよ」

さわやかな笑顔でおススメされてしまった。

全っ然話聞いてなかったけど、まあ考えておこう。

＊ ＊ ＊

山本は食堂の奥まったところ、ガラス張りの壁際に席を陣取っていた。

軽くパーマをあてた灰茶の髪、鋭い目付きに整えた顎髭。近寄りがたい雰囲気ではあるが、ワールドでそれなりにカッコいい山本は、ちらちらと窺うような女子の視線も完全無視で、ダルそうに肘をつけて外を眺めている。

俺は声を上げて手を振ってみた。山本は緩慢な動作でこちらを認め、整った眉を軽くひそめた。

「四人だなんて聞いてねーぞ」

「まあいいじゃん、席空いてるし」

この時間帯、食堂は当然のごとく混雑するわけだけど、うまい具合にテーブル一つ分丸々空席になっている。多分山本を怖がって座れないんだろう。

「久しぶりだね、山本君」

王子がにこやかに声をかける。山本は感情の読めない表情で、ひよいと片眉を上げてみせた。

「知り合いなのか？」

「中学が一緒だったんだ」

ハルの問いに簡潔に答え、ね、と王子が賛同を求めると、山本はうつすらと目を細め、「座れよ」三人とも」と促した。おお、お許しが出た。

椅子に腰かけるとき、隣のハルから「なんか意味ありげだよな」なんて耳打ちされたけど、正直俺はちっとも気にしてなかった。多分これからも気にしねーわ。

王子が携帯をカチカチやりながら、少しすまなそうに声を上げた。

「タカも呼んでいい？」

「いんじゃないね？ 席空いてるし」

適当に答えたら、ハルと山本の冷たい視線。

「お前、練習サボってんのバレんじゃないの？」
気にしない気にしない。

さすがにパンだけじゃ腹は膨れないだろうということで、俺たちは交代でカウンターへ向かい、もう一品ずつ頼んできた。俺は牛丼、ハルと山本はきつねうどん、王子はカレー。

王子だけ卵のおまけを貰ってたんで、俺がやっかみ丸出しで羨ましがってたら気前よくくれた。牛丼の甘味とカレーのスパイシーな辛味、なかなかイカスハーモニーだぜえ……。

そんなこんなで丼の中身を半分も食べたころ、明るい茶髪頭のジヤニ系男子、タカがやってきた。

「よー……って、何この面子？」

タカが大きな目をくりくりさせて俺たちを見回す。たしかに、冷静に考えると妙な取り合わせなんだよな。一応俺の中では三組トリオにプラス王子、ってところなんだけど。

「そういえばお前ら、伊吹とどういう知り合い？」

山本が今更なことを聞いてきた。

「それはだなー、なんとハルが例のトいつてえ!!」

思いつきり足を踏まれた。踵でぐりぐりって！ キチク！

涙目で隣を睨みつければ、犯人は澄まし顔でうどんをすすってやる。

タカはそんなハルをきょとんと見つめ、「ああ！」と高らかに手を打った。

「あんたが例のトイいたたたた！」

王子が袖をまくったタカの腕を限界まで抓っている。み、見かけによらずえげつねーことすんなこいつ。

うどんをすすっていた山本が一息ついて、小声でぼそりと。

「トイレ君、な」

あーあ、バレちゃったね、テヘ。そんなに睨むなよハル。

タカがものすごく興味津々といった様子で経緯を聞き出そうとしていたけど、ハルは仏頂面で、王子は笑顔で沈黙を貫いた。そういえばさっき俺が王子に聞いたときも、うまーくはぐらかされたっけ。「トイレの個室で、トイレットペーパーが繋いだ絆だぜ。人生、そういう縁があったっていいじゃねーの」

あんまり知リたそうだったんで二人の関係の一端を説明してやれば、当事者以外の二人が可哀想なものを見る目を向けてくる。いやさすがに俺だってこんなのデタラメってことくらい分かってるぞ。騙されてやってるだけで。

マイペースにもいつの間にかカレーを平らげた王子が、向かいの俺とハルを見比べてのんびり切り出した。

「そういえば、松田君と田中君は付き合いが長いって言ってたよね」「おうよ」

「岡崎さんは田中君と幼馴染って聞いたけど、松田君とも仲いいよね。三人で幼馴染ってこと？」

俺たちは顔を見合わせる。

「まあ、そんなものかな」

「花歩ちゃんとハルのがちよつと古い仲だけどね」

一から説明するとめんどくせー関係なんだけど、幼馴染というくくりで間違っではないだろう。

ハルと花歩ちゃんは、幼馴染と答える度に「付き合わないの?」なんてことを尋ねられる。今も山本にそんなことを言われ、ハルはいつもの通り淡々と否定して。

こんなやり取りを聞く度に、”家族”とでも答えりゃいいのに、なんて思うけど。照れ屋なハルがそんなクサイこと言うわけないのも分かっているので、横で黙って見守っとく。

ていうか、花歩ちゃんといえよ!

「王子と花歩ちゃんがデキてるって噂あったけど、あれってほんとにウソなんだろうな!」

食後のお茶をのんびりすすっていた王子は、イヤミの欠片も見せずによかに否定する。

「うん、委員会が同じってだけだよ」

「聡介にはちゃんと他に彼女いるもんなー」

「まあ、別れたけどね」

さらりと放たれた爆弾に、まずはタカが盛大にむせた。

「愛沢と別れたの!」

タカの驚きの叫声に誘発された二次災害。俺はお冷を思いつきり噴き出した。

「愛沢ちゃんだとおお!」

「お前ふざけんなよ……」

正面で水を被った山本がめっちゃキレてるけど気にしない。

「愛沢ちゃんといえば、あの花歩ちゃんと双壁を成す学園のマドンナ、愛沢美咲ちゃんのことですかいな!」

何キャラだよお前、なんてハルに冷静に突っ込まれるけど構ってやれる余裕はない!

王子は少し困ったように、それでも笑って答えた。

「そう、その愛沢美咲」

「えっ、マドンナと付き合えるとか羨ましいな爆発しろ、でも別れたって、えっ!？」

「振られちゃってさ」

さらりと言う。振られたって……。

「ただ理想高いんだよあいつ」

タカがドン引きしている。たしかに、王子でダメって他にどんな男ならお眼鏡に適うというのだろう。

「ま、女心なんてそんなもんだろ」

しみじみと高校生らしからぬ態度でぼやきながら、山本が立ち上がった。

「あれ、どこいくの山本」

「お前ふざけんなよ……」

それ二回目。

「ずっとびしょ濡れでいるわけにもいかねーだろ」

呆れ顔でハルが続く。山本は常の無表情に少しだけ憐れみを乗せた表情で、ハルの肩をそっと叩いた。

「田中の心労、少し分かる気がするわ」

「ありがとよ」

「ええー心労ってなんだよむしろ俺たち心の友だろ!？」 冷てーなハル!」

「俺は濡れたシャツが冷てーよクソが」

「ごめんごめん。シャツ透け透け?」

長い脚で下段を繰り出される。避けたら盛大に舌打ちされた。こえーってお前。

カレーパンのパッケージを小さく畳んだタカが「俺たちも行くかい」なんて隣の王子に声をかける。

王子はそれに笑顔で応じて、ふと、一瞬だけ俺を見た。なんだろうなと気になるけど、しかし王子はすぐに視線を外し、食器の返却のためカウンターへ向かったハルに小走りに駆け寄っていく。

なんとなく目で追っていたら、唐突に首が締まった。

「ぐえっ」

「松田！、今日の朝練なんで来なかった？」

背後から地を這うようなタカの声。どうも襟首を掴まれているらしい。

「た、体調不良で」

「体調悪い人は二階から飛び降りたりしません。

試合近いんだからちゃんと練習しろっての！」

「どうせベンチじゃーん」

ものすごい気迫で睨まれた。こいつサッカーのことになるとほんと怖い。

「放課後はちゃんと来いよ！」

……これでフケたら大変なことになるだろう。面倒なことになっちまったけど、まあたまには真面目に部活やるのも悪くない。

俺は口笛なんて吹きながら、食堂を後にする男たちの背を追った。

＊ ＊ ＊

四限開始も間近に迫り、二年三組の教室に戻ってきて。

うっかり水を吹きかけてしまい、未だぶすぶすと怒っていた山本は、近所の鯛焼き屋さんの無料券を五枚ほどやればあっという間に機嫌を直した。

「こいつ甘党なんだよ」

「はあ……」

呆れた様子で授業の準備を始めるハルを眺めているうちに、俺はふと、ほんとに唐突に、先ほどの王子のことを思い出した。

「なあなあ、さっき何話してたんだよ」

「さっき？」

「食堂で。王子と」

軽く眉をひそめるハルに、食後二人でこそそやってたろ、と説明してやる。二人の会話というよりは、ハルに駆け寄る前に王子が俺に一瞥くれたことの方が気になったわけだけど、それを告げれば、ハルは一人「なるほど」と合点のいった様子で頷いた。

「ハル”って呼んでいいか、って」

「へ？」

「俺のこと。松田の聞いて、あだ名で呼んでみたくなったのかな」
ははあん、俺とハルの仲良しっぷりに懂れて、ってわけね。懐かれてんなあ。

しかしあの王子様にも、意外と子供っぽいところがおありのよう
で。

「ハルはなんて答えたん？」

「別にいいよって」

そして何か思い出すようにふっと目を細め、表情筋の硬いハルにしては珍しく、その口元を笑みの形に綻ばせた。

「あいつ、すっげー嬉しそうに笑うんだ」

お前も十分楽しそうだぜ、なんて野暮なことは言わないでやった。
ハルは照れ屋さんだからな！

なるほど王子が懐いてばっかだと思ったら、意外にも、ハルの方も絆されているらしい。

きつと王子は気付いていないんだろうな、こいつが気を抜くのつて俺の前くらいだもん。もったいねーなあ。まあちよっぴり嬉しかったりもするんだけどね。

一人勝手にニヤニヤしてたら、予鈴のチャイムが鳴った。

後ろでハルが小さく息を吐く。

「ごまあんぱん食べそびれたな。せっかく買ってもらったのに悪い」
「後で食えばいいって。俺今日はちゃんと部活出るから、放課後食べることにした」

「エライエライ。今度は焼き肉フランスとやらも買ってみるか」
百円でひとつ走り買ってきてやろうかと提案すれば、自分で買いに行くさ、と大人っぽくハルは笑った。

6. 本日のヒーロー

side…花歩

数日前の昼休み、唐突に体育館裏に呼び出された折に、九組の愛沢さんにこんなことを言われた。

「聡介に手を出さないで」

最初「ソウスケ」と言われてもすぐには思い浮かばなくて、私はメイクで彩られた綺麗な顔をまじまじと見つめた。何で彼女がこんなこと言うのかを考えてみて、それが伊吹君のことだとうまく理解した。

「別に、手なんて出してないけど」

「しらばっくれないで。校内で噂になってるじゃない」

愛沢さんは険しい顔で、毛を逆立てた猫のように噛みついてくる。こぼれそうな溜息をぐっと抑えて、私は吐息交じりに否定した。

「ただの噂だよ」

「火のないところに煙は立たない」

ばっさりと切り捨てられた。さすがの私もムツとしちゃうけど、どこか焦っているような彼女の様子に、怒りよりは興味が湧いた。とりあえず彼女の敵意を逸らせるために、私は思考を巡らせる。

「だってわたし、他に好きな人いるし」

迷惑なんだけど、と言外にこっそり含ませて。ちよつと口調がキツくなっちゃったけど、こうでも言わないと諦めてくれないだろうから。

しかし愛沢さんは納得できないのか（納得したくないようにも見えるけど）、睨みつけてくるばかりでちっとも動く気配がない。

そこで私は、こうやって謂れのない因縁をつけられる度にいつも思うことを聞いてみた。

「そもそも、あなたが本人に言えばいいんじゃないの？」

元とはいえ彼女だったわけだし、話くらい聞いてくれるだろう。しかも彼女のような美人さんなら、望めば復縁だって不可能じゃない。

怒るだろうなとは思っていたけど、愛沢さんは想像以上に喰いついてきた。顔を真っ赤にして眦をつり上げ、叩きつけるように怒鳴り散らした。

「そりゃ聞いてくれるでしょうよ、もちろんあんたとも距離を取る。あいつは優しいんだもの、あたしにもあんたにも！」

あまりの剣幕に頭がびっくりしてしまい、私は彼女の言葉を一瞬では理解できなかった。

固まる私を不愉快そうに見届け、愛沢さんは踵を返す。肩を怒らせ、乱暴な足取りでその場を去っていった。肩を怒ら

残された私は呆然と、赤い髪が躍るその背を見送った。

＊ ＊ ＊

「なるほどなるほど。花歩はこれ以上愛沢のような伊吹ファンを刺激したくないわけだ」

写真部の部室にて。私と同期の二年生部員で、今年から同じクラスでよくつるむようになった友人、村木瞳は、うんうんと訳知り顔で頷いて、そしてぱっと明るい声で手を打った。

「じゃあ、バスケット部の取材に行ってみようか！」

「……ケンカ売ってる？」

瞳はやけに目立つオレンジ色のボブヘアを大袈裟に揺らし、背をのけ反らせて驚いた。黒縁眼鏡の奥では、気だるげなタレ目がわざとらしく見開かれている。

「まっさかあ！ あたしはただこれを機に花歩にも強靱な精神力を身につけてもらいたくてだな」

「本音は？」

「一人じゃ寂しいっ」

私はどうにか引きつった笑いを返した。豊満な身体つきに目尻の下がった妖艶な顔立ち、左の目元には泣き黒子という瞳のその見た目なら、しなを作って身をよじれば少なからぬ色気が発せられるはずなのに、背筋を伝うのは氷を滑らせたような怖気のみ。部屋の向こうでは新入部員の男の子が真新しいカメラを抱え、真っ青な顔でこっちを見ていた。

……うんうん、怖いよね。

「でも、要は部のカメラで写真撮って売りつけるんでしょ？ 嫌だよ、わたし加担したくない」

瞳含めミーハーな一部の部員は校内で新聞記者の真似ごとのようなことをしているけれど、ここは一応写真部として活動している。真っ当な写真部員としては、目立つ生徒ばかり追っかけてないで、もう少しまともな、写しがいいのある被写体を撮るべきだと思う。

私の正当な主張に、瞳はニヤリと意地の悪い笑みで応じた。

「ときに花歩、我が写真部はここ三カ月連続、活動報告を怠っているのは知ってるかな？」

「知ってるけど、今は関係ないでしょ」

「関係あるんだよそれが。」

おかげでうちは思いつきり監査委員に目を付けられているわけだけど、今度こそ同好会に格下げしたるぞーっ！脅しが先週部長に届いたわけよ」

「え、それまづくない？」

同好会では学校から部費が出ない。フィルム・現像代やお茶代など、かなり派手に散財している写真部において、部費を止められるのは活動の継続を左右する死活問題といえる。

「そこで、監査委員に賄賂を渡してこの危機をやり過ごそうっ！

案が出た」

「賄賂？」

ものすごく嫌な予感がする。瞳は懐かしの笑うセールスマンを彷彿とさせる、胡っ散臭い笑みを満面に浮かべた。

「ここだけの話、監査委員長の神谷先輩はかなりの伊吹ファンらしいのさ」

「……写真を撮ってこいってわけだね」

写真部の将来が心配で仕方ない。

それにしても、伊吹君ってモテるんだなあ。「色恋なんて興味ありません！」って感じのボーイッシュな先輩の顔を思い浮かべて、彼のファン層の厚さを改めて実感した。

ぼんやり考える私をよそに、瞳はいそいそと道具を鞆に詰め込み出かける準備を始めてしまう。ちょ、流されてなるものか。

「ねえ、それなら別にわたしが行く必要なくない？」

「だって花歩、王子と仲いいだろ。キミにはターゲットの警戒心を解くという重要な任務があるのだよ」

「うわ、嫌だなあ……」

大体、伊吹君みたいな人なら、内心でどう思おうと笑顔で応じてくれそうなものだけだ。いや、瞳が相手だと不安かも。この子、胡散臭さの塊みたいな人間だし。

準備を終えたらしい瞳は、軽やかな足取りで私のもとにやってきた。腕を引かれて立ち上がる。どうやら私も行かなきゃならないらしい。こっそり溜息をつけば頬をつねられた。

「写真部存続の危機なんだ。ほら、はりきって行くよ！」

「瞳は楽しそうだねえ」

溜息混じりにぼやけば、瞳は口端を引き上げた。黒縁眼鏡は全反射して目元を隠し、いかにも怪しげにキラリと光る。

「だって花歩、伊吹だよ、あの王子だよ！？」 輝かんばかりの美形っぶり、萌えの糧としないで何とするか！

あーあ、どっかに強気な受け子ちゃんいねーかなー。年上だとな

およし！ ツンデレな先輩受けにメロメロな王子攻め！ でも受け子はカッコよくて優しい攻めに恥ずかしくてつい素直じゃない態度をとっちゃって、そのうち彼に心変わりされるんじゃないかと毎日毎晩一年中ヤキモキしてるんだよ……！ あああ萌え！ 萌エス！」

また始まった。そんな目を爛々とさせて「そう思わない？」なんて言われても。

「……ごめん全然分かんない」

上機嫌な瞳に引きずられるように部室を出る。写真部の部室は一階の奥まった個所にあり、暗い廊下を少し歩いて視聴覚室・PC室に繋がる開けたところに出ると、不規則な足音が頭上から聞こえてきた。目線を上げると、ダラダラした足取りで階段を下る、重たそうな辞書を数冊抱えたハルちゃんに出くわした。

何してるんだろう。私が声をかけようと口を開くのとはほぼ同時に、隣にいた瞳がイノシシのごとく猛烈な勢いで駆け出した。

「田中ああああ！！」

「うわっ、村木！？」

瞳の唐突の来襲に、ハルちゃんは咄嗟に両手でガードする。当然支えをなくした辞書は重力に従って落下して、上履きの上にめり込むように着地した。うわ、痛そう。結局瞳はハルちゃんのいる直前の段で足を止めており、その場でけらけらと笑い出した。

「……………何すんだよ村木！」

「はっはっは。いいカモ発見」

瞳はニヤニヤと嫌らしい笑みを浮かべ、うずくまったハルちゃんに合わせるように屈みこんで、馴れ馴れしいオジサンのように親しげに肩を叩いている。

気が乗らないけど私が渋々駆けつけると、ハルちゃんはこちらに恨みがましい視線を送ってきた。めんどくさいの連れてきやがって、ってところかな。別に私のせいじゃないもん。

「つーか田中はこんなところで何やってんの？　せつかくの休日だつてのに」

床に転がった分厚い英和辞典を無造作にめくりながら、瞳が尋ねる。ハルちゃんは足をさすって答えた。

「あー、図書館で勉強。さっきの補講の復習やつとこうと思って」
「補講って大岩先生の？　あれ競争率高いんだよね。ハルちゃん選考通ったんだ」

分かりやすい授業で名高い大岩先生の、英語の基礎から叩きこむという土曜日の補習授業。私も受けたかったけど、希望者が教室から溢れるほどに殺到して、結局抽選で落ちてしまった。これって連休中でもやってたんだ。

「あれは思いつきり初歩的な授業だし、できないヤツが優先的に選ばれたっぼいな。俺英語とことん苦手だから」

ハルちゃんは黒のスラックスを払いながらゆつくりと立ち上がる。お前らは、と聞かれて、私が答える前に瞳が声を張り上げた。

「ああっ！　そーいやあんた、最近王子と仲いいんだって！？」
「は？」

「いよっしゃ、一緒にバスケ部の応援に行こうぜ！　そんで道中に馴れ初め話を聞かせてもらおうか」

「なんでだよ、つか落ち着け」

「あたしはいたって冷静です。ささ、行こうか。王子様がお待ちかねだ。ツンデレっつかクーデレだけど、うん、いいねいいね！　王子のアタックを素っ気なく突っぱねてくれたまえ！」

「なんとかしてくれ、花歩！」

ハルちゃんは腕を引かれ、先程の私のようにヨロヨロと瞳に引きずられていく。そのまま回れ右して帰るといふ魅力的な選択の誘惑にかられたけれど、瞳を彼一人に押しつけるのも気が引ける。

仕方なく、私は小走りに前を行く二人に駆け寄った。ハルちゃんの空いてる方の腕を取って、体育館に向かう瞳と足並みを揃える。そんな私をちらりと見て、瞳は満足そうに鼻を鳴らした。

彼女がハルちゃんに興味を持ったのは事実だろうけど、どうやらこれは私に対する脅迫じみたものでもあったらしい。彼を連れれば私も逃げはしない、そう踏んだのだろう。あながち間違っではないな
いけど。

だって仕方ないじゃない、ハルちゃんは私の大切な人だもの。
腕を引いた瞬間、ハルちゃんの表情がくすぐったそうに揺れたのを確かに目にして、私は心中でこっそり笑った。

＊ ＊ ＊

「うわ、すっごいねえ」

体育館は、入口からして既に相当分厚い人だかりができていた。
中どころか入口の扉すら見えない。他校の制服もかなりの割合に思われる。

体育館の中は当然のようにコートを使うから、二階の応援席と入口付近くらいしか試合の様子は目にできない。彼女達は少しでも良いポジションを得ようと肘で小突き合い脛を蹴り合い、少し離れたところではテンションが上がりすぎちゃったのか、髪を振り乱しての殴り合いが勃発している。

こ、ここまでくるとちょっと引くなあ……。

「ハイハイ通してねー」

瞳のおどけた声がしたと思えば、前に進むよう背中を強く押された。

ま、まさか私を盾にする気！？ この混雑の中、自慢じゃないけど貧弱極まりない私が無事に渡りきれるわけがない！

足を踏ん張って留まろうと試みるけど、やっぱり突き進む力の方

が圧倒的に優勢で。この子握力50叩き出した馬鹿力だし。

けれど意外なことに、女の子達はあっさりと通してくれた。

その際掛けられた言葉といえば、「ああ、岡崎ちゃんじゃ見えな
いよね」「どうぞどうぞ」「相変わらずちっこいのう」。そして散
々頭を撫でくり回される。

どうやら私が前に出たくらいじゃ観戦に支障はないと思われる
らしい。……どうせ私は小さいですよ。

比較的高身長の子とハルちゃんはどうしているかと振り返れば、
瞳はカメラをこれ見よがしにチラつかせながら、私が拓いた道をひ
よいひよいと渡っている。場所譲るからいい写真撮ってよ、承るが
いい値で買ってくれ、なんて応酬が聞こえた。なるほど、売る気満
々なのね……。

ハルちゃんと言えばいつの間にか荷物持ちにされていて、鞆
を潰さないよう胸に抱いて、慎重に身を滑らせながら歩いている。
こんな女の子だらけの雑踏、人目を引くのが苦手なハルちゃんは嫌
がるかと思っていたけど、よく見れば前列の方には男の子も多い。
他校の制服を着ていることから、偵察ってやつなのかしらと推察す
る。ハルちゃんが入り込んでも違和感はない。

それにしただってわざわざ律儀に付き合うことないのに。そんなこ
とを考えていると、顔を上げたハルちゃんとふと目が合った。その
表情には気遣わしげな色が混じっており、ああ、私を心配してくれ
ているのか、とようやく分かった。くすぐったい気遣いに頬が緩む。
……よし、もう少しだけがんばってみよう。

私はすみませんと声をかけながら人混みをかき分け、途中犬猫の
ように頭をくしゃくしゃに撫でられながら、なんとかコートの様子
が見える最前列に出た。

私が顔を上げるのと、体育館中で歓声が沸き起こったのは同時だ
った。

ここから十歩も離れていないゴール下。ボールが落下し、床に弾
む。一泊遅れて、白いユニフォームをまとった男の子が、茶色い髪

をふわりと揺らして落ちてきた。その優美な光景とは不釣り合いな、まるで現実に戻すかのように、ダン、と両足から勇ましい音が館内に鳴り響く。

リングから降りてきた選手はすらりと背を正した。その顔立ちが露わになる。見る者の時間を止める、神聖とすら言える美貌。その表情はいつもの微笑とはまったく別物の、獲物を射らんばかりに目をギラつかせた「戦う男」そのもので。

『キヤーーーーーッ!!!!』

みんながハッスルしちゃう気持ちが痛いほどよく分かった。今日の伊吹君は、ものすっごく、カッコイイ。

「わーお、 Dank かい！」

瞳が軽やかに口笛を鳴らした。頭上からしきりにシャッター音。もうちょっと早ければドンピシャで撮れたのに、とブツブツ言っている。

ふらりと傍らに人影が、と思ったら、ハルちゃんが呆然とコートを見つめていた。

「すっげー……」

その目は子供のようキラキラしていて。基本的にハルちゃんは露骨に物事へ関心を示さないけれど、やっぱり男の子ってこういうのに憧れるのかな。瞳がハルちゃんに標的を変え、私物のデジカメを向け興奮気味に撮りまくっているのにも気付かないほど熱中している。

……いいなあ、青春だなあ。身体の小さい私は運動があまり得意ではない。半ば羨みの視線をバスケ部のエース君に寄せれば、振り向きざまにこちらに顔を向けた伊吹君は、一瞬、軽く目を見開いた。ゾクリとした。

圧倒的な力が凝縮された、強烈な眼光。まるで猛獣の咆哮のような。しかしそれはまったく刹那のことで、彼はその後すぐに笑顔浮かべた。蕩けるような、心からのとびきりの笑顔。女の子がまた歓声を上げる。たしかにそれは大変魅力的なものだったけれど、私は

正直それどころじゃなかった。

恐る恐るハルちゃんを見上げる。彼はプレイに戻った伊吹君を見つめて、無邪気に目を輝かせて感動していた。

肌が粟立つ。咄嗟に腕を抱く。

いやだ。どうして気付かないの。

あれは、たしかに、

……ハルちゃんに向けたものだったのに。

「どうした、花歩」

落ち着いた低い声に、私は弾かれたように顔を上げる。心配そうな表情のハルちゃんの向こう、白いユニフォームの選手がリングに向かって跳躍していた。レイアップが決まったらしい。再び沸き起こる歓声。背中に温かな掌を感じて、私はゆっくりと息を吐いた。

コートに視線を移す。伊吹君はいまだ闘志を目に湛えたままではあるけれど、チームメイト達と笑顔でハイタッチを交わしていた。それは真剣にバスケット向き合うアスリートの表情で。

ここで私はふと我に返った。試合中だもの、険しい顔したって当たり前じゃない。何をあんなに怯えていたんだろう。

ハルちゃんは眉をしかめて、外に出るか、と小さく囁いた。瞳も窺うようにこちらを見ている。

私は小さく頭を振った。こんなことでみんなにいらぬ心配かけて、情けない。

「大丈夫だよ」

眼前のコートでは、青と白をまとった選手たちが気忙しく動き回っている。シューズが床を擦り、小気味よい音を上げる。一際目を惹く美貌のエースは、軽やかなドリブルで人の壁を抜け、整ったフォームでシュートを放った。ボールは当然のようにリングに吸い込まれていった。

ハーフタイムに入ると、今まで声を上げるだけだった女の子達が、一斉にコートへと押し寄せてきた。差し入れやら何やら、少しでも

会話をしようと躍起になっている。他のバスケ部員が果敢にも人波に立ち向かうのを目の端で捉え、私たちは体育館の外まで押し出されてしまった。

「……イモ洗ってこんな感じかな」

ハルちゃんがげんなりとぼやいた。

瞳はしきりに舌を打って悔しがっていたけど、やがて私物のデジカメを片手にニヤニヤし出した。写真部のカメラだけでなく、自分のカメラでも数枚撮影していたらしい。出来のいいものをいちいち私に見せてくる。

適当に返事をして満足なようなので、呆れ顔でぼーっと眺めていたら、ふいに腕を引かれた。掴まれた腕を辿ると、ハルちゃんが引きつった笑みを浮かべ、グラウンドを見つめている。

私も倣ってそちらに目を移すと、大勢の女の子がまさしく土煙を巻き上げながら、凄まじい勢いで突進してくるところだった。

……うわ、漫画のようだ。土煙って……うわー。

ぼけっとしているうちにハルちゃんに引っ張られるまま、少し離れたところ、渡り廊下の辺りまで下がる。

女の子達は雄叫びを上げながら体育館に突っ込んでいった。ただでさえ収集がつかなかった乱闘騒ぎに拍車が掛かる。瞳は、……流されたかなこれは。

「……女って怖えな」

「うーん、私はみんなをここまで熱狂させる伊吹くんの魅力が怖いけど」

「伊吹のフェロモンを香水にでもしたら、めちゃくちゃ売れるぜきつと。松田みたいな男子に」

「……やめときなよ、こんな現象あちこちで起きたら堪らないし」
それほどに彼女達の勢いは凄まじい。ほんと、伊吹君のフェロモンって、興奮作用でも含まれているのかな。

その後も引きも切らぬ伊吹君のファン達は際限なく増え続けた。私たちはさすがにあの中に飛び込む勇氣は持てない。まだ比較的

安全な、昇降口に続く階段で、私たちは瞳の帰りを待つことにした。「日差しが暖かいねえ」なんてどうでもいいことをのんびり談笑しながら、体育館の様子をぼんやり眺める。

もし戻ってこなければ、このまま帰宅していいかしら。いやでも、試合の結果もちよつと気になるし……。

私はもう一度体育館に目を向ける。コートへ向かう女の子の人数も大分落ち着いてきた。

そこに、ものすごく目立つ二人組がそわそわと落ち着かない足取りで歩いてきた。

……お面？ うん、お面だアレ。お面かぶってる。厚手の紙に輪ゴムを通して、耳に引っ掛けて装着するような簡単なもの。

そしてどちらの立ち姿もなんとなく見覚えがある。誰だろうと首を傾げていると、隣のハルちゃんが呆れたような声を上げた。

「おい、松田！」

二人組の片方、某国民的アイドル・草なぎ剛のお面をかぶった男の子が、後ろでくくった長い髪を馬の尻尾のように揺らし、ビクリと身を強張らせてこちらを見た。

「うわバレた……って、なーんだハルかよ。生意気に女連れて……。か、花歩ちゃーん！！！」

妙なお面をかぶった松田君はスパイクを鳴らしてこちらに駆けてきた。よく見たら泥だらけのユニフォーム姿で、今日はサッカーの試合もあったことをふと思い出す。

後ろからはもう一人、同じユニフォームに、こちらはキムタクのお面をかぶった茶髪の男の子が慌ててやってきた。

「おい松田、何やってんだ。早く行こうぜ！」

焦れたような掠れ声を聞いた瞬間、愛嬌のあるアイドル顔がぱっと思ひ浮かんだ。

「高階くん？」

言ってから「まさかね」とは思ったけど、キムタク仮面は一瞬動きを止め、がっくりと肩を落とした。ゆるゆると力なく首を振る。

え、マジで？

「やっぱバレちゃうか……」

「え、うそ、高階？」

ハルちゃんも目を丸くして驚いた。松田君じゃあるまいし、高階君はこんなことするキャラじゃない。こんなお面しなくても十分かつこいいのに。

「そんな格好でなにやってるの？」

「ああつ、許しておくれ花歩ちゃん！」

腕を広げて突進してくる松田君を、ハルちゃんが容赦ない蹴りで追い払う。ちよつと、いや、かなり痛そうだけど、正直助かった。全身泥まみれのあの格好で抱きつかれたらかなり困る。

松田君は結構な段数を転がり落ちたけど、踊り場辺りで素早く身を起こした。まるで何事もなかったかのように軽やかに駆け上がった。す、すごい……。

普通に戻ってきた松田君はハルちゃんにブツブツ文句を言いつつてふてくされながら、こんなことを言った。

「バスケ部の試合見に行こうと思ってさー。ほら、王子の人気で他校の女子も来てるじゃん？　かわいい子チェックしとこうかと。そしてあわよくば合コンに持ち込む。あ、その時はハル、お前も来いよ。王子を連れ出すいいエサになりそうだ！」

「嫌だよめんどくせえ」

「あの状況でナンパだなんて、勇者だね松田君」

伊吹君を一目見ようとものがく女の子達。隠しようもなく殺気だった体育館はもはや戦場だ。

ハルちゃんは呆れを隠そうともせず、若干疲れた調子で尋ねた。

「で、なんでまたそんな格好してるわけ？　何そのお面」

松田君はふふんと鼻を鳴らし、胸をそらした。

「そりゃ俺様の美しさを覆い隠すためさ」

「あー、俺がそのままあの中に突入したら、面倒なことになるだろう？　カモフラだよ、カモフラ」

松田君を華麗にスルーし、言い辛そうに高階君が答えた。

たしかに、伊吹君と人気を二分するといっても過言ではないイケメンの高階君があの中に紛れ込んだら、とんでもない地獄絵図が出来上がりそうだ。後から駆け付けた女の子達も、この様子だとサッカーの試合が終わったから殺到したんだろうし、高階君相手でもあのエネルギーは存分に発揮されるだろう。

「それにしたって、何でまたS M A P……」

「ああ、うちのマネージャーにすっげージャニオタがいてさー、部屋に放置してる自作ファングッズの一つをくすねてきたんだわ。似合うっしょ？」

高階君はそう言って、キムタクのお面を爪で弾く。……ジャニーズファンならば、高階君のような男の子はどツボだろうな。

「つーか、松田はまだしも、高階は今混乱を招いてまで女引っ掛ける必要なくね？」

ハルちゃんが至極もつともな意見を投げかける。松田君は彼の「まだしも」に反発し、高階君は困ったように後ろ髪を撫でさすった。

「別に俺はナンパしたいわけじゃねーよ。聡介の応援したくてさ」

そうすけ？とハルちゃんと松田君はきよんとする。最近その名を耳にした私はなるほど手を打った。

「高階君、伊吹君と仲いいもんねえ」

「そうか、王子のことか！」

って、タカお前ナンパしに行くんじゃないのかよ！ お前と一緒にだから勝算があると踏んでいたのに！ 裏切り者！ ブルータスよ、お前もか！！」

「あーうっせー！ グラウンドであんなに相手したんだから、女はもういいんだよ！」

「だからって次は男？ まあやらしい！」

「言ってるタコが」

高階君は裏声を上げて身をよじる松田君に蹴りを入れた。笑顔のキムタクに蹴られ笑顔を浮かべる草？というシュールな絵面。ああ、

そんなスパイクはいた足で蹴らなくても……。

「まあでも、この試合は見応えあるよなあ」

ハルちゃんがぼつりと溢す。先程の体育館内の熱気を思い出して、私も同意を示すようにうんうんと何度も頷いた。

双方負けまいと繰り広げられる華やかなプレイの数々に、目が追いつかないほどスピーディーな試合展開。たしかに、さっきの試合はルールがよく分からない私でも面白かった。相手もそこそこ強い学校なんだろうな。

私たちの反応に、高階君は声を明らめて拳を振った。

「だつろお？ 聡介は全国でも注目されてる選手なんだ。相手校はIH常連校だし、かなり熱い試合になるぜ！」

へえ、伊吹君ってそんなにすごい人だったんだ。顔も性格もよくて、勉強もできて、バスケは全国クラス。世の中にはこんな完璧超人もいるんだ。

同性からするとそういった存在は面白くないのか、松田君が心持ち不満げな声を上げる。

「しかし、応援たつてこの人だからじゃ見えねーぞ」

「うーん、でもせっかくだから見ときてーんだよ。俺たち部活の日程ほとんどかぶるから、聡介がバスケする姿って全然見らんねーしさあ」

高階君はよほど試合が見たいのか、未練がましくチラチラと体育館に視線を送っている。

「諦めてナンパに精を出そうぜ、タカ！」

「一人で行けて。そして玉砕しちまえ」

「ひっど！」

「放送室はどうだ？」

じゃれていたお面二人が一斉にハルちゃんに向く。何やら考え込んでいた彼はゆっくりと顔を上げた。

「体育館の。ほら、ステージの上の方、左右に窓の付いた部屋があるだろ？ あそこならコートもよく見える」

ああ、ハルちゃんたち放送委員が朝礼なんかで籠っている、あの部屋か。

松田君はまったく嫌そうに呻き、高階君はぱあっと浮かれた声を上げた。

「え、何、そこ使っているの!？」

「大丈夫だろ。俺、放送委員長だから」

「職権乱用だ!」

高階君は喚く松田君を蹴り飛ばし、「田中さまさま」と両手を擦り合わせて拝み倒す。

……そんなに応援したかったのね、高階君。

ハルちゃんは苦笑いでそれに応じ、ポケットから鍵を取り出し、指に引っ掛けくると回した。そしてお面を外すよう忠告の一言。草なぎとキムタクが顔を見合わせる。

……うんうん、私もずっと気になってた。

体育館放送室にいるよ、とメールを送って数分、下のコートでようやく試合が始まるといった頃合いに、瞳が息を切らして部屋に駆けこんできた。髪はぼさぼさ、服もヨレヨレ。よほど激しい死線にくぐり抜けてきたんだろう。

「ちよっ、置いてくってひどくね!？」

「自主的に人波に流されていったんでしょ。私たちは危ないって言ったじゃない」

「そりゃバスケット部員たちの仲睦まじい姿を少しでも、って、タカ?」
瞳の口からぼろりと零れた名前に、私は驚いて振り返る。大きな

の窓に張り付いてコートを凝視していた高階君はこちらに向いて目を見開いて、そして露骨に嫌そうな表情を浮かべた。

「げ、村木」

苦々しげに名を呼ばれた本人は「久しぶりじゃーん！」などと笑いながら高階君の背を叩く。容赦なく力を込めているらしく、高階君は途中でむせていた。鬱陶しげに彼女を振りはらう。瞳はやはりカラカラと笑った。

親しげな二人の様子に、その場にいた他のメンバーは首を傾げた。代表して私が聞いてみる。

「二人は知り合いなの？」

「おう、ウチら同中出身でさー」

「腐れ縁ってやつだよ……」

高階君はがっくりと肩を落とす。うん、よりによって瞳と腐れ縁だなんて、大変だっただろうな。

「つーかなんでお前がこんなところにいるんだよ」

「なんでって、王子の勇姿を撮りにきたんよ。ウチら写真部だからさあ」

そう言って私の肩を引き寄せた。ちよつと私まで一緒くたにしないでよ。

「そういうタカはどうなのさ」

「俺は別に、聡介の応援に」

高階君が少し照れながらそう答えた瞬間、肩に回された手に力がこもった。痛い痛い爪が食い込む。

「あんたほんとに王子のこと好きだね……！」

呆れたような声音だけれど、顔が笑っている。めちゃくちゃ笑っている。

ハルちゃん達はよく分かっているらしく困惑の様子を見せているけれど、高階君は慣れっこなのか、うんと呆れを含んだ声で「お前も相変わらずもの好きだよな」と溜息とともに吐きだした。

よく分からないけど、瞳はイケメンが大好きだ。ついでにイケメ

ン同士がくつつき合ってアヤシイ雰囲気醸していたりすると、それを見かけた途端に発狂する。私は新種の変態さんか何かだと勝手に解釈している。

そしてとうとう好奇心に耐えきれなくなったのか、それまで大人しくお菓子を摘まんでいた松田君が隣のハルちゃんの袖を引き、動物園のパンダでも前にしたかのように瞳を指差した。

「なあなあ、誰この人」

ハルちゃんは呆れとも困惑ともれない複雑な表情でこちらを窺う。

「花歩の友達、だよな？」

「なんでそこで疑問形なんだよ。紛うことなく花歩の大親友、村木瞳！」

瞳は胸を反らして偉そうに言い放つ。彼女のノリに、もともと陽気な性格の松田君は気を良くしたのか、元気いっぱいに手を上げた。

「俺はハルの大親友、松田彰！ よろしくな！」

「おい誰が大親友だ」

「俺は聡介の大親友だぜ！」

窓にへばりついて視線をコートから一切外さずに高階君が宣言する。うん、だろうね。

松田君は楽しそうにニヤリと笑い、人差し指を立てて己を指した。

「ところで俺、彼女絶賛大募集中だから！」

「はっはっは、ウチもう彼氏いるから。二次元に」

いつから次元を超えて愛を育んでいたのかしらこの子は。松田君はとりあえず「彼氏持ち」のとこだけ理解したらしく、ちよつと口を尖らせて拗ね顔を作る。

「じゃー可愛い友達紹介してくれ！」

「ここに花歩がいるけど」

「花歩ちゃんもかわいいけど！ 色んな子と交流深めて青春謳歌したいじゃん？」

「だったら、ウチにも是非イケメンを紹介してくれよ。ああ、数人

セツトだとなおいいね！ 仲良しすぎて怪しく見えちゃう二人組とか……ぐえっへっへ……」

……うん、仲良くなれそうだね二人とも。

＊ ＊ ＊

白いユニフォームの選手が放ったシュートはリングに弾かれ、青いユニフォームの敵チームの手に渡った。落胆と焦りの叫びが上がる。試合終盤、香南学園は一点だけドリッドしている。

体育館内は数多の掛け声で湧き返っていた。放送室も例外でなく。

「死守だっ、死守——！！！」

「うあっ、今のうめー」

「ディフェンスだディフェンス！！ 絶対止めろよ！」

ルールがよく分からない私は、何かある度あーだのうーだの叫ぶことしかできない。しかし試合が緊迫しているのはよく分かった。残り時間は一分を切っている。たった一点差で相手ボール、ここでゴールを決められたら逆転されてしまう。

ボールが渡る。パスを受け取った選手はまるでそれを弾くように軌道を変えてすぐさまパスを出す。それを受け取ろうとボールのもとへ走る敵チームの選手と、そうはさせまいとそれを素早く追う香南の選手。しかし近くにいたガタイのいい敵選手が咄嗟に香南選手の行く手を阻み、一瞬の遅れで阻止できなかったパスは敵チームの手にきれいに渡った。すぐさまシュートの体勢に入る。周りにいた白ユニフォームの選手達は慌てて飛び出してくるが、しかしそれは無駄に終わる。シュートは放たれず、空中から脇に放られたボールは他のノーマークの選手に渡った。目を見開いた香南の選手たちの

表情がよく見える。ボールを受け取った選手はドリブルで風のようにゴールへ一気に詰め寄り、レイアップシュートを放った。

「あ——！！！」

相手校の得点に二点が増された。青いユニフォームの選手たちは弾けんばかりの笑顔でハイタッチを交わし、腕を回しあっている。

……逆転されてしまった。

残り時間は十秒と少し。

誰もが香南の負けを確信した。肩を落としあるいは狂喜している中で。

ざわめきを切り裂くように鋭い声がコートに響いた。

「よこせ！」

コートの端でボールを抱えた白ユニフォームの選手が、ハツとしたように声を上げた人物にパスを投げた。

彼は受け取りざまボールを床につき走り出す。センターラインを踏み越え一人抜きんでたところで、それが伊吹君だとうやく分かった。

白・青双方の選手が弾かれたように彼を追う。がむしゃらに駆けつけた敵選手が一人追いつき、ボールに手を伸ばしたところで、伊吹君は床を鳴らして急停止した。

それをすっかりと理解するころには、ボールは宙に放られていて、痛いくらいの静寂の中、時間切れのブザーが響いた。

シュートの形に両腕を上げた伊吹君は、髪を揺らして軽やかに着地する。

体育館中、ボール以外のものすべてが動きを止める。

その場にいる全員が見守る中、バスケットボールは重力に従いリングをくぐり、微かな音を立ててネットを揺らした。そのまま落下し、てん、と床を転がる。

審判の笛が鳴る。腕が大きく振り下ろされる。

得点板の香南学園に二点加わった。

「うわあああ！！！」

割れんばかりの歓声が体育館いっばいに沸き上がった。放送室でももれなく全員が声を上げ、私も思わず叫んで立ち上がる。頭上ではハルちゃんと高階君が歓声を上げハイタッチを交わしていた。

「すごいすごい！ 伊吹くんかっこいいね！」

興奮のまま横にいた瞳に抱きつくと、彼女はとりつかれたようにカメラのシャッターを押しまくっていた。うんまあ、分からなくもない。私は他のみんなと手を合わせ跳ね上がり、もう一度コートに目を向けた。

相手チームの選手が呆然と見守る中、伊吹君は満面の笑みを浮かべたチームメイト達にもみくちゃんにされている。試合中の厳しい表情とはまったく違う、見慣れた笑顔。しかしいつもより子供っぽい、喜びいっばいの笑顔がそこにはあった。

＊ ＊ ＊

「いやーいい試合だった！ 王子がモテモテなのも分かるわ！」

瞳はほくほくとデジカメを操作していた。さっきまでは「最後の一番いい瞬間を撮りそびれた！」と大層悔しがっていたけれど、ようやく浮上したらしい。

「うん、カッコよかったね伊吹くん」

「えっマジで？ 俺バスケやろっかな！」

明るい声を上げた松田君に、瞳は生温かい目で笑みを送り、高階君は「お前は背低いから無理、サッカーにしとけ」と笑顔で突っ込んでいた。

ハルちゃんは彼らの騒ぎように溜息を一つついて、外の様子と携帯のディスプレイを見比べる。

「そろそろ出てもいいかもな」

放送室の窓から体育館内を見下ろせば、女の子の数はかなり減っていた。相手校のバスケット部も体育館を去り、今はバスケット部員同士で談笑しながら片づけをしている。

先程までは伊吹君に殺到する女の子で大変なことになっていたけど、部員さんたちの懸命な働きでなんとかスムーズに接触を図らせ（まるで握手会か何かのようだった）、今のところほとんどの観客が追い出されていた。

私たちはダラダラと階段を降りながら、普段人目につきにくい、体育館裏の出入り口から外へ出た。

久しぶりに浴びる陽光に目を細める。見慣れない景色が新鮮でなんとなく辺りを見回していたら、少し離れたところ、駐輪場の辺りでチアガール姿の女の子達が興奮気味に話し込んでいるのが目に入った。

私はふと、先日自分に詰め寄ってきた赤い髪の女の子を思い出した。たしか愛沢さんはダンス同好会で、チアガールとして運動部の試合の応援もしていたはず。彼女もこの試合を見ていたのだろうか。視界の端で、松田君が腕を上げて伸びをする。

「あーなんか腹減ったなー。ハルちゃん奢って!」

「奢りはしねーけど確かに腹減ったな。どっか寄ってくか?」

ハルちゃんが微かに笑みを浮かべて振り返る。私は笑い返して答えた。

「お昼? いいね、わたし Pasta 食べたいな」

「えー、金ねーし マックでいいじゃん」

「瞳ってジャンクフード好きだよねー」

「金の問題ならファミレスでいいだろ? 何でも揃ってるし」

「あ、ちよっと待って田中」

先に歩きだしたハルちゃんを、高階君が呼びとめる。何事かと見守っていれば、高階君は体育館に駆け寄り、入口から中に向かって大声を張り上げた。

「聡介!!」

辺りにぼつぽつと屯していた女の子達が一斉にこちらを見た。瞳が面白がって高階君を追ひ、入口に向かった。

ハルちゃんが小さく息を吐く。機嫌悪くしたのかなと見上げてみても、ハルちゃんはさほどイヤそうでもなかった。むしろ一瞬、「仕方ないな」と言わんばかりに頬を緩めたことに少なからず驚いた。

高階君と瞳はバスケット部員らしい人達としばし話し込み、一区切りついたあたりで、一歩後ろに下がった。同時に、体育館から黒いジャージを身にまとった背の高い男の子が現れる。

「よお! 本日のヒーローさんよ!」

松田君が声を上げた。先程の活躍が鮮明に蘇り、私も笑って心から拍手を送る。今日の彼は本当にカッコよかった。

ジャージに不釣り合いなほど典雅な面立ちの伊吹君は、はにかみながら綺麗に笑った。

「すごかったね伊吹君!」

「ブザービーターってやつだろ、あれ! 俺鳥肌立っちゃったもんよ!」

私たちは今日の試合のMVPに駆け寄った。近くで見るとやはりいつもの優しい伊吹君で、先程コートで縦横無尽に駆けていた選手とはなかなか結びつかない。

伊吹君は試合中の険しい表情とはまた違う、優美で魅力的な笑みを浮かべた。

「ありがとう。みんな見てたのか、ちよつと照れるな」

伊吹君は笑顔で答え、そして目線を私たちの背後に投げる。瞬間、彼の茶色い瞳が光を反射し、きらりと瞬いて見えた。

……なんだろう?

気になって振り返れば、ハルちゃんがゆっくり歩いてくるところだった。

あ、なんとなく分かった。

「お疲れさん。お前バスケットうまいんだな」

「ああ、小学生のころからやってるからね」

キラキラキラ。意識してみればあまりに分かりやすい。私は咄嗟の笑いを堪える。

……褒めてほしいんだ、伊吹くんは。

気付いているのかいないのか、いつものようにどこか懨然とした表情を浮かべていたハルちゃんは、じっと伊吹君を見つめ、そしてニカッと笑った。

「すっげーカッコよかった」

いつもしかめっ面が多い分、ハルちゃんの笑顔はとても優しい。思わずこちらまで笑ってしまう。

ふいに隣から息を呑む心配がして、私は何気なくそちらを見上げた。傍らの伊吹君は瞬きもせず、どこか驚いたようにハルちゃんを凝視していた。

どうしたんだろう、もっと喜ぶと思ったのに。内心首を傾げながら見つめていると、上機嫌な松田君に背を叩かれ、伊吹君は我に返ったように彼へ視線を移した。

「っーかさ、俺ら飯食いにいこっっー話してたんだけどよー、王子も行くか？」

伊吹君はちらりと体育館を見やって、小さく頷いた。

「そうだね、行こうかな」

「バスケ部はいいのか？ 打ち上げとかねーの？」

「みんな試合直後で食欲ないみたいで。でも俺腹ペコでさ、正直助かった」

伊吹君は高階君の問いにもニコニコと応じている。

……さっきのは一体何だったんだろう。

ぼんやりと男の子達のやりとりを見つめていたら、肩をちよんとつつかれた。目を向けると、軽く顔をしかめた瞳が人差し指であらぬ方を指している。

促されるまま視線を動かすと、チアガール姿の女の子達が一樣にこちらを見ていた。辺りにいる他の女の子もそわそわと落ち着かな

い様子でこちらを窺っている。

『聡介に手を出さないで』

ふと、先日赤い髪の少女が放った、刺々しい言葉が蘇る。
そして今日、伊吹君を一目見ようともがき戦う女の子達の熱狂ぶりを思い出し、私は重い溜息を吐いた。

「……わたしはやめとくよ」

何を食べるか熱く議論していた男の子たちが、きょとんこちらに目を向けた。いち早く事情を察した伊吹君が済まなそうに眉を下げる。彼が何か言い出す前に、私は笑って手を振った。今日一番頑張ったんだもの、彼を優先すべきだ。

松田君が不満げに唇を尖らせる。

「えーっ、花歩ちゃん行かねーの？」

「うん。また今度の機会に、みんなと一緒に行こうね」

そう答えれば、伊吹君は少しだけ安堵し、松田君は機嫌を良くしたようだった。

ハルちゃんは上機嫌に絡んでくる松田君を引き離し、顔をしかめて見下ろしてくる。

「花歩」

「わたしは大丈夫。楽しんできて」

多分、ここで彼らと一緒に行って女の子達の反感を買い、一番悲しむのは伊吹君だ。きっとそれを分かってくれたのだろう、ハルちゃんは目を和らげ、ぽんと優しくわたしの頭に手を置いた。

黙って待っていた瞳が皆を見回し、カメラを掲げてニヤリと笑う。

「ウチも写真現像しなきゃだし、ここらで失礼させてもらうわ。校内新聞楽しみにしてるよ、王子！

そんじゃ花歩、行こっか」

私たちはなんとか穏やかな雰囲気の中、手を振って無事に彼らと別れた。

「瞳まで付き合う必要なかったのに」

部室へ向かう道すがら、気になったことを聞いてみた。彼女なら喜んで彼らについていくと思ったのに。

「さすがに今日の騒ぎを見たら、ねえ」

瞳はげんなりと肩をすくめる。

たしかに、あれだけの熱意を憎悪に変えてこちらに向けられては、たまったもんじゃない。

私は上履きの先で、ひび割れた床を軽く蹴る。

嫉妬されるのはあまり好きじゃない。

こっちは何もしてないのに一方的に嫌われるなんて、はつきり言っ
て面白くないし、どう反応していいか困ってしまう。

「……何されるか分かったもんじゃないしね」

生を受けて一六年、このことに関しては嫌ってほど身に沁みている。

強張った声音に何かを感じ取ったのか、瞳は空気を変えるべく、わざとらしい程おどけた声を上げた。

「だったら、花歩の大好きな『ハルちゃん』も連れてくりゃよかったね」

私は足を止める。聞き捨てならない名前に眉をひそめて、どこか楽しげな瞳を見上げた。

「なんでそこでハルちゃんが出てくるの？」

「気付かなかった？ タカがすっげー目で田中のこと見てたじゃん」
「すっげー目で」

嫉妬でもしていたというのだろうか。高階君が、ハルちゃんに対して？ よく分からない。

首を傾げていると、瞳は大層楽しげにくつくつと笑った。

「これから面白くなるな！」

「何が？」

「あいつら。ああ、花歩と愛沢辺りも含めて。なんか一波乱ありそうだ」

私を勝手に巻き込まないでほしい。

「……何を根拠に？」

「乙女のカン」

「よかった、それなら信用できないね」

満面の笑みで言っただけならば、生意気と頬をつねられた。

しかし今日一日で目にした女の子達の熱視線、そして伊吹君の意味深な視線を思い起こすと、やっぱりこれから、何か面倒が起こるのかもしれない。頬の痛みを言い訳にして、苦い気持ちをそっと表情に浮かべた。

7. わんこ大捜査線

side…春風

伊吹聡介という人間は、知れば知るほど「面白い」とつくづく思う。

俺は目の前にいる王子サマ然としたすこぶる美形を観察してみる。俺達は机を向かい合わせにして各々の勉強を進めており、伊吹の視線は机上の大学ノートに注がれている。俺の視線にはちっとも気付かないようで、ただ熱心にノートを見つめ、緩やかな速度で、しかし絶えずペンを動かしている。

しばらく見ていて気付いたのは、ヤツが両利きだということ。どうやらペンを取った方の手で書くようにしているらしい。手が疲れても持ち替えれば書き続けられると思うとめっちゃくちや得な気がする。まあそんなことどうでもいいが。集中力がプツンしてしまった俺は現実逃避に走っていた。

俺は夢く続いていた集中を無情にも妨げた諸悪の根源を軽く睨みつける。

己の机に広げられた、美しく分かりやすくまとまっているそのノートの端っこ。スペースが余ってしまったんだろう。……猫なんだか何なんだか、よく分からないキャラクターが愛らしい笑みを浮かべて、俺のことをじっと見つめていた。

しかしほんとに何だろうこれ。猫か？ 犬か？ 丸い顔に三角の耳、くりくりとつぶらな目をした哺乳類っぽい動物。首元にはなぜかヒーローマフラー。ほわわんとした可愛らしい絵柄がまた脱力を誘う。

俺はもう一度伊吹に視線を移した。どの角度から見ても美しい王子サマは真剣な表情でノートを取っている。

こいつがこのよう分かん愛らしい生物の生みの親だと思つと、

どうにも笑えて仕方ない。実際最初に見た時は小さく嘖き出したものだ。

しかしこいつは凄まじい集中力を備えているようで、声をかけようと笑い出そうと、物音にちっとも反応しない。

おかげで俺はまじまじとこの落書きと書き手本人とを不躰に見比べるなんてことができるわけだが。

俺と伊吹がこうして向かい合っているのには、深く重苦しい事情がある。

……進級した俺達の前に立ちはだかる最初の壁、第一回中間テストだ。

テストといっても、香南学園はほぼ全員が一流大学を目指すような学校なので、中学の時ほど順位を気にする必要はない。まだ二年だし、授業に置いていかれず平均点取れば十分だ。

ただし俺には、赤点の危機が見え隠れしている、英語という悪魔の教科が待っていた。

俺は昔っから英語だけはダメだった。もう何が分からないのか分からないという、どこの小学生だと突っ込みたくなるような惨状だ。とりあえずクラスメイトに頼み込んで教科書の訳だけは手に入れたが、それで？って感じ。そこから何をすればいいのか分からない。単語と日本語訳を覚えるくらいの努力はするが、英語原文をいじった穴埋めや並び替え、英作文になるとお手上げだ。どこら辺が出るのかちっとも予想できない。

そんなことをポロッと伊吹の前でこぼしたら、「じゃあ教えてあげるよ」と彼は菩薩のような笑みで救いの手を差し伸べてくれた。

……神さまってこんなにイケメンだったんだな、とわりかし本気で思った。

ちなみに全教科赤点スレスレな松田も食いついてきて、伊吹の方も難しい顔をした高階を連れてきた（どうも松田ばりの悲惨な成績らしい）。

かくして急に企画された放課後の勉強会はよく分からん面子の四人で始まった。

そして早々に根を上げたサッカー部二人は妙に晴れやかな笑顔で「飲み物買ってくる!」と出て行って二十分ほどになる。

これらの経緯をふまえ、今に至るわけだ。

三組の教室には、俺と伊吹の二人きり。

俺は己の手元にある、伊吹に借り受けた英語のノートに視線を移した。教科書の本文をコピーしたものを段落ごとに切り取って張り付け、その下に綺麗な字でまとめられた日本語訳。分かりづらい英文は蛍光ペンで彩られ、横のページに丁寧な解説が添えられている。頻繁に出る割には覚えづらい単語や重要になる前置詞には緑ペンでマーカ―され、赤シートで隠れるようになっていた。

正直に言う。ものすごく分かりやすい。

前に見せてもらった山本のノートも大概よくまとまっていたが、伊吹のノートはほんとに「勉強するため」に用いるよう、考えて作られているのがよく分かる。ただ覚えようとするんじゃないくて、どうすれば自分の身につくのか考えて、小さな工夫を重ねている。こういうものこそを努力っていうんだろうな。

そんな伊吹の頑張りのおかげで、途中で自分の課題に夢中になった彼に放置をくらっても、ノートを借りただけでそれなりに勉強を進められたわけだが。

それにしても、ほんとと、集中しまくってんなこいつ。これだけガン見しても気付かんとは。

……逆に、これだけ眺めていても飽きない顔ってのもすごくねーか? これがもし松田だったら俺は一分も持たないだろう。

窓からの陽光を受けて、光の粉をまとった柔らかそうな茶色い髪。やや長めの前髪の方こうで、伏せた睫毛が時折瞬いて震えており、形のいい唇はいたって自然に閉じられている。

まるで芸術作品のようだ。喋らないと余計にそう思える。

なんだか腹が立つ。こいつは石膏像でも何でもなく、人間である

はずだ。そうでなければ、俺は教室で一人ぼっちになってしまう。
心底面白くない。

「……伊吹」

声をかけてみる。反応はナシ。

「おーい、いーぶきー」

今度はリズムに乗せて。やっぱり気付かない。しかし俺相当キモくないか？ まあいいや。気付かない伊吹が悪い。

その後何度か名を呼んでみるが、ヤツはすっかり数学の計算式に夢中で、ちっとも気付く様子がない。「いぶき」がゲシュタルト崩壊しそうだ。そもそもいぶきってどう書くんだっけ。息吹、違うな。ああ、樹木の伊吹か。

そういえば、こいつの下の名前ってなんだっけ。高階がよく口にしていた気がする。フルネームを音にしてみると爽やかな感じで、えーと。

「伊吹聡介」

そうだ、これだ。俺は目の前の王子に視線を固定し、もう一度口を開く。

「そうすけ」

お、手が止まった。ヤツはおもむろに頭を沈め俯いて、ピクリとも動かなくなる。

……なんだなんだ。

少し様子を窺おうと机に身を寄せたところで、伊吹は勢いよく顔を上げた。

「……今のハル？」

どうしたお前。

「顔真っ赤」

伊吹は林檎か苺のように頬を染め、どこか情けない表情で俺を見ていた。

「あー、うん、なんだろ。うわー、すっげー照れる」

手で口元を覆い、俯きがちに目を逸らす。おー、なんだか今のサ

マになってた。

しかし何を照れているんだこいつは。

「なに、呼び捨てされんの苦手？」

「や、苦手とかじゃなくて。」

「……うーん、なんだろ。何だと思う？」

「俺に聞くなよ」

それにしても可哀想なくらい顔が赤い。心なしか目も涙で潤んでいる。熱でもあんのか？

はかってみようと額に手を伸ばしたところで、呆れた風な低い声が教室に響いた。

「……何してんのお前ら」

俺達は二人して飛び上がらんばかりに驚いた。慌てて声がした方へと顔を向ける。

そこにはクラスメイトの強面系イケメン、山本が、相変わらずの無表情で、教室の扉に手をかけたまま佇んでいた。

「……びっくりしたー。山本かよ」

「いやいや、びっくりしたのは俺だから」

山本は首を振りながらそう答え、俺達が座る隣の席から、学校指定のスクールバッグを取り上げた。ああ、鞆を取りに来たのか。

「しかし田中、いくら王子がキレーな顔してるからって、男に襲い掛かるのはどうかと思うぜ」

「は？ 襲う？」

俺の問いに山本は三白眼を軽く見開いて、とんでもないことを言っただけだ。

「え、ちゅーしようとしてたんじゃねーの」

「ちっげーよ！」

なんと恐ろしいことを。まあ確かに伊吹の美貌にちょっと見とれたりなんかしちゃってたけど、キスしようとはまではさすがに思わん！

「なあ伊吹！」

「え、あ、うん。ちゅーはないんじゃないかな」

伊吹は未だに真っ赤な頬を両手で包み、どこか上の空で答える。
なんだその乙女な仕草は。

山本は特に感情を顔には出さず、ただ目を細めた。あーあ疑ってやがる。

「ま、いいけど。俺もう行くから、後は好きにやんな」

「あーもー誤解だっつの」

「はいはい」

山本は聞いてんだか聞いてないんだか、俺達に背を向け、鞆を片手に再び教室前方のドアに向かい、戸を開け、そして閉めた。

「どうしたの？ 山本君」

ノートを煽って頬を冷ましている伊吹が、呆然と立ち尽くす山本の背中に声をかける。

山本はこちらも向かずただ佇んだまま答えた。

「犬がいる」

「はあ？」

俺が呆れ声を上げたのと同時に、どたばたと騒がしい足音が耳に入った。

あっという間に近づいて来たと思ったら、廊下側の窓が勢いよく開け放たれる。開いた窓から見覚えのある顔が身を乗り出して、突っ立っている山本に向かって大声で怒鳴った。

「おいバカ山本！ そこは飛び出して行って俺と挟み撃ちだろうが！！」

「意味分かんねー」

「……何やってんだ松田」

目に痛い黄色いパーカー姿の松田は、興奮冷めやらぬ様子でぎょろりとこちらに目を向けた。団子にまとめた黒い髪は所々ほつれている。肩で息をしているあたり、よほどハッスルしてきたらしい。

「うおっ、ハルに王子！ そっかここ三組か」

松田はそう目を見張ったところで、打撃音と共にヤツの姿が窓か

ら消える。かわりに、よりぐったりと疲弊した高階が現れた。

「ちょ、おっまえ、犬は、どうした、犬は！」

「いってーな。犬なら行っちゃったよ。山本がせっかくのチャンス逃がしちゃうからさー」

「ドアを開けたら犬が横切って行っただけなのに、何だこの仕打ち」「さっきから犬犬って、何かあったの？」

とんとん拍子に進む会話に、伊吹が穏やかに口を挟んだ。俺も気になる。教室の外で一体何が。

数回深呼吸をして息を整えた松田は（凄まじい回復力だ）、けろりと元気な様子で答えた。

「俺たちさー、犬追ってんだわ、犬」

「だから、犬って何」

「校内に、入り込んだんだよ、でっけー、犬が」

未だに息の荒い高階が、窓の縁にぐったり寄りかかって、切れ切れに言葉を紡ぐ。

伊吹が立ち上がって廊下側の窓へと向かった。俺もそれに倣う。

手近の窓を開けて顔を出して廊下を窺うが、犬らしき影は見えなかった。ああ、逃げたとかどうとか言ってたっけ。

「タカ、大丈夫？」

「……こいつ人間じゃねえ」

指差した先は、むろん松田。先程見られた疲労もすっかり回復して、ピンピンした様子で山本に絡んでいる。……こいつの運動能力は超人的だからな。

「つまりお前らは、どういう経緯かは知らねーが、校内に紛れ込んだ犬を追ってここまで走ってきて、すっかり疲れきっちゃった、ってことか」

ついでに山本が逃走する犬に偶然かち合って、松田は彼に「その時に捕まえてくれればよかったのに」と言いがかりをつけている、ってわけだ。

「でも、なんでタカと松田君が？」

伊吹が首を傾げる。高階が口を開くが、彼の言葉はバタバタと騒がしい複数の足音に遮られた。

「松田君、高階君！」

向こうからやってきたのは数人の教員たちだ。最初に辿り着いたのは若い数学の男性教師。その後お年を召した社会の中年教師と、英語の女性教師が息を切らせて駆け寄って来た。

そしてもう一つ聞こえる、落ち着いた足音。

「わんちゃんはどこいった？」

……校長先生が、涙目の幼女を連れて現れた。

＊ ＊ ＊

「えーと、じゃあ、その子の飼い犬が校内に紛れ込んだんじゃったんですね」

伊吹の言葉に、校長は鷹揚に頷いた。隣に座る女の子もこくこくと頭を振っている。

彼女は近所に住む小学生で、ユリコちゃんというらしい。いつものように愛犬「ラッキー」の散歩をしていたら、うっかりリードを放してしまい、犬はうちの校門の向こうに走りこんで行ったという。

どうしようかと途方に暮れていたところに、通りかかった校長先生が彼女を保護した。事情を知った校長は適当に教員を数人捕まえ、犬の搜索・捕獲を頼んだ。そんな面倒を押しつけられた彼らはちようどぼったり出くわした松田と高階に協力を仰いだ。どうせそのまま戻っても勉強するしかなかった彼らは喜んで話に乗った、ということらしい。どれだけ他力本願の連鎖だよ。

そして、その忌まわしい連鎖はまだ続く。

教員の一人が「田中って放送委員長じゃん、校内放送で情報提供呼び掛けてくれよ！」などと迷惑極まりないことを言い出したのだ。おかげで現在俺は、放送室で混乱気味のユリコちゃんからたどたどしい話を聞いて、事態を把握することに努めている。

……これじゃ完全に関係者だ。

ちなみに他の奴らも（教員含め）面白がって付いて来たため、狭い放送室はぎゅうぎゅう詰めで鬱陶しいことこの上ない。お前らヒマならせめて犬探しに出て行けよ、と叫べたらどれだけ良いか。

俺は一通りの話を聞いて、肺から大きな溜息を吐きだした。なるだけ冷静を装って隣の松田に聞いてみる。

「……お前から見た感じ、どんな犬だった？」

「それがさ、マジででっけーの。ほら、「アルプスの少女ハイジ」に出てくるヨーゼフみたいなやつ」

あのでかい犬か。なんつー種類だっけ、と誰にともなくぼやいてみたら、耳ざとく拾った山本が「セントバーナード」とあっさり答えた。……そういえば、ヨーゼフって山本にちよつと似てるかも。あの老け顔と気だるげな表情が。怖いからぜってー言わないけど。

「……でも、そんなでかい犬、ユリコちゃん一人でよく散歩できるな」

ふと疑問に思ったことを聞いてみる。そんなに大きな犬ならば、まだ小学生のユリコちゃんがリードを引くには重労働なんじゃないだろうか。

「ラッキーはおっきいけど、すっごくお利口なんだよ。ユリコのいうことよく聞いてくれるもん。」

だから、いきなり走り出したときびっくりしちゃって「しゅん、と眉を下げられる。」

「ラッキー、見つかるよね？」

俺はユリコちゃんの頭に手を置いてやる。柔らかな髪感触に、ふと、可憐な幼馴染を思い出した。

うん、放送くらいやってあげよう。あとで先輩に怒られるかもしれないが、まあしょうがない。

俺は覚悟を決め、ようやく放送のスイッチを入れた。

『校内放送で失礼します。二年放送委員長の田中です。』

校内に大型犬が迷い込んだ恐れがあります。犬種はセントバーナード、赤い首輪を着用しています。

まだ校内に残っている生徒は十分に気を付けてください。また、見かけた方は放送室へご一報お願いします』

もう一度同じ内容を繰り返し、情報提供の協力を念押しして締めくくった。

もういいだろと振り返ると、校長先生が満面の笑みで親指を立ててみせた。……なんだろう、すっげー腹立つ。

「……さてと。あなた方にはもう一度校内を見てもらいましょうかね」

校長はにこやかに室内を見渡した。視線を受けた教員たちは感情を隠そうともせず一様にイヤそうな表情を浮かべる。仮にも上司相手にこれはひどい。いつも思うが、ここの教師は生徒以上にフリーダムだ。

「捕まえてきてくれたら、来週からの早朝生活指導、お休みいただいて結構です」

校長はそれを上回るフリーダムっぷりを発揮しているけれど。

教師たちは無言のまま放送室を出て行った。彼らの瞳にはしっかりと熱い闘志が燃え滾っていた。生活指導をサボりたいって、どうしようもねーなあの人たち。

「松田君と高階君。君たちも引き続き頼みたいな」

「うええ〜？ 俺もう疲れたっすよ」

松田はちっともそうは見えない様子で不満の声を上げる。たしかに、今でこそピンピンしているが、先程のように松田が息を切らしている姿など久しぶりに見た。体力測定の持久走以来じゃないか。

まあ、犬と互角に追いかけてたなら疲れもするか。隣の高階も必死に首を横に振っている。……なんだか可哀想になってきた。

しかし校長は表情をこれっぽっちも動かさず、部屋の奥でそしらぬ顔して傍観していた二人にも笑顔を向けた。

「まあそう言わずに。伊吹君と……山本君かな？ 君たちも手伝ってくれるよね？」

ほら、人数が増えれば大分楽になるでしょう」

「ちょっと待った何すかそれ」

すかさず山本が口を挟む。

「まあまあ、お礼は弾むから」

「お礼？」

「学食で一週間分の食券をもらってきてあげる。好きなメニューをリクエストしてくれていいよ」

全員無言で部屋を出た。……お前らどんだけ飢えてんだよ。

校長は深く皺が刻まれたその悪魔の笑みを、とうとうこちらに向けてきた。

「ああ、田中君はとりあえずここで待機ね。司令塔ってやつだ、かつこいいね」

地味な俺の存在を忘れてくれているのを期待していたが、やはりダメだったらしい。何が「かつこいいね」だ。

「……校長先生が残っていれば十分なんじゃないですか」

「だめだよ、情報が入ったらそっちへ駆けつける人員が必要でしょう」

ねえユリコちゃん、と校長は隣で縮こまっていた小学生に優しく声をかける。

彼女はよく分かっていないだろうにこくんと頷き、潤んだ瞳に懇願を湛えて見上げてきた。……なんだこれ、断ったら俺が悪者みたいじゃないか。勘弁してくれよマジで。

俺は溜息を一つ吐いて、パイプ椅子に腰を落ち着けた。

仕方ない。正直気は乗らないが……やってやろうじゃないか。

放送の後、数人の生徒が報告に来た。

見かけた時間はまちまちだけれど、統合するとどうやら中庭辺りの目撃情報が多い気がする。

隣で報告を聞いていた校長は、彼らもまた駒にしようと（半ば強引に）協力を求め、松田などの先発隊には俺の携帯を通して新たな指示を送っていた。

校長の指示は迅速で果断、そして的確。彼に関して何より驚いたのが、誰一人名乗っていないのに、全員の名字を当然のように知っていたことだ。そういえば俺の名前も普通に呼んでたな。やはりただの人を食ったおっさんというわけではないらしい。

しかしさすがに校長としての仕事もあるらしく、途中で怒り心頭の教頭が放送室に乗り込んできた。校長は「すぐに戻るから」と一言残し、教頭に引きずられるようにして退室してしまった。

「おじさんすごいねえ。校長せんせいだったんだ」

隣で大人しく聞いていたユリコちゃんがぽつりと溢した。

俺が目を向けると、一瞬怯えたように肩を震わせる。俺が乗り気じゃないのを気にしているのかもしれない。意識して表情を緩めると、彼女はほっとしたように口元に笑みを浮かべた。

「おにいさんもすごいよ。放送で、学校中の人にお話ししたんだもん。ユリコだったらきんちようしてなんにも言えないよ」

「そりゃどうも」

笑って言えば、ユリコちゃんも楽しそうに笑った。構ってもらえるのが嬉しいらしい。今まではラッキーの安否の不安と、見知らぬ

環境での緊張で固まっていたというところか。乱暴に頭を撫でてやれば、くしゃくしゃの笑顔で甲高い歓声を上げた。もともと懐っこい子なのかもしれない。

「ユリコちゃんはさ、いつもこの辺散歩してるのか？」

「うん。でも今日は、落とし物をさがしながら歩いてたから、ついラッキーのことわすれてて、手もはなしちゃって」

そしてしゅんと肩を落としてしまう。

「落とし物？」

「えっとね、ニャンピーって知ってる？」

聞いたこともないが、とりあえず頷いておく。ここで知らんと答えたらきつと話が脱線するから。

「ユリコね、お喋りするニャンピーのお人形がすごくほしかったんだけど、パパとママはお金がないからダメって。」

でもね、フェルトと糸で、ママがニャンピーのお人形を作ってくれたんだ！」

頬を桃色に染め、目に光を湛えて輝かせて。よほど嬉しかったらしい。

しかしユリコちゃんは、ふと苦しそうに眉を寄せた。きらきらと綺麗な目を、少しずつ涙で潤ませる。

「ほんとにほんとにうれしくて、ユリコいつもそのニャンピーをもってただけど、昨日のお散歩でなくしちゃったみたいなの。」

だから、ラッキーといっしょにさがしてたんだけど……」

ユリコちゃんは深く俯く。ぽつりと、子供らしい可憐な声に悲しみをたっぷり乗せて、小さな呟きが零れおちた。

「ママが作ってくれたものなんだよ。いっしょうけんめい」

そうか。この子は、母親の努力を想って悲しんでいる。

優しい子だ。母親もきつと温かい人なのだろう。

母親が作ってくれた人形を落としてしまい、更に愛犬まで行方不明で、ユリコちゃんはよほど自分を責めているにちがいない。

俺はなんだか悲しくなって、そっとユリコちゃんの頭を撫でた。

子供特有の、握りしめたら溶けてしまいそうな手触りのよい細い髪。掌に感じる、熱の高い子供のぬくもり。

家族というものの温かさが、揺るがない安心感が、——当然のよう
に己を受け入れてくれる居場所が、ふと恋しく思った。

＊ ＊ ＊

それからしばらく報告は途絶え、暇を持て余した俺はユリコちゃん
とじゃれて遊んでいた。

子供は結構好きだ。……そして俺のイメージに合っていないのは自
覚している。子供を前にした俺の姿に、松田が慄くようにビビって
いたのは記憶に新しい。

なんとなく、幼い頃の自分の姿を重ねてしまうのだ。甘えてくる
なら甘やかしてやりたい。なるだけ寂しい思いはさせたくない。

そして、そんな俺を小さな頃から甘やかしてくれる幼馴染から、
唐突に携帯へ着信がきた。

『もしもし、ハルちゃん？』

「花歩」

『さっきの放送ハルちゃんでしょ？ さっき松田くんにも会ったけ
ど、相変わらず面白いことしてるね』

笑う気配が伝わってくる。相変わらずって、俺がいつも面白おか
しいことしているみたいじゃないか。

「巻き込まれたただだよ。つーわけで、でかい犬見なかったか？」

『それがね、さっき一階の渡り廊下で』

『いよーう田中！ 相変わらずいい声してんねあんた！』

突然割って入ったはしゃぎ声。……聞き覚えは十分にあるが。

「……村木か？」

『ご明答。犬探しなんて楽しそうなことしてんじゃん、ウチらもまぜてっ！』

ということで、報告だぜ〜！』

『ちよっと瞳、返してよー』

遠くで花歩の声がする。彼女たちは二、三言交わし合い、結局花歩が発言権を取り戻した。

『えっとね、犬を見かけたって話なんだけど。

わたしたちは二号館の校舎から、一階の渡り廊下を横切る犬を見たの。途中で会った人が中庭に向かう犬を見た、って言ってたから、渡り廊下を通して中庭に行ってみようと思って』

どうやら協力してくれるらしい。今までの報告と照らし合わせると、なかなか有力な情報だ。礼を言うと、花歩は『どういたしまして』と明るく答えた。こういった受け答えがちつとも嫌味に聞こえないのは、伊吹と通ずるものがある。

「……花歩、手伝ってくれるのは嬉しいけど、くれぐれも気をつけろよ。大分でかい犬らしいから」

かすかな笑い声が聞こえる。どうやら照れているらしい。

『うん、ありがと。じゃあまた何かあったら連絡するね』

「おう」

中庭、か。生徒からの報告は、後になるにつれて中庭での目撃情報が増えている。あの辺でふらふらしてるところだろう。他のメンバーにも連絡入れといった方がいいのかな。

とりあえずメールを送ろうと携帯を開いたところで、放送室の戸が豪快に開いた。

女子生徒が一人、慌ただしげに室内に駆け込んでくる。

黒いショートヘアに緑ジャージ。一年生らしい。

「ああああのっ、犬が、おっきい犬がっ！

倉庫に居ついちゃって、私たち怖くて、片づけできなくて……！」
手を振ってわたたと説明される。俺はとりあえず椅子に勧めて、

落ち着くよう促した。ゆっくり深呼吸させる。隣でユリコちゃんも真似ているのがなんだか面白かった。

さて、目撃情報か。

「犬を見たんだな。それはいつ、どこで？」

「えっと、食堂の近くにある、古い倉庫の中です。」

私たち体育委員なんですけど、今度のスポーツ大会で使う道具の確認をしなくちゃいけなくて、作業のために倉庫の戸を開けっ放しにしてたら、大きい犬が入り込んだんです。

ほんとにさっきです。多分今もいます」

食堂の近くの、古い倉庫。倉庫の位置はいまいち掴めないが、食堂が中庭の奥にあるので、恐らくそこから移動したのだろう。

今もいる、っていうのは結構大きなチャンスなのは。俺は皆に連絡するため携帯に手を伸ばす。そこで、一年生が焦ったような、困惑したような眼差しで俺を見ているのに気付いた。

俺は頭の中で彼女の言葉をなぞり直す。体育委員の仕事で倉庫を使っており、犬が居ついてしまい「怖くて」「片づけできなくて」。

……どうにかしてほしいってか？

隣からは小さく袖を引かれる。

「ラッキー、いたの？」

目を見開いて、興奮した様子でユリコちゃんは俺を見上げてくる。うずうずと身体を揺するさまは、自分の目で無事を確認したくて仕方がないのだろう。

一年生の懇願の眼差しと、ユリコちゃんの期待の込められた熱い視線と。

……やっぱり、俺が行かなきゃいけないわけ？

「……君さ、ちょっとここに残ってて。校長が戻ってくるかもしれないから」

一年生は目を丸くする。俺が少し睨むようにして強く見詰めると、慌てた様子でコクコクと頷いた。携帯の番号をメモに書きつけ、何かあったら連絡するよう彼女に言い渡す。

「俺はちよつと倉庫行ってくるけど、ユリコちゃんも行くか？」
ユリコちゃんは閃くように表情を明らめ、元氣よく頷いた。

＊ ＊ ＊

俺はとりあえず、ユリコちゃんと一緒に例の現場へと向かうことにした。搜索隊には中庭に向かうようメールを一斉送信しておく。昇降口でもたたと靴を履き替えるユリコちゃんを待っていたら、人気のない校舎に響く足音が耳に入った。段々近づいてくるそれに目を向けると、ちょうどここから一直線上にある階段から、伊吹が下ってくる場所だった。

彼もこちらに気付いたようで、にっこり笑って駆け寄ってくる。

「メール見たよ。中庭だって？」

「おう。食堂近くの倉庫だって。知ってる？」

「あー、体育祭で使う綱とか麻袋とか、ホワイトボードなんかが置いてある場所じゃない？」

そうなのか、知らなかった。というかよく分かるなこいつは。

そんな伊吹は行かないの？と不思議そうな顔で振り返る。俺はそんな彼を手で制し、下方にちらりと視線を向けた。

足下で蹲り、ブーツのひもを結っていたユリコちゃんが顔を上げる。

「できたよ！」

「よし、行くか」

歩き出した俺に、ユリコちゃんは小走りに追いかけてくる。隣で伊吹が驚きを含んだ声を上げた。

「ずいぶんと仲良くなったね」

「ん？ ああ、俺子供好きだし」

「意外だなー」

その声音にどこか不機嫌な色を感じ、俺は横目で伊吹を窺う。目が合ったので続きを促せば、彼は目を細めてこんなことを答えた。

「ハルって、面倒事嫌うじゃん」

それって遠まわしに「子供は面倒くさい」と言っているのだろうか。まあ、この調子だと無自覚だろうけど。

「面倒は嫌い。でも子供は好き」

伊吹は眉をひそめ口をへの字にひん曲げ、いよいよその綺麗な面で不機嫌を露わにした。

「俺ももっと構ってほしい」

「は？」

さっぱり意味が分からん。

伊吹は目を反らして、心底つまらなそうにボソボソぼやく。

「だってさ、ハルは面倒を嫌がるから、俺は人前でハルに話しかけるの、結構ガマンしてるんだよ。俺だってもっとハルに構ってほしい」

「子供かお前は」

「そう、子供なんだよ。だから構って！」

こんなでかい子供がいるもんか。俺はげんなりと伊吹を見上げる。その時、下の方から無邪気な笑い声が上がった。

俺たちは顔を見合わせて、ユリコちゃんに視線を向ける。彼女は可笑しそうに笑いながら、小さな指で伊吹を差した。

「おにいさん、ラッキーみたい！」

ラッキーもおっきい体で、かまってゝって懐いてくるんだよ、と彼女は続ける。俺は思わず噴き出した。なるほどたしかに伊吹だなそりゃ。

ニヤニヤと意地悪い笑みで見上げてやれば、無然とした表情を返された。まったく子供のようだ。本格的に笑えてきた。

声を上げて笑う俺に、伊吹はやはり面白くなさそうな顔をしてい

だが、そのうち困ったように笑みを浮かべた。

＊ ＊ ＊

俺達が件の倉庫に駆けつけた時、その場は妙に緊迫していた。中央で睨み合う女子二人。顔を蒼くして固まっているギャラリー達。

……なんだこれ。

俺はそんな張り詰めた空気の発生源である二人の人物に目を向ける。

派手なオレンジ色の頭をした村木と、赤茶の髪を上で結ったジャージ姿の美少女と。凄まじい殺気を放ち睨み合う二人を、周囲の間はぎこちなく見守っている。

そんな傍観者の中に、困り切った様子の花歩と、その隣になぜか呆れ顔の山本もいた。とりあえず俺は彼らに駆け寄る。

「なあ、何これ」

「そ、それが……」

花歩の声は、苛立ちを含んだ怒鳴り声でかき消された。

「だからー、悪かったって言ってんでしょ！ しつつこいのよあんな！」

ジャージ姿の女子が悪態を吐く。

対する村木は盛大に眉をひそめ、負けじと大声で吐き捨てた。

「それが人に謝る態度かよ、何様のつもりだおめーは！」

「あんたこそ何様よ、別にあんたに危害加えたわけでもなし。関係ないでしょ！」

「関係あるっつの、ダチが大怪我するところだったんだぞ！」

「瞳、わたしはいいから……」

花歩が口を挟めば、彼女らはギロリとこちらを睨みつけた。花歩は小さく悲鳴を上げる。……こいつらこえーよ。

「大体、あたしがやらかした結果と言えば、犬をここから追い出しただけじゃない。あの子がトロいからああも大事になったんでしょ！」

「はぁ！？ きっかけはあんただろ、ウチらの忠告を聞かず犬っころを脅かすから！ たしかに花歩はトロいけども」

「……ほんとにもういいから瞳」

「庇われてんだか貶されてんだか」

肩を落とす花歩に山本がボソリと。こいつ楽しんでんな。

言い争いはますますヒートアップしていく。

「そもそもお前みたいなヤツ見てつと腹立つんだよ。王子に振られたからって花歩を攻撃の対象にすんなっての！ テメエで言えよ！」

「それこそあんたには関係ないでしょ！ 大体その気もないのに聡介の周りをチヨロチヨロと鬱陶しい！」

特にあんたみたいにかメラ抱えてミーハーごっことか、ほんとにムカつく！ 聡介がどんだけ迷惑してると思ってるのよ！」

「俺がなにか？」

突然割って入った涼やかな声。

村木は眼鏡の奥で目をまん丸くして、ジャージ姿の美少女は顔を歪めて白い肌を真っ赤に染める。女子二人の諍いは冷や水でも引っ掛けられたかのように膠着し、その場に沈黙が訪れた。

……伊吹のやつ、普通に横やり入れやがった。なんというKY。いっそ感動を覚えるぞ俺は。

誰もが固唾をのんで行く末を見守る中、俺は服の裾を引かれる感触を覚え、そちらに目を向けた。

ユリコちゃんが今にも泣きそうな顔で震えている。彼女は力を振り絞り、か細い声でぼそりと紡いだ。

「ラッキーは……？」

その場の雰囲気ですっかり怯えたユリコちゃんは、言い争っていた女子二人には近づけないらしく、少し離れた場所にいた伊吹の後ろへと逃げ込んでしまった。伊吹は困ったように微笑んで頭を撫でてやる。ユリコちゃんはそんな王子様のような男を、ぽーっと顔を赤らめとろんとした目で見つめていた。小学生まで虜にするとは、あいつの色気ってほんと怖い。

まあそれはともかく、その場にいたヤツらの話をまとめると、こうだ。

最初、体育委員会が今度のスポーツ大会で用いる道具の点検中に、ラッキーが倉庫に入り込んでしまった。どうしようか躊躇っているうちに、俺から連絡を受けた花歩と村木がここに到着した、と。

「んでー、ウチらは止めたのにー、愛沢のバカが強行突破しやがってー」

「ちよっと入口に荷物返すだけなんだから、大丈夫だと思ったの！」

村木の嫌味っぽい説明に、愛沢と名乗ったジャージの女子が刺々しい口調で補足を加える。見たことあると思ったら、前に松田が言っていた「伊吹の元カノ」だ。

そっと伊吹に視線を移す。特に愛沢を気にすることもなく、いつもの穏やかな表情で彼女らの話に耳を傾けていた。

対して、愛沢の方は先程のやり取りもあり彼が気になるらしく、チラチラと窺うような視線を向けている。村木に対するときの強気な姿勢とは違って、伊吹に向ける視線はどこか頼りなく歪んでいる。そんな彼女の不躡な視線に怯えているのか、ユリコちゃんが蒼い

顔で伊吹にしがみついた。ああそうだ、今はラッキーのこの方が先決だ。

「じゃあ、ラッキーは急に倉庫に入ってきた愛沢に驚いて逃げちゃった、ってことか？」

渋々と愛沢は頷く。それでなぜ村木とそこまでの大喧嘩になったのか問えば、大きなジェスチャーで村木が答えた。

「それがさー、倉庫から犬が飛び出してきたつつたけど、あの犬でかいじゃん？　花歩がビビってちよつと後ずさったら、その得点板に足引っ掛けて、それが勢いよく倒れてきたわけ」

得点板で。俺は少し離れたところで地に伏している古びたそれに視線をやる。

教室にあるような石造りの黒板に、所々錆びついた鉄製のパイプ。……めっちゃくちゃ重いだろこれ。

「大丈夫かよ。怪我は？」

一見花歩に大きな怪我は見られない。彼女は小さく笑って隣の山本を手で示した。

「平気だよ、山本君が庇ってくれて」

「犬は逃がしちゃったけどな」

山本は俺からのメールを見て、一足早くここに到着したらしい。駆けつけたら大惨事一步手前で驚いた、と彼は言う。花歩を庇ったというものの、山本も怪我はないらしい。

「そっか、ありがとう」

礼を言うと怪訝そうな顔をされた。理由を説明するのも面倒なので、俺は陰悪な雰囲気的女子二人に向き直る。

「で、肝心のラッキーはどこ行ったんだ？」

「さあ？」

村木はけろりと首を傾げ、愛沢は不機嫌そうに目を逸らした。

……こんだけ大騒ぎしといてこいつらは。

愚痴を溢したくなるのをぐっと堪え、他のギャラリーにも聞いてみる。

緑ジャージの男子生徒が恐るおそる手を上げた。

「あの、食堂の方に向かうのを見たんですけど……」

「食堂？」

この倉庫から食堂の方というと、中庭の方へ、ひいては校舎の方へ逆戻りしたことになる。

俺はそちらに目を向けてみる。

そこに、見慣れた二つの人影、松田と高階がこちらに駆けてくるのが視界に映った。

「おうおう、みんな揃ってんなー。」

って、花歩ちゃん！ 愛沢ちゃん！！」

あつという間にここまで辿り着いた松田は、花歩と愛沢の存在に目を輝かせた。そういやこの二人は香南美少女2トップだって聞いたことがある。花歩は苦笑いで松田に応じ、愛沢は露骨にイヤそうな顔をした。今にも飛びかかりそうな松田を、フードを掴むことで抑える。

後から駆け付けた高階は呆れ顔で松田を見やり、伊吹の方へ駆け寄った。

「遅くなって悪い。ラッキーは？」

「それが、すれ違いみたいで」

伊吹が答える。高階は彼にしがみついているユリコちゃんに気付き、ニカッと人好きする笑顔で笑いかけた。ユリコちゃんはまたも頬を染める。……小学生と言えど女なんだな。俺はそんなに男としての魅力がないのか。ちよつとヘコむぞ。

そんな俺を松田は不思議そうに一瞥し、そしてラッキーの不在に不満げに口を尖らせた。

「なんだ、犬いねーの？ これからどーすっぺ」

「ああ、食堂の方に向かったらいいんだけど、お前ら今そっちらから来たよな。見なかったか？」

「見てねーなあ」

高階が答え、松田は「あ」と声を上げた。

「そういや、うどんか何かのいい匂いがしたな。今日定時制のヤツらに食堂解放する日みたいだから、まだ食堂開いててさあ」

「死ぬほどうでもいいな」

「うーん、振り出しに戻っちゃったか。とりあえず、手分けしてもう一度校内を回るか……」

伊吹の言葉は、唐突に上がった小さな悲鳴で遮られた。

目を向ければ、愛沢が険しい顔で花歩を凝視している。正確には、花歩の手元。

「ちよっ、あんた、手！」

花歩は苦笑を浮かべ、手を背後に回して隠そうとするが、それより早く愛沢はその腕を掴んで、強引に掌を上向かせた。

覗きこんだ村木がギョツと顔を上げる。

「うわっ、真っ赤じゃん！」

下手なところを切ったらしく、小さな掌は血で全面真っ赤になるほど濡れていた。得点板が倒れ掛かってきた際にでも切ったのだろう。痛い痛いとは喚く村木を、花歩は苦笑いで宥めている。痛くないわけないだろうに。苦い感情がちくちくと胸を刺激する。

……相変わらずだ。あいつはちっとも自分を大事にしない。

恨みがましく睨みつければ、花歩は少しだけ寂しそうに笑った。そして、ぎゃーぎゃー騒ぐ女子二人（プラス松田）に何事もなかったかのように笑いかける。

「大丈夫だよー」

「いやいや、大丈夫ではねーだろ。患部が全然分かんねーじゃねえか」

山本が眉をひそめて花歩の手を取る。ティッシュか何か持ってないか、という彼の問いに、いち早く動いたのは意外にもユリコちゃんだった。シオルダーバッグから何やら取り出し、花歩の元へと駆け寄り、それを突き付ける。

「おねえちゃん、つかう？」

タオルかと思ったが、違う。……手拭いだこれ。

白地に青い筆字で「うどん屋白石」と印刷されている。

「もしかしてこれ、駅前のおどん屋さんの？」

高階が覗きこんで声をかけた。ユリコちゃんはこくりと頷く。

「ユリコのおうち、おうどん屋さんなの」

「へえ、俺よくそこ行くんだぜ。あそこのおどんおいしいよな！」

ほら、松田も行ったことあるだろ、サッカー部で」

「あー、あそこか。狐うどんがうめーんだよな、安いし」

ユリコちゃんはサッカー部コンビの言葉に嬉しそうに礼を言い、その手拭いを花歩に差し出した。

花歩は苦笑いで、ユリコちゃんの申し出をやんわり拒否する。

「汚れちゃうからいいよ。手なら洗ってくるから」

「水で、直接？ 絶対いてえぞ」

「……決意が鈍るじゃない」

山本の軽口に花歩がげんなり返す。ってことは、相当痛いんだなあれは。

こうなったら無理にでも治療してやろうと歩を踏み出すが、それより早く愛沢が動いた。

「何言ってるの、さっさと洗いに行くわよ！」

「いたた、愛沢さん、痛い」

愛沢は花歩の腕をとって引っ張るようにして歩き出す。抵抗する花歩に、彼女はしかめっ面で怒鳴りつけた。

「バイキンでも入ったらどーすんの！」

失礼にも高階が噴き出した。……気持ちは分からなくてもないけど。バイキンで、可愛いなおい。

「そうだよ花歩、あたしも付いてってやるからさ！」

ニヤニヤと笑いながら村木が言う。

「あんたは来なくていいわよ。不愉快だから、存在が」

「いやー、愛沢が影で花歩にどんな陰湿な嫌がらせをするのか、どうにも不安でねえ」

「んなことするわけないでしょ！ どんだけ根性曲がってるのよあ

んた！」

「分かった分かった。大人しく洗いに行くから」

すっかり呆れた様子で、花歩が二人の間に割り込んだ。

「じゃあわたし、ちょっと行ってくるね」

笑顔でそう言い渡し、今にも喧嘩を始めそうな村木と愛沢を引っ張っていく。

途中、俺の近くを通りかかる際、少しだけ足を止めて、複雑な笑顔で見上げてきた。

「……怒ってる？」

俺は顔をしかめて、ふわふわの頭に軽く手刀を入れた。

「心配してんだよ、ばか」

＊ ＊ ＊

ラッキー搜索隊はひとまず、場所を移動することにした。がむしやらの追うだけでは埒が明かない、まずは指針を立てるべきではないか、とは伊吹の言だ。

そこで俺達は、倉庫からそう遠くはない中庭に集まっていた。

「香南学園は偏差値70を超える秀才の集まりであるはずだ！ 犬一匹に振り回されるとはなんたる体たらく！ ここは我々の持つ最も有効な武器である「知能」を用いるべきではないかね！」

「一番の脳筋野郎が何言ってるやがる」

松田は恨めしげに睨んでくるが、事実は事実だ。要はさすがの松田でもただ追っかけるだけでは捕まえられそうにない、ということらしい。ぱっと見はそう分からないが、こいつも相当疲れているんだろう。

ベンチにぐったりともたれかかった高階が同意する。

「とりあえずさ、外はきちーよ。全方位どこへでも逃げられるんだから。」

どっかに追い込めればいいんだけどなー」

「そうそう、校舎内にいた時は結構いいセンいったんだよ。あそこで山本が捕まえてくれれば！」

「俺のせいにすんなよ。大体、結局は逃げられてたじゃねーか」

「でも、校舎内に追い込むってのはいい手かもしれないね。うまく教室に入れば、戸を二つ閉めるだけで密室にできるし」

伊吹の言葉に、もしそうなった場合を想像してみる。教室で暴れまわるヨーゼフもといセントバーナード。

「……教室は危なくね？ でかい犬だし、机とか荷物とか大変なことになるそう」

「校舎内ってのもびみよいな。追い込むつつても、昇降口なんかは出入り口大きいし、階段や渡り廊下も無数にあるから、全部封じるのは正直きつい」

ここまで述べて、山本はふと思いついたように言葉を続けた。

「ああそうか、外に出る選択肢が少ない校舎ならいいかもしれない。図書館とか三号館とか、独立した校舎なら」

なるほど、たしかに先程俺たちがいた二号館と隣の一号館のように、渡り廊下等で繋がった建物じゃ他の校舎に渡られると厄介だ。出入り口を塞いで追いつめるというならば、まずは他の空間に出る道が少ない独立した建物であるというのが大前提になる。それなら数か所を塞ぐだけで建物内に閉じ込められるし。

これらを踏まえて、浮き上がったのは図書館と三号館。

この提案に難色を示したのは二人。高階と伊吹だ。

「図書館塔も何だかんだ出入り口多いぜ。視聴覚室とかPC室もあるから、大きい荷物を運びやすいように道も広めの造りになってるし、封鎖しにくいと思う」

「三号館もちょっと無理かな。人が多すぎる。」

あそこ、多分今日はラグビー部が集まってるんだ。テスト期間中でグラウンドが使えないから、教室いくつか使ってミーティングやってるはず」

ラグビー部といえば百人近い大所帯だ。それだけの人数を追い出すのはさすがに大変だろう。

しかし他となると……ああ、そういえば。

「星陵塔はどうだろう。二階建てで部屋数も少ない。階段は二つ、出入り口は一つだけ」

裏門近くにぽつんと立てられた星陵塔。つい数年前、卒業生の団体が部活動の向上にと作ってくれた建物だ。長唄部や華道部、料理部といった弱小文化部がそこで活動している。

「たしかにいい案だけど、やっぱり人が枷になるな。いくつか部活もやってるだろうし、たしか柔道部かどっかがそこで合宿中じゃなかったっけ」

星陵塔は寝泊まりできるよう、キッチンや風呂なども備わっており、部活で合宿に使ったり、生徒会などが行事等で忙しい時にそのままそこに泊っていくこともある。

「あーでも、そんならいなら十分追い出せるだろ」

山本がのんびり言う。

そんな根拠もないことを。そう突っ込めば、山本はニヤリと笑って、視線を伊吹にスイと向けた。

そうか、と松田が手を打って立ち上がる。

「王子と花歩ちゃんがいるじゃねーか、学園の人気者の男女二人が！」

「は？」

「なるほど、その二人に頼まれれば話を聞かないヤツはそうそういねーな」

高階が補足してくれる。ああ、たしかに老若男女万人ウケする伊吹と花歩の頼みなら、大抵の人間は聞き入れてくれるだろう。

「そうとなれば早速花歩ちゃんに連絡だ！ さあ早く！」

「おめーは花歩目当てなだけだろが」

松田に顎で使われるのは大分癪に障るが、たしかにいい案なのでメールを送っておく。返信はすぐに届いた。血が止まらないので保健室に寄ってから戻って来るそうだ。さすがに心配だが、まあ二人も付いてるなら大丈夫だろう。村木はともかく、愛沢は世話焼きっぽいし。

花歩に知らせるため携帯で作戦を打ち込んでいるうちに、ふと、根本的な疑問に突き当たる。

「……どうやってラッキーを星陵塔まで連れてくりゃいいんだ？」
沈黙が下りる。

「……たしかに。松田、お前走って誘導できる？」

「なんつー無茶振り！ 追っかけてる側が進路を操作できるかい！」
賑やかな二人の問答は、ふと上がった静かな声で制された。

「……俺、思ったんだけどさ」

再び場は鎮まる。皆の視線は、発言者である伊吹に注がれる。

伊吹はまず、念を押すようにして俺と目を合わせた。

「ラッキーは最初、中庭にいたよね。しかも結構長い間」

「ああ、目撃情報から判断すれば」

「中庭の隣には食堂がある。松田君言ってたよね、食堂からうどんの匂いがしたって」

「おう」

「ユリコちゃんの家はうどん屋さんなんだよね？」

「うん」

「ラッキーは、うどんの匂いにつられて中庭をうろうろしてたんじゃないか？」

「……ああ！」

「お前あったまいいなー！」

松田が豪快に笑って伊吹の頭を叩いた。お前と違って出来のいい頭を叩くなよ、なんて高階が突っ込んでいる。

そうか、ラッキーはユリコちゃんの家と同じ、うどんの匂いがし

たから、食堂がある中庭近くでウロウロしていた、と。

無表情に、でも少し驚いたようにゆっくりと瞬きを繰り返していた山本は、顎鬚をさすりながら伊吹に問う。

「食堂を中心に探してみようってことか？」

「んー、ていうか、囀作戦が有効なんじゃないかと思って。匂いで釣られたってことは、匂いで釣れるってことだろ？」

ラッキーの気を引くような囀を使えば、星陵塔へ誘導できるんじゃない？」

はー、すげーなこいつ。

サツカー部コンビの派手な称賛を浴びて苦笑いの伊吹をぼんやり見ていたら、ばっちり目が合う。俺の感嘆の表情を読み取ったのか、照れたように笑われた。

「でもさあ、何を囀にするのかが問題だよなー」

組んだ手を後頭部に回して、松田が言う。

「家の匂いに反応したってことなら、いっそユリコちゃんは？」

高階の言葉に、山本がゆっくりと口を挟んだ。

「俺は反対だけどな。犬の方も慣れない場所で興奮してるだろうし、危ねーだろ」

実際、花歩も怪我をしている。ユリコちゃんと接触させるのはやはり安全を確保してからの方がいいかもしれない。

俺は傍らでぼかんと話を聞いていたユリコちゃんに向き直る。

「ユリコちゃん、いつも持ち歩いてるものとかってあるか？」

ユリコちゃんはハッと背筋を伸ばし、慌ててショルダーバッグの中身を懸命に漁るが、やがてその小さな肩をがっくりと落とした。

「やっぱりない。今日はあまり使っていないバッグをもってきたから」

「いつもは違うバッグなんだ？」

たしかに、子供が使うにしてはデザインが地味な気もする。なんとなく気になって聞いてみた。

ユリコちゃんはしょぼんと眉を下げる。

「いつもはちがうよ、これはママの。今、ユリコのバッグこわれて

るの。だからニャンピーも落つことしちゃったんだけど」

「ニャンピー？」

聞いたことあるな、と高階が首を傾げる。

「人形を落つことしちゃったんだとさ」

俺の説明に、妙に反応したのは伊吹だ。ヤツは口元に手を添え思案する。

「人形、ねえ……」

「まあでも、さっき持ってた手拭いとかでいーんじゃねーの？ それでもダメなら食堂行って狐うどんの油揚げでも貰ってくるとか」

山本がダルそうに声を上げた。なるほど、さっきの「うどん屋白石」手拭いか。いいかもしれない。

「よーし。んじゃ、皿を用意して、星陵塔にいるヤツらを追い出せば、準備おっけーだな？」

松田が元気よく呼びかけた。皆は言葉なく、けれどしっかりと首肯する。

「そうだね」

伊吹は目を引くほど鮮やかに、好戦的な笑みを浮かべた。

「作戦開始だ」

＊ ＊ ＊

「……とりあえず、皿を使って犬を星陵塔に誘い込んで、徐々に退路を塞いで最終的に袋小路にでも追い込んで捕まえる、と」

「そういうこと」

隣を歩く赤い髪の美少女、愛沢は、しかめっ面のまま了承の意を込めて頷いた。

花歩の手当てを終えて戻ってきた女子三人は、結局全員手伝ってくれることになった。

花歩はお節介、村木は好奇心からの申し出だろうが、この愛沢まで手を貸してくれるのは意外だった。

彼女いわく、

『あたしもちよつとは悪いから。ここまで来たら手伝うわよ』
だそうで。

とりあえず村木と一緒にするとまた喧嘩でもやらかしそうだったので、彼女には体育委員の権限を活かして、先程の倉庫からホワイボードを持ち出すのを手伝ってもらうことにした。足の低いボードなら、階段や道を塞ぐのに便利かもしれない、という案だ。一人じゃさすがに酷なので、俺は手伝いとして同行している（最初は松田が志願していたが、愛沢が嫌がった）。

ちなみに他のメンバーはラッキーを探しに方々に散り、ユリコちゃんやんは伊吹と花歩と一緒に星陵塔に残っている生徒に協力を仰ぎに行っている。囃については伊吹たちがなんとかしてくれるらしい。

そうそう、伊吹だ。

この愛沢という女子は、伊吹とは別れたと聞いているが（その経緯も一応知ってはいるが）、未だに彼に未練が残っているらしい。

先程、伊吹と花歩と一緒に星陵塔へ行くことで話がまとまった時、彼女はひそかに表情を歪めた。花歩に向けて、負の感情をあからさまに。

俺はちらりと愛沢を盗み見る。赤茶の髪にツリ上がった形の良い目、長い睫毛。赤い唇は何かを耐えるように引き結ばれている。どうも不機嫌そうに見えるが、これが彼女の素のようだ。高飛車な仕事とそのどこか豪華な見かけがよく似合っている。

「……愛沢ってさ、なんで伊吹と別れたんだ？」

倉庫へ向かう道すがら、単刀直入に聞いてみた。

メイクで彩られたどギツイ目でギロリと睨まれる。……かなり怖い。

彼女はその端正な面に不快をありありと浮かべ、どすの利いた低い声で答えた。

「あんたに関係ないでしょ」

「あるよ。……花歩をあんまり困らせんな」

俺の言葉に、愛沢は目をまん丸くしてこちらを仰ぎ見た。

「なに、あんたあの子の何!? まさか付き合ってるの!?!」

……この驚きようは、恐らく俺と花歩のあまりのレベルの違いに驚いたからに違いない。なんせ地味メンだもんなあ、俺。

「ちげーよ、ただの幼馴染だ」

「幼馴染ねえ。へー……」

愛沢はからかうような視線を投げてくる。……別にそんなんじゃないってのに。

そう、俺の話はいいんだ。今は伊吹と愛沢だ。

「ヨリを戻したいなら、少し話し合ってみれば?」

話を戻せば、彼女は眉をひそめて顔を逸らしてしまう。

「……あたしから振っちゃったんだもの。今更話し合うも何も」

「じゃあ、話を戻すぞ。なんで振ったんだ?」

愛沢はそっぽを向いたまま何も言わない。返事がないから、俺も何も喋らない。

重苦しい沈黙が続く。俺はゆっくりと歩くだけ。

沈黙に耐えかねたのか、彼女の中で考えでもまとまったのか、ふいに愛沢は静かに切り出した。

「……聡介と喋ってて分かんない? あいつちつとも我儘言わないのよ。何をするにも他人が第一。」

あたしに気を使ってるのかもしれないけど、もっと本音でぶつかってほしいの。あたしはもっと聡介のことを知りたいし、あたしのことを知りたいと思ってほしい」

彼女は赤い髪を揺らしてこちらを見上げる。長いまつげに縁取られた鳶色の目が、強かな視線で俺を撃つ。

「恋愛ってそういうもんでしょ?」

力強いその言葉と視線に、思わず吞まれそうになる。

俺は目を閉じそっと息を吐く。呼吸を落ち着けて、静かな気持ちで彼女を再び視界に写した。

「あんたはそれを伊吹に伝えたのか？」

愛沢は気まり悪げに視線を逸らした。

「……嫌われたらどーすんのよ」

なるほど、それが本音か。

まったくどちらも素直じゃない。俺は小さく息を吐いた。

「あんたも伊吹の考えには薄々気づいてたんだろ。いわば、あいつの行動自体があんたへの想いつてやつだったんだ。

それに対して、あんたは？　少しでも自分の気持ちを伝えようとしたのか？

伊吹にだけ言わせて自分はだんまりなんて、それじゃあまりにもフェアじゃないだろ」

「あんたそれ、結構余計なお世話よ」

悔しさを滲ませて愛沢が言う。俺は笑った。自嘲的だと自分でも分かる、歪んだ笑みで。

「余計なお世話ついでに教えてやるよ。

己に好意を寄せてくれる人間に、自分は何も返せていない。こういうのは、その人を失ってから初めてことの重大さが分かるんだ。

一言でも自分の気持ちを伝えればよかった、って。後で絶対に後悔する」

今でも思う。彼らはあんなにも俺を愛してくれていたのに、幼い俺はちっとも形にして返せなかった。与えられる愛が当然だと思っていた。なくなってからそれらの尊さに気付いた。一言でも伝えていれば、こんなに苦しく思うこともなかったのに。「ありがとう」と、「愛しているよ」と。

隣で愛沢が息を吞む気配を感じた。ああ、そんなに深刻な顔をしていただろうか。

俺は小さく笑って、努めて明るい調子で言葉を続ける。

「……そもそもあいつ、異様にモテるから、周りばかり警戒しても何の解決にもならねーだろ。

間に合わなくなつて後悔する前に、まずは本人と話し合うべきだと思うぜ」

愛沢は心なしか強張っていた身の緊張をといて、呆れたような、しかしどこか安堵を含んだ声を上げた。

「……なるほど、あの子の安全に繋げたいわけね」

俺は答えない。ただ、少しだけ笑みを深めた。

愛沢もつられて笑ってみせる。露を湛えてあでやかに花開く薔薇の姿がふとよぎった。やはり美少女だなあ、と改めて思う。

「分かった。努力してみる。

そりゃ聡介だって、言わなきゃ分からないわよね。誰かに取られる前に振り向かせなくちゃ」

愛沢は腕を組んで背を反らす。居丈高に俺を見上げ、しかし目元だけはふと和らげて。

「あんたの言葉、あたしには伝わったわよ。ありがとう」

愛沢は華やかに笑った。

＊ ＊ ＊

俺達がぼちぼちと伊吹の話で盛り上がりながら（あいつ意外と天然だからネタに尽きない）、目当てのホワイトボードを倉庫から運び出して星陵塔の前に到着すると、まず目に入っただのは、真剣な表情で膝に手を当て屈伸している松田の姿。近くには伊吹と花歩もあり、何やら話し込んでいる。ホワイトボードの車輪の音で気付いたのか、花歩がひょいと顔を上げてこちらに手を振ってきた。

「ハルちゃん！ 愛沢さん！」

愛沢がニヤニヤしているようだが気にしない。すべて彼女の妄想だ。

「よう。首尾はどうだ？」

「星陵塔にいた人は全員無事追い出せたよ。」

それとさつき、タカと山本君がラッキーを見つけたみたいで。今から松田君が向かうところ」

伊吹が爽やかな笑みと共に答えてくれた。奥でストレッチしていた松田はようやくこちらに気付いたらしく、テンション高く愛沢に声をかけている。あーあ、愛沢もそんな露骨に嫌そうな顔せんでも。入口で（主に松田が）ギャーギャーやってたら、星陵塔の中から村木とユリコちゃんがひょっこり出てきた。

「部屋の戸は全部閉めてきたべー。和室が多いから犬が入ると面倒かも。」

やっぱ廊下の行き止まりで袋小路にするのがいいと思うな」

「ユリコもおへや閉めてきたよ！」

ユリコちゃんは笑顔で俺のもとへ駆けってくる。偉いなと頭を撫でれば、くすぐったそうに笑った。「田中って意外とロリコン？」などどほざく村木には冷静に否定しておいた。

「じゃあ、ボードを中に運ぼうか」

伊吹がホワイトボードに手をかける。

「どこに置けばいいんだ？」

「食堂に入れとうよう。ラッキーが二階に上がったら、これで階段を塞ぐ」

星陵塔は入ってすぐに下駄箱と、その先右手に一つ目の階段、左手に食堂がある。さらに先に行くともた右手に階段、左手奥には小講義室がある。星陵塔は二階建てなので、階段を塞いでしまえば行動範囲はかなり限られる。二階に上げてからにするのは、先に一階で塞いでも、ラッキーの巨体でボードを動かすなり何なりで道をこじ開けられる可能性があるからだ。

「……美咲も手伝ってくれるかな？」

伊吹が控えめに背後の愛沢へ声をかけた。名前呼びにちよつと驚く。今更ながら、二人の特別なつながりというものがすっと胸に落ちてきた。

愛沢は顔を背けて、素っ気なく呟く。

「言われなくて手伝うわよ」

ああ、嬉しいのかこれは。髪から覗く耳が赤い。

……ちよつと微笑ましいな。ニヤニヤ眺めていたら、急に背後から声が上がった。

「面白い程ツンデレだな」

「うわびっくりした」

振り返ると相変わらず無表情の山本が。気付いたら高階もやってきて、ボードの移動を手伝ってくれる。

「ラッキーはいいのか？」

「おう、近くにいた先生に見張り頼んでる。今は二号館の辺りにいるぜ」

高階に現状を聞きながらボードを食堂に押し込んで、俺達は一旦外に出た。見渡せば、メンバーは全員揃っている。

うーむ、なかなか派手な面子だ。俺逆に地味すぎて浮いてないか。松田と目が合う。にかつと笑われる。

「うっし、これで香南防衛隊、全員集合だな！」

「香南……なんだって？」

「香南防衛隊！ ほら、クレヨンしんちゃんであるだろ？ かすかべ防衛隊。地元のよしみということだ」

「いちいち名前つけなくても」

「そもそも防衛してないしね」

半笑いの村木による突っ込みに対し、隣にいた花歩は笑顔で彼女の紫セーターの裾を引く。

「でもなんかワクワクするよね、こういうの！」

「まあ、童心に帰ったようだなー。っーか可愛いなこのやろー！」

きゃーきゃーじゃれ合う村木と花歩の隣で、高階が目を輝かせて俺たちを見渡す。

「なあ掛け声どうするよ、掛け声！」

「普通でいいんじゃない？ 円陣組んで、ふぁいとー、おー！ 的な感じで」

伊吹がにっこりと笑って答えた。

「え、何それマジでやんの？」

「覚悟決めようぜ田中」

「……楽しそうだな山本」

恥ずかしくないのかお前は。恨めしげに睨みつけければ、彼は「俺、楽しいこと好きだから」と無表情にのたまった。うっわキャラじゃねー。

「ほーら、ユリコちゃんも入った入った！」

高階がユリコちゃんの肩を抱いて円に加えた。ユリコちゃんも分かっただろうが、場の雰囲気になんか感じ取ったのか、楽しげにキョロキョロしている。

「掛け声は誰がやんの？」

いかにもやる気なさげな顔をしつつ、声が浮かれているのは愛沢だ。ノリノリだなおい。

それともあれか、俺の諦めが悪いのか。そうだ、そもそも俺は一年前に痛いほど理解したはずだ。この学園の連中は、やたらめったらノリがいいってことは。

俺は大きく息を吐いた。唯一乗り気じゃなかった俺が落ちたことで、場の空気は言葉なくして異様な熱気を帯びる。ああ、流されるなあ俺。

代表して、松田がよく通る大声を張り上げた。

「よーし、香南防衛隊、行くぞー！」

拳を天に掲げて、

『おー！！』

数多の声が青空に響き渡った。

＊ ＊ ＊

山本と高階を引き連れてラッキーの誘導に出かけた松田は、すぐに駆け足で戻ってきた。

首に「うどん屋白石」の手拭いを巻き、手元にはビニール袋に入れた油揚げが揺れている。

その走りっぷりはなんかもう凄まじい。というのも、後ろを追う大型犬も、かなりの迫力で迫ってきているからであった。

「……何あれ、でかくね？」

「だからでかと言ってんじゃん」

隣の村木に冷静に突っ込まれる。いやでも、あれはでかすぎじゃね？ ヨーゼフってあんなに大きいのかよ。日本の家庭に設置されている一般的な犬小屋じゃあ尻くらいしか入らないだろう。

白と茶色のふさふさの毛が顔を覆い、どこか温厚そうな雰囲気醸しているが、あの大きさでドスドスと後ろを追われてはなかなか怖いものがある。

「どけどけーい！！」

松田は風のような速さで星陵塔へと入って行った。それを追って、ハリケーンか何かのような激しさでもってラッキーが勢いよく飛び込んでくる。

俺達は彼らの後を追いつ星陵塔に上がり、それを見計らって花歩と村木が外から出入り口の戸を閉めた。これでラッキーは完全に星陵塔に閉じ込められたことになる。しかし一応外に出られては面倒なので、花歩と村木が外で待機している手筈になっている。

松田とラッキーはあっという間に廊下を走り去り、奥の階段を騒

がしく上って行った。伊吹がその後を追って奥の階段へ、高階がもう一方の入口近くの階段へと向かった。二人が階段を上がって行ったのを確認し、俺達は食堂から先程持ってきたホワイトボードを急いで運び出す。そして山本は手前の階段を、俺と愛沢は奥の階段をボードで塞いだ。これでラッキーの行動範囲はさらに二階に制限される。

「これで俺達は待つだけだな」

山本が手を叩きながら、視線を階段に向け、ボソリと呟いた。

そう、後は二階に上がった三人がラッキーを追いつめてくれるだろう。

松田とラッキーが二階に上がったら、もう上の階はないため、廊下に出るしかない。もちろん各教室は戸を閉めて封鎖しているからラッキーは逃げるにしても廊下の行き止まりにかち当るか、階段を下りるしかない。

階段を下りてきたなら、それぞれ伊吹と高階が待ち構えているので、松田がラッキーの後を追えば挟み撃ちになる。廊下の行き止まりまで辿り着いたら、階段待機組が階段から出て行ってラッキーの背後を突けばよし、どう動いても挟み撃ちが完成する。

「ラッキー、だいじょうぶ？」

ユリコちゃんが不安そうに見上げてくる。

結局彼女は中まで付いてきてしまった。やはり心配なのだろう。

俺は小さく笑って頭を撫でてやる。

「大丈夫大丈夫」

『ぎゃあああ!!』

「……じゃないかも」

松田の声だ。ついでにどったんばったん、上からしきりに物音が聞こえる。ゴジラかあいつらは。振動で天井が揺れることで埃が舞い落ち、盛大な物音と共に不安を煽るものがある。

ガシャン!と一際鋭い音が響いた時、ユリコちゃんが耐えきれず階段へと駆けだした。

「ラッキー！」

「ちよっ、ユリコちゃん！」

ユリコちゃんは階段を塞いでいたホワイトボードを勢いよく退かし、まろぶようにして階段を上っていく。後を追おうとして動き出した愛沢の肩を掴んで制し、代わりに俺は考える間もなくユリコちゃんの後を追った。

踊り場を曲がって二階の様子が見える辺りまで辿り着くと、伊吹がユリコちゃんを抱えるようにして進路を塞いでいた。

「ハル、ユリコちゃんを」

伊吹は静かにユリコちゃんを押しつけてきた。手を伸ばして追いつめるユリコちゃんを宥めながら、俺は彼女の小さい身体を抱えて階段を数段下りる。

廊下の奥では片膝をついた松田と、激しくじゃれかかる大型犬のラッキー、そのラッキーをなんとか落ち着かせようと押さえつけている高階の姿がちらりと見えた。ラッキーが暴れる度に、人間も犬も身体のあちこちを床や壁に激突させては派手な音を上げている。

「……あれはさすがに……」

俺のぼやきに、腕の中のユリコちゃんが身を竦ませる。……あ、まずつた。

俺の動揺をよそに、伊吹は真剣な表情でスッと立ち上がる。

「ラッキー！」

鋭く名を呼び、廊下の真中へと移動し、仁王立ち。

何やらブレザーのポケットから取り出したものを、廊下の向こう、ラッキーに向けて突き出した。

「これ、分かるだろ？」

何だろう。手のひらサイズの、くすんだ色の柔らかそうなそれ。

俺が内心首をひねる一方で、ラッキーはそいつを瞬時に見抜いたらしい。軽やかな足音が近づいてくる。

伊吹が一瞬、こちらに視線をよこした。俺は反射的にユリコちゃんを背で庇う。背後を、二階の様子を窺うため、慌てて首を捻ったと

ところで目に入ったのは、跳躍して伊吹に飛びかかるラッキーと、足を踏ん張ってその巨体を受けとめようとする伊吹の姿だった。

「伊吹！」

どすん！と、大きく尻もちをついて伊吹が後ろに大きく倒れる。

ラッキーはすぐさま伊吹が手に握っていた「何か」を大きな口で奪い取り、嬉々として俺達のもとへと駆け寄ってきた。

俺はユリコちゃんを抱え直す。しかしラッキーはとてとてと先程とはまったく違う、穏やかな足取りで歩み寄り、口に咥えていた「何か」をぽとりと俺達の足元に落とした。

影になって見えにくいのが、どうやら人形のようなだ。フェルトで作られた二足歩行の茶色い猫。丸い顔に三角の耳、つぶらな瞳、首元には黄色いヒーローマフラー。

ユリコちゃんがぼそりと呟く。

「ニャンピー……」

ラッキーはその場でお行儀よく腰を下ろした。「待て」の姿勢で無邪気にこちらを見下ろしてくる。

俺は盛大に息を吐き、腕の力をそつと解いた。ユリコちゃんは俺の腕からずりりと抜け出し、目の前のラッキーに飛びついた。

「ラッキー！！！」

お利口な犬は心底うれしそうに、「ワン」、と一声高らかに吠えた。

＊ ＊ ＊

ユリコちゃんと再会したラッキーはその後すっかり大人しくなり、小さな飼い主の後をその巨体でのそのそと付いて歩くだけとなった。

……さっきまでの暴れっぷりは一体……。

俺達は大きな達成感と多大な疲労で妙なテンションのまま、まずは校長先生にこのことを伝えた。

いつの間にやら放送室に戻っていた校長は、無事任務を成し遂げた俺たちを見て一言。

「お祝いしようか！」

なんでやねん、と突っ込むのももう疲れた。

ということで、俺たちは今、食堂を貸し切ってワイワイやっている。（ただし夕方から定時制の生徒が使うため、それまでの間だけ。ついでにお菓子と飲み物はコンビニで校長が大量に買ってきた）。

ラッキー搜索を頼まれていたくせにどこかでサボっていたであろう教員たちをはじめ、騒ぎを聞いて駆けつけただけのまったく関係ない生徒も結構な数がいる。もうちょつとした立食パーティーのようになってるが、タダで食えるなら貰えるだけ貰っとく。腹減ったし。

たけのこの里を箱ごと奪って部屋の隅で一人ぼりぼり食べていたら、伊吹がふらっと隣にやってきた。

「お疲れ、ハル。一個ちょうだい」

「んー」

箱を差し出せば、一個と言ったくせに二、三個は摘まみ取って口に放る。軽く睨みつけたら、食えない笑顔でニコニコと返された。この野郎。

「……あ、そうだ。お前、あのニャンピー？ どこで見つけたんだ？」

なんだかんだで聞きそびれていた。

「ああ、あれね。昨日だったかいだったか、同じクラスの女の子たちが拾って俺に見せてくれてさ、『落とし物みたいだけどどうしよう』って。

どう見ても手作りっぽいから、事務所行って落とし物コーナーに預けた方がいいんじゃない、って答えといたの思い出したんだ」

ああ、伊吹に話しかけるダシにされてたわけね。そういえばあいつのノートにあった落書きも、思い返せばニャンピーだったのか。

伊吹は笑顔で続ける。

「ほら、ラッキーって、ユリコちゃん家を彷彿とさせるうどんの匂いには釣られるのに、近くにユリコちゃん本人がいても近寄ってこなかっただろ。変だなくって思ってたんだ。

で、さっき人形を落としたって話を聞いたとき、もしかしたらラッキーなりにそれを探しているうちにユリコちゃんから離れたのかな、って」

なるほど。もともとラッキーの目的はニャンピーだった、と。

俺は視線を食堂中央に向ける。数人の生徒に囲まれ、ユリコちゃんとラッキーは笑いながらじゃれ合っていた。

彼女の笑顔は楽しげながらどこか安心感に満ちており、ラッキーも甘えるように頭をすりつけている。お互いに信頼し合って繋がっているのが、傍目からでもよく分かる。

切っても切れないだろう絆。きっと彼らはすっかり家族なんだろうな。

思わず笑みがこぼれる。微笑ましい。

一方俺の視線に気付いたのか、向こうにいたユリコちゃんがぱつと振り返り、ラッキーを引き連れぱたとこちらに駆け寄ってきた。

俺たちのもとに辿り着いて、何かを確認するように俺と伊吹をそれぞれ指で指し示す。

「はるちゃんと、そうすけくん」

……なんだなんだ、なんで急にはるちゃん呼びだ。

俺は先程までユリコちゃんたちがいた辺りに視線を投げる。人混みに紛れて、ニヤニヤ笑っている村木と、済まなそうに苦笑いを浮かべた花歩がこちらの様子を窺っていた。なるほどあいつらか。

ユリコちゃんは何の前触れもなく、勢いよく腰を折った。ラッキーがそれを真似て頭を下げる。

驚いて目を丸くする俺たちを前に、ユリコちゃんはお下げを揺らして顔を上げ、にっこり笑った。

「ありがとう！」

ユリコちゃんに続いて、ラッキーも元気よく一声吠える。

「……どういたしまして」

隣で伊吹が麗しい笑みとともに優しく返した。ユリコちゃんは真っ赤な頬を小さな手で覆い、愛らしくはにかんだ。

そして、彼らの視線が俺に向く。

俺はなんだか照れくさくて、ユリコちゃんの頭を少し乱暴に撫でてやった。歓声を上げるユリコちゃんがひどく楽しげな様子だったためか、ラッキーも構って構ってと俺の腕に頭を擦りつけてくる。俺は苦笑いでラッキーのふわふわの頭を撫でてやった。ぬくぬくと温かい。クセになりそう。

ラッキーのふさふさの毛並みを堪能していたら、ユリコちゃんにちょいちょいと肩を突かれた。俺が顔を向けると、ユリコちゃんはここにこと伊吹を指差した。

伊吹の方も何か分かっているらしく、きょとんと俺たちを見詰めるだけ。ユリコちゃんは伊吹を指したまま、得意げに俺に告げた。

「さっき、かまってって言ってたでしょ？ おにいさんにも、なでなでって、してあげたら？」

理解するのに数秒かった。ああ、昇降口で、伊吹がそんなこと言ってたな。

「……そうかそうか」

俺はニヤリと笑って伊吹に向かう。甘ったれの王子サマは引きつった笑顔で後ずさった。

「え？」

「お望み通り、構い倒してやるよ」

即座に逃げを打つ伊吹のシャツの襟を咄嗟に掴んで、俺はその柔らかな茶色い頭に手を差し込んだ。抵抗される前に、さりげな

くセツトされていた茶髪を思いっきりぐしゃぐしゃに撫でてやる。

「わーっ、やーめーろ！」

「ほれほれ」

弱々しく抗う伊吹が面白くて、俺は更に激しく形のよい頭を撫でまわした。いくら撫でてでもサラサラの髪はすぐに大人しく落ちついてしまう。うん、面白い。

「……、もう知らないっ」

伊吹は何やら口走ったと思えば、全身で思いっきり抱きついてきた。勢いに耐えきれず、俺は思わず後ろへ尻もちをつく。……まったく先程のラッキーのようではないか。

好き勝手した俺への報復なのか、回された腕には痛い程ぎゅうぎゅうと力を込められる。さすがに苦しくてヤツの背を叩いても、ちっとも離れる気配がない。

向こうから村木が凄まじい形相で駆けてくる。……めっちゃくちゃ人目を引いている気がするが、まあ、今日はこいつも頑張ったので許してやろう。

俺は隣で大人しくお座りしているラッキーと、己にじゃれかかってくる大きな犬を見比べ、声を上げて笑った。

8. 嵐を呼ぶ球技大会

学級というものは縦割りで配布されるTシャツだけでなく、雰囲気というか、クラスによってそれぞれカラーがあるように思う。

特に、我が一組は団結力がぴか一だ。

二年一組の教壇の上で、タカが熱く拳を振るう。

「新しいクラスになってようやく二カ月といったところ、他クラスはそう練習なんて重ねていない。

しかーし！ 俺たちは違う！ ここ一週間、休み時間と体育の授業はすべてこの日のために費やしてきた！！」

クラスメイトたちは真剣な表情でタカの演説に聞き入っている。俺達一組のクラスカラーは青。教室中の人間が青いクラスTシャツと赤い学年ジャージを見につけ、自分たちが「二年一組」の生徒であることを主張している。

「今日はトーナメント戦だからな、負けたら終わり！ 素晴らしいことに一組は全種目トーナメントに進出している！」

青いクラスTシャツの上に体育委員専用の黒いTシャツを二枚重ねにして着込んだタカは、手元の資料で今日の試合予定を読み上げていく。

種目は男女合わせて四種目。男子のバスケ、サッカーと、女子のバスケ、バレー。そして男女混合のドッジボール。昨日丸一日かけてランダムに振り分けたリーグ戦を行い、今日はリーグの上位チーム同士でのトーナメント戦と、ドッジボールのリーグ戦を行う（ドッジボールはリーグ戦ですべて順位をつけることになっている）。

「いいか、俺達のサッカーをすれば勝てる。きばっていくぞ！」

「勝ちへの姿勢を諦めないこと！ リバウンド絶対取るんだからね！」

「先輩たち相手でも怯まないで、スパイク決めるよ！」

各競技のチームリーダーたちが代表して声をかけ、チームメイト

たちが力強い返事で応じる。一通り周り終わって、クラスの視線は全員参加のドッジボールのチームリーダーである俺に注がれる。

何も考えていなかった俺は少しだけ黙考して、頬を緩めてにっこり笑った。難しいことを言う必要はない。単純で当たり前で、けれど最高の結果のためには大事な一言。

「絶対、勝つぞ！」

男子も女子も関係なく、関の声は教室の窓すら震わせた。

こうして、球技大会本戦が幕を上げた。

＊ ＊ ＊

手が使えないというのは面倒なものだけど、普段は移動のためくらいにしか意識しない足でボールを操作するというのも、新鮮で面白いものがある。

足の側面、土踏まずの辺りを使えばコントロールがうんと容易になることに気付いた俺は、ボールを右に左に動かして、バスケの一対一の要領で相手の視線を誘導し、立ちほだった敵方二人を抜き去った。

「キャーッ！！ 伊吹くーんっ！！！！」

女の子達の黄色い声援に苦笑いしつつ、ゴールに狙いを定める。昨日タカに教わったコツとやらを再び思い返す。前を見る。ゴールキーパーが硬い表情で構えている。障害物は彼一人。俺はほくそ笑んだ。ここで決めねば男じゃない。

足を大きく踏み出す。うまい具合にボールの真横に左足を添え、運動で生じたエネルギーすべてを右足一点に移すように意識して、ボールの中心を思い切り蹴りつけた。

『キャーッ!!』

我ながら恐ろしく勢い付いて発射されたシュートは、見事白いネットに突き刺さった。

「お疲れさま、伊吹君!」

「最後のシュートすごかった! 私もう痺れちゃった」

「あのっ、このタオル使ってください!」

試合終了のホイッスルが鳴るや否や、コートを取り囲んで応援してくれていた女の子達が一斉に押し寄せてきた。

共に闘ったチームメイト達は引きつった笑いで頑張れよと親指を立ててみせ、そのままそくさとグラウンドの向こうの方へ逃げってしまう。ひ、ひどい。この状況を一人でどうしろと。

女子達はきゃあきゃあ俺の鼓膜に恨みでもあるのかと問いたくなるほど甲高い声を張り上げ己の存在を主張している。タオルやラドリンクやらが差し出されるけど、その度に他の女子に叩き落され、あちこちで険悪なムードが漂い始める。一触即発とはこのことか。

仕方ない、一人ずつ相手するしかない。……この人数だけど。

嫌々ながら腹を決めたところで、襟首を思い切り引っ張られた。

「聡介はこっち! 次は審判やつてもらうんだから」

慌てて振り返れば、タカが腰に手を当て仁王立ちしていた。頼もしいことこの上ない。首は未だに苦しいけれども（すぐに離れてくれてもいいんじゃないか……）。

女子からは不満の声上がるけれど、タカにあの眩しい笑顔で「悪いな!」と言われてしまえば、頬を赤らめ「しょうがないなあ」と道を開けてくれた。……さすがタカ。他の男子だったらボッコボコにされていることだろう。

襟首を引っ張られながらなんとか女の子達を撒き、落ち着いたところで、タカは呆れ顔でようやく振り返った。

「……ほんっと、厭味なくらいなんでもできるなお前」

「んー、まあ、タカというお手本があったからね」

俺はよく「何でもできるね」と言われるけれど、自分が別段優れた人間だとは思わない。たしかに俺は少しだけ運動神経に恵まれているかもしれないけど、それより何より、こういったものとはとにかく頭脳がモノを言う。

何をどうやったらどのようなようになるのか、とにかく何かにつけて考えながら動けば、大抵のことは上手いく。自分の身体の動かし方を知ること、それによって生まれる状況を客観的に知ること。それを分析して、必勝法というか、コツといったものを掴めれば後は簡単だ。

そしてそのコツを理解するためには、お手本があるのと無いのとじゃ全然違う。今回のサッカーに関して言えば、タカのプレイを何度か見ていたおかげで救われた部分が大きい。

心中でしみじみと感謝しつつ、俺は隣のタカに一声かけて、通りすがりに目に付いた水道に寄ることにした。

すっかり喉が渴いた。口の中が砂っぽい。

口を濯いで一息ついたところで、ようやく「審判」がどうか言われたことを思い出した。

タカに聞いてみる。

「そうそう、第二試合Aコートで、三組対四組の男子バスケな」

「三組……」

ハルのクラスだ、と咄嗟に思う。

「三組も何気に勝ちあがってんだよなー、運動部女子が多いのと、やっぱり松田かな」

「ああ、松田君ってすごいんだね。俺、初めて体力測定で人に負けたよ」

所々勝った種目もあるけれど、トータルだと僅かに及ばない。五十メートル走で負けたのなんて始めてだ。それでも俺は、陸上部の助っ人で大会に出場して、全国大会まで行っただけくらいだ。足には自信がある。

「……どうしてサッカー部なんだろう。もっとシンプルな競技なら

あの才能を活かせるだろうに」

「ドーせ女にモテるからとかじゃねーの」

バツサリ切り捨てられた。

「じゃあ聡介、次の試合の審判で、三組の試合ちゃんと見といてくれよ。松田の鼻っ柱へし折ってやる」

俺は笑って了承しておく。バスケ部として、校内一の運動神経を誇る松田君のプレイは気になる。気になる、けれど。

どうしてかな、ハルはどの種目だろう、と、そればかりが思考を占めていた。

最近の俺はちょっと変だ。

俺はタカに言われた通り、バスケの審判を任されていた。俺の所属するバスケ部をはじめ、サッカー部・バレー部はそれぞれの種目の審判を、ドッジのラインマンには剣道部と卓球部が生徒会から応援を頼まれている。

バスケ部員はバスケに出られないということで、目の前で走り回る選手たちを眺めながら「サッカーよりもバスケがしたかったな」と未練がましく胸中だけでぼやきつつ、俺は得点係を全うしていた。さて俺が変だというのは、基本的にお気楽な俺が珍しく現状に不満を覚えている、ということではなく、傍らの得点板にもたれかかっている一人の男子生徒のことだ。

今日の前で展開されているバスケの試合は、男子バスケ二日目第二戦Aコート、四組対三組。その途中の選手交代でコート外に出てきた三組の選手は、俺の姿を認めて、表情をちよつとだけ緩めて俺

のもとへ駆けてきてくれた。

「審判だったのか、伊吹」

焦げ茶のベリーショート、派手な顔立ちではないけれど、笑うとその名の通り春風のように温かな気持ちを起こさせる男の子。

「……ハル」

「サッカー見たぜ。お前ってほんとに何でもできるんだな」

「見てたのか。照れるなあ」

ハルは得点板に寄り添うようにして腰をおろした。どうも暑いらしい。三組の赤いクラスTシャツの襟を引っ張って風を送り込んでいる。俺は、友人の、そんなありきたりな姿をなんとなく眺めていただけなのに。

その時偶然目に入った、首を伝う汗を堰き止めた隆起、彼の鎖骨、に。

血が一斉に逆流を始めたのかと思った。

意味もなく口を手で押さえる。顔が熱い。シナプスが焼け焦げそうだ。なんだこれ、これじゃあ、まるで。

「どうした？」

ハルが下方から訝しげにに覗き込んでくる。完全にパニック状態に陥った心臓とは裏腹に、不思議なことに自然とわき出た笑みに任せて、大丈夫と答えることができた。

俺はとにかく自分の意識をそらせたくて、動きの鈍い頭を必死に回して他の話題を探りあてる。

ふと視線を正面に戻して、ようやく話題の糸口を摘まみ上げた。

「……三組は強いね。男女バスケットドッジが本戦出場だっけ」

ハルがちらりとこちらに視線を投げる。目が合う。大丈夫、落ちて着いてきた。

「一組だってすごいじゃん。まあ、うちは松田がいるからな」

たしかに、コート上で一番人目を引くのが松田君のプレイだ。バスケをするには低身長というハンデがあるものの、運動量が半端ない。ドライブなどはえげつないほど鋭く速く、近くにいた選手がぼ

かんと棒立ちで見送るくらいだ。

それだけではない。三組の場合、あの山本君が珍しくやる気を出しているのも大きいだろう。恵まれた体躯を活かして、ゴール下ではブロックにリバウンドに大活躍だ。

三組側に松田君のシュートが決まる。よくやるよなあ、とハルはしみじみと溢した。

「ハルだってがんばってたじゃない」

「俺は全然。球技は苦手なんだよ」

「でも運動は嫌いじゃなさそうだよ」

「……そうだな、中学では陸上部だったし」

陸上部かあ、そんな感じするかも。そうコメントしたら、なんだそれ、とおかしそうに笑われた。俺は再び軽く石化するはめになる。最近の俺は何なんだろう。ハルの笑顔が、たまらなく嬉しい。

そんな俺を不思議そうに見つめているハルの背後に、ゆらりと大きな影が現れる。影の主、山本君はダルそうに腕を上げ、嫌そうに顔を歪めるハルと半ば無理やり手を合わせた。

選手交代らしい。ハルは渋々と立ち上がる。

「行ってくるわ」

「うん、行ってらっしゃい。がんばれ」

かろうじてこれだけ答えると、ハルは小さく頷いてコートへと駆けて行った。

彼が試合へ完全に参加し始めたことを確認して、俺は緩々と息を吐く。

しっとり汗ばんだ肌、首筋を滑る光の雫は鎖骨のくぼみで動きを止め、誘うような光を湛えて震えていて。

そいつを舐め取りたい、なんて。

「……どうかしてる」

傍らで座り込んでいた山本君はちらりとこちらに視線を寄こしただけで、何も言わずパーマのかかった髪を無造作に掻き上げた。

後半も残り時間半分を切った。この点差なら三組の勝利は堅い。

次の試合のドッジボール、我が一組はわりとあっさり勝利した。今回も女の子達がコートの外で待ち構えていたけれど、殺到される前に、悪いとは思うが俺は先手を打った。

「岡崎さん！」

先程までは敵だった、七組の岡崎さんが振り返る。俺の姿を認めると、にっこり笑顔で応じてくれた。相変わらず可愛い人だと思う。クラスTシャツに合わせてか、黄色い星の髪飾りでふわふわの髪をまとめている。

「お疲れ、伊吹くん。もう負けちゃったよー」

「うちのクラスは気合い入ってるからね」

「入りすぎだよ、怖いなのって」

七組はなんとなく、全体的にのんびりした雰囲気漂っている。そんなのほんなクラスと、うちのようなクラスとでは、闘う前の心構えからして違うのだろう。実際、七組の人たちは負けたというのに、さほど悔しそうではない。負けた相手である俺やタカに声をかけようとタオルを握りしめている女の子が多数いるくらいだ。

それでも彼女達が押しかけてこないのは、岡崎さんが人気者だという点にある。これが他の女子だったら、その子を押しのけようとむしろ火に油を注ぐ形になるだろうけれど、岡崎さんならどうやら「あの子じゃ仕方ない」という気持ちになるらしい。実際、彼女は人に有無を言わせぬ、凄みとすら取れるほど圧倒的な美しさがある。「これだと一組が決勝に進みそうだね」

そんな言葉を残し、岡崎さんの笑顔が唐突に視界から消えた。

……なんだろう？

驚く間もなく、ド派手なオレンジ色が彼女の上から降ってきた。

「いやいやー、田中クンのいる三組も捨てがたいっしょー」

「……瞳、重い」

岡崎さんの背中におぶさる形で、オレンジ色のボブヘアの女子が顔を上げた。村木さんは黒縁メガネの奥で、ニヤニヤと何か言いたげにこちらを見上げてくる。

この前のラッキー事件以来、この村木さん、という女子からよく絡まれるようになった。他の女子のようにキャーキャーと俺に何かを求めているわけではないようなので、別段困るわけではないけれど。ただ、何を考えているのか分からない、具合の悪い不気味さはどうにも否めない。

「もちろん、三組とどっかで当たるんだろ？」

「え、ああ、午前中には試合になると思うよ」

「わー、応援に行かなきゃ」

岡崎さんが心なしか頬を赤らめて、嬉しそうに手をぽんと打つ。

……なんだろう、この感じ。落ち着かない。

自分でも不可解な、薄暗く不明瞭な、妙な気持ちで可憐な同級生を見下ろしていたら、岡崎さんは目を細めて、驚くほど大人びた笑みを浮かべた。

「どっちも応援するよ？」

背筋にヒヤリと寒気が通った。……変な風に胸がどきどきする。

固まる俺の心を知ってか知らずか、村木さんは俺にニヤリと胡散臭い笑みと一瞥をくれ、しかしすぐに黒く塗った爪で岡崎さんの頬を軽く突いた。

「あんたは素直に田中を応援してやったら？ 王子の応援なら腐るほどいるじゃん」

「んーでも、ハルちゃんだって地味ーに人気あるんだよ？」

「そうなの？」

思わず口を挟んでしまった。岡崎さんはこてんと首を傾げる。

「大人しめな女の子が多いから、あんまり表には出ないんだけどね。わたしが邪魔しちゃってると思うとちょっと申し訳ないけれど」

だから、わたしがハルちゃんばかり応援して勘違いさせたら可哀想でしょ、と。

「……岡崎さんは、ハルと付き合うとか、ないの？」

「ないない！」

岡崎さんは笑って否定する。心の底から有りえないとも思っているらしく、その笑みにはわざとらしさは一切ない。

しかしその返答だとまるでハルに魅力がないと言わんばかりの言い方で、ちよっとだけ、……ちよっとだけ、胸に引っかった。

「なにに、王子ってば田中のこと、気になるの？」

村木さんが心底楽しそうに喰いついてくる。

メガネの奥のうさんくさい笑顔に背筋が一瞬ぞくりと冷えるが、俺はつい思ったままを口にした。

「うん……気になる、かな」

なんでだろう。ふと、先程の映像が頭をよぎる。汗ばんだ肌、まっすぐ通った鎖骨。じわじわと頬が熱を持つ。慌てて口元を手で覆う。

村木さんは勇ましくガッツポーズを繰り出していた。

＊ ＊ ＊

「俺達はどうとうここまでできた！　ここが正念場だぞー！！」

ラグビー部の屈強な男子が声を張り上げる。

「あんなふざけたクラスに負けんじゃないわよ！　勝つのはわたし達、一組なんだから！」

強い口調で言い含めるのは、陸上部の槍投げ選手であるドッジボール期待の女子。

みんなの視線が俺に集まる。円陣をぐるりと見回してみる。肩を組んで身を寄せ合い、みんな真剣な表情で闘志を瞳に宿らせている。目が合ったタカが無言で頷く。応えるように、俺は大きく息を吸い込んだ。

「勝つぞ!!」

おう、と声の揃った大きな咆哮は、豪快に青空の向こうへと飛んで行った。

とうとうドッジボールの三組戦がやってきた。

コートにぞろぞろと人が入る。内野は全員しゃがみこんで、審判の人数カウントが終わるのを待つ。

しゃがみ込んだまま、タカがそこそと身を寄せてきた。体育委員の黒いTシャツはすでに脱いでおり、俺達と同じ青いクラT姿だ。「どう思う?」

「……やっぱ松田君は要注意だよ。あとは、女子かな。ソフト部のエースピッチャーがいるはず」

「男子は強い使っちゃって女子に当てないし、強い女子がいるってのは痛いんだよね、女子が減らされる。うちにも槍投げの女子がいるから、その対決になるかもな」

「松田君には極力投げない方がいいかもしれないね。先に、当てられそうな人を外に出す形で」

タカは無言で頷き、俺たちは目を合わせて笑い合う。

審判から立つよう指示が出た。俺達は気合い十分に、ゆらりと炎のように立ち上がる。

相手コートに目を向けると、ハルと山本君が、応援に来ている岡崎さんと何やら話しこんでいた。ふと嫌な憶測が胸をよぎるが、促されるままセンターラインと平行に列を作る。

ハルも向こうから駆けてきた。俺の斜め左辺りの位置に落ち着く。なんとなく見つめていたら、俺の視線に気付いたのか、彼もこちらを向いてくれた。

目が合う。ふと押し寄せる熱い感情に任せて、俺は笑った。ハルはニヤリと、男くさく返してくれた。この感情は何なんだろう。俺は拳を握りしめる。負けたくない、今日一番に強く思った。

審判が腕を上げる。人が散る。俺はゆっくりと相手のコートへ回った。ジャンプボールは今回初めて自分から志願した。

ホイッスルが鳴る。ボールが上がる。俺はありったけの力を込めて地を蹴った。

立ち上がりは一組ボールとなった。俺が弾いたボールを、軽く飛び上がってタカが受け取り、着地ざまにすぐ投げつけた。ぼさっとしていた男子の腿に当たる。

短い笛の音と一組の歓声。こぼれ球を危うく拾い上げた松田君が、とぼとぼコートを出ていく男子に吠えた。

「だああ、なーにボケっとしてんだよお前はあああ」

「面目ねえ」

「ドッジボールってのはよお、殺らなきゃ殺られるんだよ、アンダースタン？」

「早く投げろよ」

山本君の突っ込みに、松田君は唇を尖らせながらセンターラインまで寄って来る。彼は俺達の陣形を認め、しばしの間きよとんとした。

一組の内野にはあまり後ろまで下がらないように指示してある。あまり後ろに寄ってしまうと、外野にボールが渡った時、逃げるのに混乱が生じてしまう。下がりすぎず、コートの真中あたりで上手く動く方が、ボールの方向に対応しやすく、逃げやすいはずだ。

松田君がそのことを理解したのかは分からないけれど（多分理解できていない）、それでも不敵に笑ってみせた。

「そんなに前の方で大丈夫？ 俺当てちゃうぜ？」

俺を含め、運動神経に自信のある男子数人が前に出る。取れるボールなら取ってしまいたい。

松田君は一瞬表情を消し、大きく振りかぶる。と思ったら、傍らの男子が後ろに吹っ飛んだ。

「つてえ！」

驚いた。モーションがまったく見えなかった。

俺は慌ててこぼれ球に手を伸ばす。両手では間に合わないのて伸ばした指先に集中して、片手でぐつと鷲掴んだ。吸いついたボールを三組の外野に取られる前に胸へと抱え込む。

「サッカー部のくせになんて肩してやがる！」

野球部の男子が呆れたように毒づいた。

女子は完全に怯えてしまっている。あれが当たるのは怖いだろう。……まずい空気だ。

俺は手を打って皆の視線を集める。

不安げなクラスメイトを見まわして、俺はいつも通りに笑ってみせた。

「安心して。次は取るから」

頷くだけでなく、俺も、わたしも取るよと笑い返してくれる仲間たち。沸々と歓びとか闘志とか、熱を持った力が漲ってくる。

一方、三組の喜びようは半端なかった。男女関係なく、いつまでも歓声を上げている。なんかフラダンスとかしている人までいるし。そもそも背を向けているじゃないか。

ボールを片手に、俺はなるだけ静かにラインに駆け寄る。三組の面々が気付いた時には、容赦なく右手のボールをその背にぶん投げていた。

バン！と盛大な音を上げてその男子は倒れ込んだ。むせているあたり悪いことをしたかなとも思うけれど、地を打ち高く舞い上がったボールはこちらの外野に渡ると思いきや、飛び上がった長身の男子が見事にそれを阻止した。

「……山本君」

GJ山本！と駆け寄ってくる松田君に蹴りを入れながら、山本君はこちらに向く。……空気がガラリと変わる。

山本君は長い手足で、鋭く投げ込んできた。速い、と思う間もなく後方の男子が当てられる。しかし動揺することなくタカがボールを掬い上げそのまま駆け込み、身体を目一杯使って敵方に豪快に投げつけた。避けようと後退していた男子の肩にガツンとぶつかる。

それからはもうどちらの陣営もじりじりと人が減って行った。

ハイレベルな闘いだった。飛び交うボールは見物人すら顔を青くする勢いで、当たった人間は吹っ飛ぶことすらままあった。少年漫画かこれは、と突っ込みたくなる勢いだ。

しかし、段々と形勢は三組に傾いていく。

「よっと！」

タカが投げたボールは、コートを横切る何かに奪い取られた。それは勢い余って土煙を上げながら地面を転がる。そして危なげなく立ちあがったときには、彼の胸にはしっかりと白いボールが。

「あんな近距離でよくもまあ……」

「来るぞ！」

ボールの速度に慣れてきたのだろう、松田君が積極的にボールに手を伸ばすようになったのだ。

投げ込まれたボールはわりと軌道が高かったので、俺は済んでのところでキャッチできた。

俺は汗を拭いながら後ろを振り返る。

……やはり大分減っている。

先程、一組女子のエースである陸上部の女子が当てられたのが痛かった。女の子がすっかり委縮してしまっている。

参ったな、これじゃ差が開くばかりだ。髪を掠めた豪速球に唇を噛む。

正直、俺は世界で一番嫌いなものはと問われれば真っ先に「敗北」

と答えるほどの負けず嫌いだ。

仕方ない、あまり使いたくない手ではあるが。俺は三組のコートの端っこ、女子の密集地帯に向けて、威力を落として地面スレスレに投げ込んだ。

「きゃあああ！」

二人一気に当たったようだ。なるだけ力はセーブしたつもりだけれど、足を押さえてコートを出ていく女の子達の姿には、勝利のためとはいえ、やはり胸が痛む。

「……ごめんね」

だから思わず、外野に出てきた彼女達に声をかけた。

「きゃああああ！！！」

……ボールを投げ込んだときより大きな悲鳴が上がった。なんか泣くほど喜ばれてしまっている。

俺が困り切っている間に、一組の外野からタカの手にはボールが渡った。彼も同じく、低い弾道で人の塊に狙いを定めた。一人の女子の足に当たる。タカはあっけらかんと爽やかな笑顔で「わりい！」の一言。

三組の女子が湧き立った。

熱狂的なファンなどは「当ててくれ」とこちらに寄ってくる始末だ。

「きったねーぞ！ イケメンを使うなんて！！！」

「へん、これだって立派な才能だったの！」

松田君の非難に対し、タカが偉そうに煽っている。卑怯だとは思えうけれど、力いっぱい投げたボールが誤って当たってしまうよりは、大分いいと思うんだ、うん。

「くっ……女の子に当てるなんて……くっ！」

「こっちも狙えばいいじゃねーか」

山本君がボールを片手に踏み出すのを、松田君が慌てて蹴りで阻止した。

「女の子に手を出すなんて俺は許しません！！！」

「うっせーなあ、ここで負けたらしろくまくんがナシになるだろが」
珍しくやる気があるなと思ったら、どうやら山本君はモノで釣られて
いるらしい。しがみついてくる松田君を引っぺがしながら、山
本君はなぜかあらぬ方へ向かった。

「チッ、田中！」

……ハル？

隅の方でぼーっと突っ立っていたハルは苦渋極まりない表情で、
コートの外へと小さく声を投げかけた。

「……花歩」

嫌な予感がする。

岡崎さんは苦笑いで「効果なくても知らないよ」と前置いて、三
組コートに向き直った。

「松田くん！」

口元に両手を添え、声を張り上げる。

「三組が勝ったら、わたしとデートしよう！」

今までになく凄まじい球が後方の男女二人程を弾き飛ばした。

……き、きたない。

その後、俺達は浮足立った三組女子の足を狙って減らしていった。
一方あちら側はどうやらソフトボール部のレギュラーバッテリーが
内外にいるらしく、一組女子は彼女達による男子も真っ蒼な豪速球
の餌食となっていた。

パワーアップした松田君は、男女関係なく無造作に狙っているら
しく、弱点を突くといった嫌らしさはないものの、だからこそこれ
を止めるのは至難の業だった。

そうしてコートに残ったのは、一組も三組も、男子三人ずつ。

「田中も残ってたのか。地味だから気付かなかった」

タカは失礼にもそんなことを言っただけのけるが、三組の残りの内野
が松田君と山本君だと、狙うはやはりハルだろう。

タカは軽やかにセンターラインに駆け寄り……投げる。ボールは

まっすぐハルへと向かうが、彼は特に避ける様子がない。その理由はすぐに分かった。松田君が飛び込んだできたのだ。

松田君はボールを巻き込み一回転して、即座に立ちあがり不安定な姿勢のままとんでもない速球を飛ばしてきた。投げ放ったばかりで受けの体勢が取れていないタカの肩をボールが打つ。が、弾かれたボールは駆け込んだ俺の手に収まった。地に落ちる前に拾えばセーフのはずだ。

俺は目を丸くする松田君の表情を視界の片隅に入れ、最も近い距離の山本君に狙いを定めた。素早く振りかぶる。

山本君はなぜかその口元に笑みを刷き、

「なっ」

ハルを引き寄せ、盾にした。

驚きに見開かれたツリ気味な目とかつちり合う。

むしろチャンスのはずなのに、この一瞬で俺は思いっきり動揺した。

タイミングがずれ、失速した球は再び飛び込んできた松田君の手に渡って。

「聡介！」

俺は見事に当てられてしまったのだった。

＊ ＊ ＊

昼休み、俺は校舎裏にひっそりと設置された、車寄せの下のベンチでぼんやりしていた。

水色に塗装された和洋折衷の豪華な造りの屋根柱は、百年も前に造られた旧校舎の遺産らしい。埃を吸って色はすっかりすすけてい

るが、人足もほとんど無いと言っていい静かな場所で、のどかな草花に囲まれながら、そこだけ切り取ったように静かに厳かに佇んでいる。

俺は燦々と降り注ぐ陽光の白さをぼんやり再認識しながら、昼食にしようとする用意した自作のおにぎりを頬張った。

さっきのは何だったのだろう。ハルが視界に入った途端、心臓が面白いくらいに跳ね上がった。あまりに突飛な行動だったから、というのも言い訳にならないこともないけど、やはり異常な反応だったと我ながら思う。

最近の俺はどうにもおかしい。

そして必ずその場面に付随するのは、優しくて聡い真新しい友人の影なのだ。

もっと仲良くなりたい。もっと一緒にいたい。彼のことをもっと知りたい。これらは友達となれば少なからず生じる欲求だろう。

けれど、彼の姿に胸が躍るのは？ いつの間にか目で追っているのは？ 頬が熱くなるのは？ 笑顔をもっと見たいと願うのは？

俺は思考を放棄する。考えたってしょうがない気がした。それより、いつの間にか差し込んだ影に視線を上げる。

ぽかぽかした暖かい長閑な景色の中に、目が覚めるような真っ赤なジャージ。

「……聡介」

日に透けた赤い髪に、人目を引く端正ながら華やかな美貌。

陽光を背に佇むのは、かつての自慢の恋人、愛沢美咲。

姿だけならよく目にするし（彼女の美しさはいかんせん人目を惹く）、つい最近も少しとは言え言葉を交わしたはずなのに、こうして彼女を目の前になると、なんだかひどく懐かしく思う。

関係を解消してから長い時間が経ったように感じていたけど、美咲はあまり変わらない。どこか俺の内心を窺うような素振りはあるものの、付き合っていた頃からそういう可愛いところはあった。今だって彼女のそういう隠れた気弱さは可愛いとは思っているけど、

あの頃とは何かが決定的に違う。

分かっている。この空気を「懐かしい」と感じることで自体が俺の心の「変化」なのだ。

ダメだ、この先を考えてはいけない。

ぼんやり展開する思考を振り払い、俺は美咲に向き直る。一人で考え込む俺に話を切り出せなくてまごついていたらしい彼女は、少しほっとしたようだった。

「遅かったね。急にメールなんてどうしたの」

そもそも、俺がこんなところで昼食をとっていたわけ。昼前に届いた美咲からのメールには、「話がある、昼にいつもの所で」とあった。

なんとなく、うやむやに終わった別れ話のことなんだろうと察しはつくけれど。あの時はショックも大きくてあんなにも苦しかったのに、今ではすっかりけろりとしている。なんだか変な感じだ。

彼女はしばし目を泳がせ、やがて腹をくくったのか、俺に軽く頭を下げた。

「この前はごめんなさい。ひどいこと言っちゃって」

「別に美咲は……」

悪くないよ、そう言おうとして、飲み込んだ。

俺を射抜く鳶色の瞳。あまりに真剣な、強い視線に俺は動きを封じられる。

「でもね、私の気持ちは変わらないわ。

他の女の子に優しいのだって、わがまま全然言わないのだって、私のこと氣遣ってのことなのはよく分かる。

だけど私はそれじゃイヤなの。私だって、聡介の嫌なことから守ってあげたいって思うのよ」

意地っ張りの彼女から放たれる素直な気持ちに、しばし言葉を失う。

呆然と見つめるだけの俺に、美咲は小さく笑った。呆れたような困ったような、彼女にしては珍しい、優しげで温かで魅力的な笑み

で。

「分かってよ、私はやっぱりあんたが好きなの。

聡介は優しいから、本気じゃなかったとしても」

「それはない」

衝動のままに口が動いた。これだけは言わねばならないと思った。たまに見せてくれる笑顔が、たまらなく愛しかった。笑ってくれる度に胸が熱くなって、俺は柄にもなくいつも笑ってごまかしていた。

笑顔だけじゃない。いつもは強がって澄ましているけど、ふとした時に見せる不安げな表情は胸を強く揺さぶった。見かけよりずっと弱い彼女を、守ってあげたいと強く思った。

彼女の笑顔のためなら、なんだってしてやろうと。

「誓って言うよ。俺は美咲を愛していた」

これを恋と呼ぶずに、なんと呼ぶんだ。

真剣にこんなことを伝えたのは初めてかもしれない。愛を口にするときはいつも笑顔で、じゃれあいの延長線のような和やかな雰囲気だったから。

美咲は小さく息を吐いた。やれやれ、と言わんばかりに。

「愛していた、ね。」

わたしはもう過去の女ってわけ？」

「……分からない」

でも、

「前みたいには付き合えない、と思う」

なぜかは分からないけれど、確信はあった。

しかし美咲は気分を悪くした風でもなく、むしろ楽しげに笑ってみせた。

「上等よ、また学園一の王子様の彼女に返り咲いてやるんだから。覚えといてね。わたしは今でもあなたが好きよ」

美咲の背を見送って、俺は緩々と頭を抱える。

久しぶりに目にした彼女の笑顔はあの頃と変わらない。美しい。けれど、あの頃ほどの高揚は感じない。

理由は分かっている。俺にとって、それよりもっと深く心に根を張る笑顔があるのだ。

——彼の姿に胸が躍るのは？ いつの間にか目で追うのは？ 頬が熱くなるのは？ 笑顔をもっと見たいと切に願うのは？

俺は答えを知っているはずだ。けれど、それはあまりに危険で恐ろしい道であり、踏み出そうなんてとても思えない。その先に焦がれてやまないあの笑顔があったとしても。

……美咲が俺をもと来た道に引き戻してくれればなあ。

口元が苦々しい笑みを浮かべるのを自覚しながら、俺はゆっくり立ちあがる。午後一番は三組のドッジボールの決勝戦だ。

苦しくても辛くても、この茨道を選ぶ日はそう遠くないだろう予感がした。

9. しとしと

「な〜にやってんだろ〜うなあ、俺は」

横殴りの雨を受けては滝のように雫が流れゆく窓に、ぽそりと眩く。窓ガラスに収まる景色は昇降口の一端。曇天の暗い空気の中でも眩いばかりの存在感を放つ俺の友人と、最近親しくなった至ってフツターの男子生徒が、和やかな雰囲気談笑していた。

戻りにくい、と思ってしまうのはなんでだろう。

そもそも聡介があんなところにいるのは、一緒に帰ろうと二人で昇降口まで下りたものの、俺が忘れ物を取りに教室に戻ったため。

田中は恐らく待っている途中で出くわしたのだろう。

すでに忘れ物は鞆に詰めたし、後は聡介のもとへ戻るだけなんだけど、二人の姿がふと目に入り、俺はなんとなく廊下の窓ガラスの前で足を止めてしまった。

（楽しそう、だよなあ）

最近気付いたこと。田中が相手だと、聡介は目を輝かせて心から楽しそうに接している。比較的どんなタイプ相手でも障りなく交流できる代わりに、自分を抑えがちの聡介が、ああも自分の感情をあけすけに示す相手は珍しい。聡介は好意をもった相手ほど、周囲に気を使って行動する。俺の見たところ、恋人である愛沢の前でさえも肩を張っていたあの聡介が、だ。

（田中って何者なんだろう）

ちょっと大人しいけどイイ奴だってことは、話しててなんとなく分かる。盛り上がるわけじゃないけど、田中との会話は心地いい。松田なんかは「ハルは聞き上手なんだ」と得意げに言っていたけれど、まさにその通りなんだろう。自分だけじゃなくて、周りのこともしっかりと思いい遣れるヤツ。そこら辺は、少しだけ聡介に似ている気がする。

そうか。だから聡介は、田中相手になら安心して素を出せるのか

もしれない。自分だけでなく、周りがよく見えるヤツだから、聡介が危惧するような面倒な事態を起こしてくれることはないだろうと。そういう点は俺とは正反対だ。自分でいうのもなんだけど、目立つし影響力あるし、何より、こうして内心で一人拗ねている時点で、俺は自分のことしか考えていない。

「くやしいなあ……」

「なにが？」

「!!？」

驚きに身じろいだ勢いで、ガラス窓に思い切り肩をぶつけてしまった。盛大な衝撃の余韻に震える窓に、割って入った声の主が呆れた様子で目を細める姿が映っている。

「なーにやってんのあんた」

「村木……」

ド派手なオレンジ頭に黒縁メガネ。めんどくさいやつに見つかった。

フラッシュバックする数々の悪夢。俺がちょっと顔のいいヤツとじゃれていたと聞き付けては、鼻息荒く追及され、そいつと俺をモデルにしたいかがわしい絵やらマンガやらを押し付けられる。クロッキー帳に描かれた俺は、そりやもう掘られたり突っ込んだりと大忙し。見たくないつつってんのに押し付けてくるし（反応を楽しまれているんだろうけれど）。いかんせん、小学校からの腐れ縁なんでもんだから遠慮というものが一切ない。

まさしく腐った縁のあるその女は、興味深げな視線をこちらに投げかけてから、服の乱れを無言で正す俺の隣に軽やかに歩を進め、窓越しに、先程まで俺が眺めていた辺りに目を落とした。

「あれ、王子と田中じゃーん！」

大袈裟に明るい髪を躍らせ、心底楽しそうにうつさんくさい笑顔を向ける。

「あれを見て、“くやしい”のかね？　タカちゃんは」

「どうでもいいだろ」

「よかないさ！ 心配なのだよ、キミたちの友情が」

引きつった笑顔を返せば、彼女はメガネの奥で恐ろしく妖艶に微笑んだ。

白々しい。こいつの目的は分かっている。男同士の恋愛がだいすきな、腐女子とやらである村木のこと、俺をホモにしたてあげたいのだろう。冗談じゃない。

「とられて、悔しい？ 王子の隣」

この問いも、とんだ見当違いだと思う。こういうところ、女つてのはよく分かんねえ。

「とられるとか隣とか、何それ」

「ん？ ちがうの？」

「ちがうというか……ただ、あいつにとっての“特別な友達”は、俺だけじゃないんだなあ、と」

「特別な友達？」

オウム返しに投げ掛けられる言葉を、俺は内心静かに噛みしめる。少なくとも、俺にとっては。聡介は他の友人たちとは全然違う。

「似てるから、俺たち。気い使わなくて済むし」

俺もあいつも、香南に入れる程度には頭がよくて、運動もできて、顔もそれなりで。「なんでも揃ってる」「欠点がない」とかよく言われるけれど、こんなの努力の賜物だ。見かけのよさは、自分に似合う髪形や格好を考えているから。運動はサッカーが上手くなりたくて身体を鍛えた結果だろうし、勉強も世間一般の同年代よりは努力している自覚はある。

けれど、他人はそれをなかなか理解してくれない。

「“特別な人間”扱いしないところが、特別なんだよ」

聡介は、他人が見逃しがちな俺の努力をきちんと認めてくれる。

理由は簡単だ。あいつは誰よりも、努力の人だから。

「ややこしいなあ」

そりゃあ分からないだろう。不満げな彼女に、俺は嫌味っぽく笑

つてみせる。が、こいつにはあんまり堪えてないようで。

「よく分かんねーけど、私としてはあまり面白くない展開なのは何となく分かった」

「……そんなに俺をホモにしたいのかお前は」

「だってー、そんなに特別なら、こう、オンリーワンの特別な特別だと思わんかね？ 具体的には、ラブ！みたいな。ラブ！」

「お前なあ……」

なあにがラブだ、なにが。聡介と俺がホニャララとか……想像しただけで恐ろしい。というかおぞましい。

呆れを隠さず思いつきり睨みつけるも、村木はその艶やかな見かけに似合わず、キラキラと眼を輝かせている。何が彼女をここまで駆り立てるんだか。小学生のあの頃は明るくも真面目な女子だったのに……いいや、なんかもうどっと疲れた。

なんとか分かりやすく疑惑を払しょくできないだろうか。しばし考える。

「……そうだなあ、お前だって、花歩ちゃんに彼氏ができるより、仲良さげな女友達が出てきた方が気になるっしょ？ いつもつるんでる自分よりも、その子を優先させるようなことがあれば、なんていうかこう、ちょっと揺らぐじゃん」

我ながら分かりやすいと思うんだけど。村木はふむ、と腕を組み、したり顔で頷いた。

「……なるほど、『源氏物語』だね」

「は？」

なんだ急に。どっから出てきたんだそれ。

村木は指を立て、「紫式部の賞賛すべき観察眼さ」、そんなことを言う。

「桐壺の更衣が帝の寵愛を受けるようになって、位の高い女御たちよりも、桐壺の更衣と同じ、身分の低い更衣たちの方がうんと焦るんだ。」

女御にとって、更衣なんて下賤の輩はまったく未知の生き物だか

ら、嫉妬といってもいまいちピンとこない。私が悪いんじゃない、あいつらが悪いんだ、って結論に落ち着く。

だけど、まったく同じ条件の更衣たち、つまり同じ土俵に立つて人間は、まさしく真っ向から自分を否定されることになる。だから、更衣達の心は「まして」やすからず」なのさ」

「……何が言いてえの？」

「そもそも、土俵の認識が違っていたら？」

びしり、と黒い爪の先を眼前に突き付けられる。

「タカは今、伊吹にとっての田中を特別な“友達”と見なしているようだけれど、そこが違っていたら？」

それこそ、田中が王子にとって唯一の“特別な人”だったら？」

メガネの奥、重そうな睫毛の下の、飴色の瞳が好奇に光る。

……呆れた。あいつらまでホモにしたいのか。

「お前さあ、あんまり人様を自分の妄想に巻きこむなよなあ」

「あながち妄想とも言い切れねんじゃね？」

村木は視線を傍らの窓に投げ掛ける。それに倣うことはできなかった。

「……やめろよ気色悪い」

笑い飛ばせないのはなんでだろう。

湿り気を帯びた窓から背を放す。相手するのもバカバカしくなってきた。早足で歩きだせば、村木もひよこひよこことついてくる。

「えー、差別発言だー」

「うっせーなー、お前こそソッチの人に失礼じゃん、むやみやたらと囃したてて」

「ねえ、マジな話、あいつらデキてたら、あんたどうする？」

横目で傍らを窺えば、いつものうさんくさい笑みは引っ込んで、感情が窺えないひどく大人びた顔があつて。

「……そうなったときに考えるよ」

頬を刺す静かな視線が妙に居心地悪くて、俺は雨音に合わせてまた足を速めた。

10. カフェ smile

香南学園から徒歩十分、駅前の商店街の一角に佇む赤い屋根の小さな喫茶店、カフェ「smile」。ここが今の俺のバイト先だ。

こんにちは、と声をかけ店内へ足を踏み入れれば、常連さん達が挨拶を返してくれたり会釈してくれたり。アットホームな挨拶の応酬の中、シンプルなエプロン姿の女性がカウンターからひよっこり顔を出した。

「あらーハルちゃん、こんにちは。随分と早いわね」

「こんにちは店長。今日は午後丸々生徒総会だったんで、解散がちょっと早かったんすよ」

「ああ、花歩がそんなこと言ってたかも」

俺は店長への挨拶もそこそこに、店内奥の扉から裏へ回り、申し訳程度の事務スペースに設けられた小さな棚に荷物を収めた。制服のセーターを無造作に放り、黒いシンプルなエプロンをシャツの上からそのまま掛ける。袖をまくって、手を洗って、身なりを店長にチェックしてもらう。よしオーケー、と彼女は満足げに頷いて、待ちきれないとばかりにまくったばかりの俺の袖を引いた。

「ねえ、生徒総会って、中央委員のお仕事なんでしょ？ あの子ちゃんと言った？」

「しっかりやってましたよ。相変わらず人気者で」

見上げる顔は、年を感じさせない澁刺とした表情で、可憐なあの幼馴染にはあまり似ていない。義母なのだ、とそれとなく聞いたことがあるだけで、詳しいことは実はあまり知らない。ただ、幼いころに一度だけ見かけた彼女の実母は、娘と同じく小柄ながらも、寒気すら覚えるほどの美しさだったことはよく覚えている。

店長は他人の口から聞く娘の活躍にようやく安堵したようで、上機嫌で厨房へ戻ってしまった。近々新しい焼き菓子をメニューに加えるのだと言っていた気がする。

必然的に表に立たされた俺は、おかわり、と差し出された常連のじいさんのマグカップにドリップコーヒーを注いでやる。お喋り好きのじいさんは、厨房へ消えた店長とカウンターの俺を見比べて、「セートソーカイってなんぞ」と尋ねてきた。

「あー、今年と昨年度のクラス・部活ごとの予算とか、委員会の活動報告とか。あと、事前にクラスでまとめてきた学校に対する要望だとか意見だとかを全校生徒で論ずるっていう集会なんです。花歩はこの会を運営する役員なので、ここ数日ががんばってまして」

香南の生徒総会は、上層機関（生徒会）と生徒との中立をはかるため、中央委員と監査委員によって執り行われるのが伝統とされている。中央副委員長である花歩も、ここ数日は忙しそうに走り回っていた。

今日の全校総会でも、花歩が前に出て話す度に歓声やらエールやらが上がり、やりづらそうではあったけど、なんとか無事に成し遂げたことに俺までほっとしたり。ああそうだ、歓声というと。

（伊吹への歓声もすさまじかったな……）

さすが「学園の王子様」の名は伊達ではないというか。一声発する度に女子の悲鳴。途中でそれとなく咎めたら演説中は大分収まったが、一区切りついたらまた悲鳴。話もなかなか進まないし普通ならかなりイラつくだろう所を、伊吹は嫌な顔一つせず、所々で注意を入れつつ、かなり簡潔にまとめて、妨害とも言える迷惑な歓声もなんのその、予定通りの時間内にさらっと終えてしまった。

なんだか伊吹と出会ってから、俺は感心してばかりの気がする。どうも事なかれ主義の俺は、面倒事はできるだけ避け、楽な方へ楽な方へと逃げがちだけど、伊吹は違う。周囲にとって、そして己にとって最良の道をきちんと取捨選択して、それを成し遂げるために労力を惜しまない。今日の生徒総会もそうだろう。考え抜いて努力して、そして最善の結果をもぎ取るのだ。外見だけじゃない。生き方もカッコイイ。だからこんなにも人を惹きつけるのだろう。実際、当初よりかなり興味を引かれている自分に心の中で苦笑する。

（こんなにすごいやつと、友達なんだもんなあ、俺）

嬉しくて誇らしくて、くすぐったい気持の反面。

なんだろう。この、焦燥感。

「……なあハル坊、溢れとらんかそれ」

じいさんの呆れたようなツツコミが耳に入り、俺は慌てて手元に意識を向ける。

「へ？ ああ、ほんとだ」

やばい、ボーっとしてた。白いマグカップに、滝のように注がれる黒い液体は、縁ギリギリを波打ちながら、無意識に傾けていた向こう側へだばだばと流れ落ちていく。

冷静なんだかそうでないんだか、俺はそっとカップを置きつつ雑巾を視線で探す。しかし先にお客さんへコーヒーを出さねば。新しいカップに手を伸ばしたところで、軽やかなベルの音がちりんと店内に鳴り響いた。

「お母さん、ただいまー」

聞き慣れた可憐な声に顔を向けて、固まる。

「「……！！」」

店の入り口、帰宅した看板娘の隣には、まさに先程まで思いつけていた学園の王子様、目を丸くしてこちらを見つめる（それでもイケメンな）、伊吹の姿があった。

「ハルのバイト先ってここだったんだ」

花歩に促されカウンター席に腰を落ち着けた伊吹は、喜色を滲ませて綺麗に笑う。

どうにも照れくさくて、顔をしかめて無言で頷いた途端、店を震わす黄色い悲鳴。老若問わず、ボルテージを跳ね上げる女性客。怯える男性客、俺含む。

気持ちとは分からんでもないけど……なんたって、滅多にお目にかかれないレベルの美男子だ。それにしても悲鳴を上げるおばさま達の迫力は、普段よく聞く女子高生の歓声の比でなく、なんというか、

すごい。まさに怒涛の勢い。

「あらあらまあまあ！ 男前なお兄さんねえ！」

「イケメン、イケメンよお！！ やだわお婆さんがもう少し若ければ！」

「素敵ねえ、いい男捕まえたわねえ！ 花歩ちゃんの彼氏！？」

「違いますよー」

頬を染めて騒ぎ出す主婦集団の興奮気味の追求に、花歩はにっこり笑って否定して、俺に軽く手を振りそのまま店の奥へと逃げ込んでしまった。よろしくってことらしい。んな無茶な。さすがの伊吹もあまりの迫力に、苦笑いで固まっている。

騒ぎを聞きつけたのか、入れ替わりに現れた店長が、目をまん丸くして声を張り上げた。

「あらやだイケメン！！ ちょっと花歩、あんたの彼氏！？」

「違うよー」

先程と同じくさらっと否定して、リボンを外した制服のシャツとスカートにエプロンを引っ掛けた姿で花歩がカウンターに現れる。ごめんね、と小声で伊吹に苦笑いを投げかけた後、「ハルちゃんチエックー」と掌を差し出された。が、コーヒーの水溜りに気付いたのか、驚いた様子で一步後ずさる。

「どしたのこれ」

「あー、溢した」

「珍しいねえ」

そして俺の代わりに傍にあった雑巾で床を拭ってくれる。その間に、俺はささっと淹れ直して、なぜかニヤニヤと意地悪く笑うじいさんに無然とコーヒーを渡してやった。俺達のやり取りで店長もようやくコーヒー浸しの床に気付いたらしく、ぽかんとした表情を俺に向ける。

「あらやだ……ハルちゃんが珍しく動揺してるわ……」

どこことなく楽しそうな声音は聞かなかったことにしよう。

俺は花歩と一緒に床のコーヒーをなんとか綺麗にふき取り、伊吹の方もおばさま達のマシンガントークやOL客のメアド交換しましよ攻撃をうまく凌いで、ようやく一息ついたところで、俺たちはどちらともなく顔を見合わせた。

「つーか伊吹、なんでお前がこの店に……」

「ああ、岡崎さんが、今日の総会お疲れ様ってことで、いい所へ連れてってくれるって言うから」

どことなく疲れた様子で、しかし笑顔を保ったまま伊吹は答える。花歩はカウンターからホールへ降りて、伊吹の肩に手を添えて顔を覗き込み、にっこり笑いかけた。

「わたしのお母さんのお店なんだよ」

へえ、そうなんだ、と声を明らめる伊吹と、にこにこ手振り身振りで話を進める花歩は、お似合いの微笑ましいカップルに見える。二人が付き合っているわけではないことは分かっているけれど、あまりに麗しい美形二人の空気に、口挟んでいいのかな、と少し逡巡していると、「ハルちゃん」と密やかに名を呼ばれた。辺りを見回せば、厨房とカウンターを繋ぐ提供口から、店長がちよいちよいと手招いている。

「なんですか」

「気になるの？ あの二人」

「別に……」

大体、コーヒーを溢したのは彼らが来店する前だったんだけど。

言い訳に聞こえそうだから敢えて言わないが。

気になる、ってほどではない、と思う。過去の彼氏を含め、花歩が男を連れてくるのは珍しいけど皆無ではない。ただ、それが俺と共通の知り合いってのは初めてな気がする。

寂しいとか悔しいとかじゃなく、ただなんとなく落ち着かない。ぼんやり考えていたら、向こうから花歩に呼びかけられた。ゆっくりにした足取りで再びカウンターへ戻ると、何か淹れてとせがまれる。

「はあ、お前今飲むの？」

「わたしも飲みたいけど、まずは伊吹くんに。お疲れってことで、わたしの奢り！」

「え、悪いよ」

「いいって。そもそも金なんてとんねーし」

謙遜する伊吹に声をかけてやれば、ちょっと困ったように笑われる。

……ん？

小さな違和感。いつもなら甘ったるい笑顔で応えるだろうに。もしかして俺ジャマ？とか嫌な憶測が過ぎるが……まあいいや、気にしない。邪魔しちまうのは仕方ないさ、俺はこのスタッフなんだから。

「何飲む？」

「わたしアイスのロイヤルミルクティー。バニラフレーバーで！」

「自分で淹れろ」

ミルクティーなら作り置きを注ぐだけだろう。呆れて告げれば、花歩は頬を膨らませながらも素直に冷蔵庫へ向かった。

カウンター席の伊吹に向き直る。かすかに強張る両肩。……なんかこいつ、

「緊張してる？」

「……ちよっと」

「あー、知り合いの親の前とか、なんか緊張するよな」

苦笑いで肩を回せば、小さく笑われる。……やっぱ美形だよなあ、こいつ。

気を取り直して再度メニューを尋ねれば、少し黙考した後、「エスプレッソが飲みたいな」、とひどく優しい声音で返ってきた。

「ああ、好きって言ってたっけ。なんつーか、腕を問われるな……」

「まさかほんとに飲めるとは思わなかったなあ。楽しみだよ」

心なしか弾んだ声に、なんだかこちらまで頬が緩んでしまう。俺は気を引き締め、マシンから勢いをつけてハンドルを取り外した。

こいつは舌が肥えてそうだから、ただでさえバリスタの腕が味に直接に響くエスプレッソのこと、ものすごく気を使って淹れてみた。フィルターが熱いうちに、素早く適量の豆を詰める。タンピングは均等に。抽出は旨味・苦味・雑味のバランスを考えて、注ぐ時はクレマを壊さないように。

恐る恐る差し出したら、一連の作業で既に目を輝かせていた伊吹は、礼を言い笑顔で受け取った。小さいエスプレッソ専用のカップが傾く様を、俺は緊張とともにじっと見つめる。

「……どうだ？」

「おいしい！」

すっごくおいしいよ、ハル！！」

きらっきらの笑顔と共に、嘘偽りなど微塵も感じさせない明るい声。俺はほっと胸を撫でおろした。……正直、ものすごく嬉しい。

伊吹は感激した様子で更に何か言いたそうだったが、飲むのに夢中なのかカップから口を離せぬようで、一口飲んでうっとり息をついたり、なかなか忙しそうだ。子供みたいだ、と先程とは少し違った笑いがこみ上げる。けれど、

「大人だねえ……」

横で甘ったるいミルクティーをストローですすり、感心した様子でしみじみと呟く花歩の更に子供じみた様子に、俺は耐えきれず笑い出した。

「ハルって、バリスタの資格とか持ってるの？」

「いや。いつか取りたいなーとは思ってるけど」

「ハルちゃんのコーヒーおいしいもんねえ」

俺たちは主婦の団体客がキャーキャー言いながら店を去った後、奥のテーブル席で三人のんびりくつろいでいた。そんなに客足の激しい店でもないで、これくらいなら全然人手も間に合う。

「うん、ほんとにおいしかった。びっくりしたよ、手際もいいし」

「そいつはどうも……」

「職人！って感じで、かっこよかった」

なんだか真実カッコイイ人間に言われると、嬉しいような恥ずかしいような。緊張も解けてきたのか、楽しげな伊吹の様子に、花歩もくすくすと穏やかに笑う。

「伊吹くんもやってみる？」

「うーん、俺はいいや」

「そう？ バイトとか興味あったら、うちのお店にぜひって思ったんだけど」

伊吹くんすつごくお客さん引いてくれそうだし、と冗談なんだか本気なんだか、花歩が言う。

「俺、バイトとか禁止されててさ。家が厳しくて」

ああ、前に聞いた気がする。あの時はなんだか随分と寂しそうな表情を見せていたけれど、今は妙なほどにけろりとしている。無理に隠しているのかもしれない。そのため、何も知らない花歩は「そうなの？」と首を傾げて続きを促している。

一瞬、あまり突っ込んだじゃまずいのでは、と頭をよぎるけれど、ここで不自然に話を遮るのもどうだろうと判断して、俺は無言で様子を窺う。

伊吹は薄く笑みを刷いたまま、感情を押し込めたような高質な声音で、けれどどこか優雅に淡々と語り出した。

「……俺さ、一年生の時に、親に隠れてバイトしてみたことがあったんだ。社会勉強に……って思ってた。家から四駅くらい離れたファミレスなんだけど。」

最初は順調にいったんだけど、途中で家族にばれちゃって。激怒した父が……ああ、この人すごくお金持ちのお偉いさんでね、ファミレスに圧力かけて、結局そのお店を潰しちゃったんだ」

ぽかん、と空気が一瞬呆ける。んな、漫画みたいなこと。

大袈裟にジェスチャーをつけて、「ひどいよねえ」、なんて、わざとらしい程にあっけらかんと彼は笑った。

……こいつ、絶対無理してる。

笑うべきか同情すべきか、どう反応していいか戸惑う俺の隣で、マイペースにミルクティーをすすっていた花歩が、「すごいねえ、伊吹くんのお父さん」、と特に面白がるでも引くでもなく、ただ少しだけ驚いた、といった上手い調子で明るい声を上げた。「ひどいよねえ」、と苦笑いで再び彼は答える。

でもね、と。茶目つけたつぷりに愛らしく笑って、花歩は続ける。「うちはそんなんじゃないよ。

そもそもそんな儲かってないんだから！」

ちようど通りすがりの店長にスコン、と頭を叩かれ、店内はどつと笑いで沸いた。

＊ ＊ ＊

「一雨くるかねえ」

カウンター席で新聞を広げていた男性客が、窓を見上げて低い声で呟いた。

店長のご厚意で出されたロールケーキをつついていた俺たちは、倣って傍らの窓を覗く。たしかに、白い空は不気味に薄暗く、いかにも重たげな分厚い雲がずっしりと天を覆っていた。

おもむろに伊吹が立ち上がる。

「あ、じゃあ俺お暇しようかな」

「そうだねえ、本格的に降る前に」

手際良くカップを片付ける花歩と、身支度を始める伊吹を横目に確認して、俺は一度店の裏、荷物を置いているロッカーへ戻る。エプロンを外し、置きっぱなしのジャケットを羽織り、いざ店を出よ

うとする伊吹に駆け寄った。

「駅まで送るよ」

「え？」

念のためビニール傘を手に取り、見送りに出ていた花歩を振り返る。

「花歩、俺ちよっと出るわ」

「はい」

花歩はにっこり笑って、一度だけ視線を俺の向こうの、伊吹に向けた。何を見たのかは知らないが、彼女は大笑しそうに笑みを深め、背伸びしたと思ったら、ぐいと強く襟を引かれた。促されるまま身を屈めれば、耳をくすぐる囁き声。優しいねえ、と。

お見通しってことらしい。なんだか居た堪れなくて大仰に顔をしかめれば、花歩はころころと可憐に笑った。

「行つてらっしゃい。伊吹くんを、よろしくね」

ことさら丁寧に言葉を紡ぎ、花歩はくると伊吹に向き直る。

「伊吹くんも。今日はありがとう」

「ううん、こちらこそありがとう。おいしかったよ」

「またいつでも来てね！」

笑顔で手を振る花歩に見送られ、俺たちは店を後にした。

商店街の角を曲がって、店がすっかり見えなくなつてから、俺は困惑している様子で後ろをついてくる伊吹をちよいちよいと手招いた。

ちよっと遠回りになるけれど、この道からでも駅には辿り着く。

俺は香南の生徒がいつも用いる通学路ではなく、人通りの極端に少ない鉄橋の下を選んで進んだ。すぐ傍らの道路は車の行き来が激しいものの、こちらの道は驚くほど人気がない。巨大で頑丈な鉄橋は辺り一帯に薄暗い影を落とし、上を走る電車たちを豪快に送りだし

ている。

「……あの、ハルっ！」

沈黙に耐えかねたのか、伊吹がらしくなく切羽詰まった声を上げた。俺はのんびり振り返る。少し離れた距離にいた伊吹を再び手招いて、傍に寄らせる。車が来たら危ないから。

伊吹は躊躇いながらもそっと距離を詰める。うんと近づく美貌に、なんとなく落ち着かなくて、俺は足元に視線を落とした。

先程の、妙に明るいついでに語られた、伊吹の過去のバイトの話。ひどいよねえ、と繕った笑顔。

いつかの春の日、学校の車寄せで、同じ話題でふとちらつかせた暗い表情。

この話題が伊吹にとって、触れたくないものなのだろうことは何となく分かる。

ただ、あの伊吹が、ここまであからさまに表に出すほどだ。どれだけこいつは傷ついているのだろう。忍耐強い伊吹が、ふと触れるだけで顔をしかめる。それほどまでに痛む傷。

わざと明るく振る舞う痛々しい笑顔に、花歩のおどけた言葉にホッと肩の力を抜くその姿に。

じっとしていらなかった。

「……俺、喋るのあんまり上手くないけど。花歩や高階みたいに、気の利いた事ちつとも言えないけど」

あの日、トイレの中で気丈にも声を震わせていたこいつは、誰一人傷つけまいと、色んな想いを飲み込んで、飲み込んで。それでもこっそり「理解された」ことに、眩いほどに歓喜して。

救う、なんておこがましいかもしれないけれど。

「辛いなら、吐き出せば？」

伝わればいい。苦しんでるお前のこと、救いたいと思う人間がいるってこと。

遡る記憶、笑い合う両親、暖かい母の手。

（お前みたいなお前さんになんて、とてもなれそうにないけれ

ど)

「聞くことなら、俺にもできるよ」

ゆっくりと顔を上げる。いつになく表情のない、人形のように整った白い顔。時すら凍りつかせる美貌を、まっすぐ見つめる。躊躇いに揺れる薄い瞳。

ぽつり、と。

とうとう空が泣きだした。俺は内心舌を打ち、ビニール傘を広げる。

一つしか持ってきていないので、伊吹が濡れないようにと身を寄せれば、ひどくか細い声が耳に入った。

「……ファミレス、潰されちゃったって言ったじゃない」

目の前には俯いた伊吹の、いつになく弱々しい姿。長い前髪に遮断され、表情は窺えない。雨音を遠くに聞きながら、懺悔は続く。

「あの時ね、店長さんとか、正規の店員さんとかさ、皆クビにされちゃったんだ。クビだよ、クビ。」

正面切って俺に文句なんて言えないんだろうけど、そりゃもうとんでもなく絶望していることなんて一目で分かった。なんかもう、ね」

吐き捨てるように彼は言う。

「子供がいるのに、とか。これから生活どうしよう、とか。」

ああ、人様の人生狂わせちゃったんだなあ、って」

痛々しい声音に思わず目を伏せる。視界の先に震える拳。関節が白くなるまで握りしめられたそれを、そっと指先で触れてみる。

「こういうの、べつに初めてじゃないけどさ。俺、親のこともひってくるめて、自分に影響力があること、よく分かっているよ。あんまり迂闊に動いちゃいけない、失敗しちゃいけない。バイトのことは軽率だったと後悔してる。」

親の言う通りに、敷かれたレール通りに、差し障りなく周りに迷惑かけずに生きろってことかもしれない」

彼の拳がおもむろに開く。拳に添えていた俺の手は、燃えるよう

に熱い彼の手にゆっくりと捉われる。

「……一度きりの人生だから。」

俺は、本気で、全力で、生きてみたいんだよ」
でもね、と。指先を痛い程に握られる。

「怖いんだ……」

こつり、と額に暖かい感触。彼の柔らかい茶髪が視界の左右を覆い、世界は俺と彼の二人きりになる。

ぱたり。

空知らぬ雨が頬を伝う。

ごめんね、と、雨音に溶け込んだ掠れ声。震える身をすり寄せるこの男を、いつになく寂しく思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6056h/>

ラブドワン

2011年8月22日09時52分発行